



Informatica® Informatica
10.0

**バージョン 9.5.1 からのア
ップグレード**

Informatica Informatica バージョン 9.5.1 からのアップグレード

10.0

2015 年 11 月

© 著作権 Informatica LLC 1998, 2018

本ソフトウェアおよびマニュアルには、Informatica LLC の所有権下にある情報が収められています。これらは使用および開示の制限等を定めた使用許諾契約のもとに提供され、著作権法により保護されています。本ソフトウェアのリバースエンジニアリングは禁じられています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複写、写真複写、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。このソフトウェアは、米国および/または国際的な特許、およびその他の出願中の特許によって保護されています。

合衆国政府によるソフトウェアの使用、複製または開示は、DFARS 227.7202-1 (a) および 227.7702-3 (a) (1995 年)、DFARS 252.227-7013(C) (1) (ii) (1988 年 10 月)、 FAR 12.212 (a) (1995 年)、 FAR 52.227-19、または FAR 52.227-14 (ALT III) に記載されているとおりに、当該ソフトウェア使用許諾契約に定められた制限によって規制されます。

本製品または本書の情報は、予告なしに変更されることがあります。お客様が本製品または本書内に問題を発見された場合は、書面にて当社までお知らせください。

Informatica、Informatica Platform、Informatica Data Services、PowerCenter、PowerCenterRT、PowerCenter Connect、PowerCenter Data Analyzer、PowerExchange、PowerMart、Metadata Manager、Informatica Data Quality、Informatica Data Explorer、Informatica B2B Data Transformation、Informatica B2B Data Exchange、Informatica On Demand、Informatica Identity Resolution、Informatica Application Information Lifecycle Management、Informatica Complex Event Processing、Ultra Messaging、および Informatica Master Data Management は、Informatica LLC の米国および世界中の管轄地での商標または登録商標です。その他のすべての企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメントの一部は、次のサードパーティが有する著作権に従います（ただし、これらに限定されません）。Copyright DataDirect Technologies. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Sun Microsystems. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) RSA Security Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Ordinal Technology Corp. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Aandacht c.v. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Genivia, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright Isomorphic Software. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Meta Integration Technology, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Intalio. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Oracle. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Adobe Systems Incorporated. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) DataArt, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) ComponentSource. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Microsoft Corporation. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Rogue Wave Software, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Teradata Corporation. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Yahoo! Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Glyph & Cog, LLC. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Thinkmap, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Clearpache Software Limited. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Information Builders, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) OSS Nokalva, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Edifecs, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Cleo Communications, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) International Organization for Standardization 1986. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) ej-technologies GmbH. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Jaspersoft Corporation. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) International Business Machines Corporation. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) yWorks GmbH. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Lucent Technologies. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) University of Toronto. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Daniel Veillard. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Unicode, Inc. Copyright IBM Corp. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) MicroQuill Software Publishing, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) PassMark Software Pty Ltd. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) LogiXML, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) 2003-2010 Lorenzi Davide. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Red Hat, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) The Board of Trustees of the Leland Stanford Junior University. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) EMC Corporation. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Flexera Software. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Jinfonet Software. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Apple Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Telerik Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) BEA Systems. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) PDFlib GmbH. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Orientation in Objects GmbH. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Tanuki Software, Ltd. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Ricebridge. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Sencha, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Scalable Systems, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) jQWidgets. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Tableau Software, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) MaxMind, Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) TMate Software s.r.o. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) MapR Technologies Inc. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Amazon Corporate LLC. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Highsoft. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) Python Software Foundation. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) BeOpen.com. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。Copyright (C) CNRI. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。

本製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) によって開発されたソフトウェア、およびさまざまなバージョンの Apache License（まとめて「License」と呼んでいます）の下に許諾された他のソフトウェアが含まれます。これらのライセンスのコピーは、<http://www.apache.org/licenses/> で入手できます。適用法にて要求されないか書面にて合意されない限り、ライセンスの下に配布されるソフトウェアは「現状のまま」で配布され、明示的あるいは黙示的のかを問わず、いかなる種類の保証や条件も付帯することはありません。ライセンス下での許諾および制限を定める具体的な文言については、ライセンスを参照してください。

本製品には、Mozilla (<http://www.mozilla.org/>) によって開発されたソフトウェア、ソフトウェア copyright The JBoss Group, LLC, コンテンツの無断複写・転載を禁じます、ソフトウェア copyright Red Hat Middleware, LLC, コンテンツの無断複写・転載を禁じます、Copyright (C) 1999-2006 by Bruno Lowagie and Paulo Soares および GNU Lesser General Public License Agreement (<http://www.gnu.org/licenses/lgpl.html> を参照) に基づいて許諾されたその他のソフトウェアが含まれています。資料は、Informatica が無料で提供しており、一切の保証を伴わない「現状渡し」で提供されるものとし、Informatica Corporation は市場性および特定の目的の適合性の默示の保証などを含めて、一切の明示的及び黙示的保証の責任を負いません。

製品には、ワシントン大学、カリフォルニア大学アーバイン校、およびバンバービルト大学の Douglas C.Schmidt および同氏のリサーチグループが著作権を持つ ACE (TM) および TAO (TM) ソフトウェアが含まれています。Copyright (C) 1993-2006, コンテンツの無断複写・転載を禁じます。

本製品には、OpenSSL Toolkit を使用するために OpenSSL Project が開発したソフトウェア（copyright The OpenSSL Project. コンテンツの無断複写・転載を禁じます）が含まれています。また、このソフトウェアの再配布は、<http://www.openssl.org> および <http://www.openssl.org/source/license.html> にある使用条件に従います。

本製品には、Curl ソフトウェア Copyright 1996-2013, Daniel Stenberg, <daniel@haxx.se> が含まれます。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://curl.haxx.se/docs/copyright.html> にある使用条件に従います。すべてのコピーに上記の著作権情報とこの許諾情報が記載されている場合、目的に応じて、本ソフトウェアの使用、コピー、変更、ならびに配布が有償または無償で許可されます。

本製品には、ソフトウェア copyright 2001-2005 (C) MetaStuff, Ltd. コンテンツの無断複写・転載を禁じます。が含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.dom4j.org/license.html> にある使用条件に従います。

製品には、ソフトウェア copyright (C) 2004-2007, The Dojo Foundation が含まれます。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://dojotoolkit.org/license> にある使用条件に従います。

本製品には、ICU ソフトウェア copyright International Business Machines Corporation および他のソフトウェアが含まれます。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://source.icu-project.org/repos/icu/icu/trunk/license.html> にある使用条件に従います。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 1996-2006 Per Bothner が含まれます。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。お客様がこのようなソフトウェアを使用するための権利は、ライセンスで規定されています。<http://www.gnu.org/software/kawa/Software-License.html> を参照してください。

本製品には、OSSP UUID ソフトウェア Copyright (C) 2002 Ralf S. Engelschall, Copyright (C) 2002 The OSSP Project Copyright (C) 2002 Cable & Wireless Deutschland が含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.opensource.org/licenses/mit-license.php> にある使用条件に従います。

本製品には、Boost (<http://www.boost.org/>) によって開発されたソフトウェア、または Boost ソフトウェアライセンスの下で開発されたソフトウェアが含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、http://www.boost.org/LICENSE_1_0.txt にある使用条件に従います。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 1997-2007 University of Cambridge が含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.pcre.org/license.txt> にある使用条件に従います。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 2007 The Eclipse Foundation が含まれます。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.eclipse.org/org/documents/epl-v10.php> および <http://www.eclipse.org/org/documents/edl-v10.php> にある使用条件に従います。

本製品には、<http://www.tcl.tk/software/tcltk/license.html>、<http://www.bosrup.com/web/overlib/?License>、<http://www.stlport.org/doc/license.html>、<http://www.asm.ow2.org/license.html>、<http://www.cryptix.org/LICENSE.TXT>、<http://hsqldb.org/web/hsqLlicense.html>、<http://httpunit.sourceforge.net/doc/license.html>、<http://jung.sourceforge.net/license.txt>、http://www.gzip.org/zlib/zlib_license.html、<http://www.openldap.org/software/release/license.html>、<http://www.libssh2.org>、<http://slf4j.org/license.html>、<http://www.sente.ch/software/OpenSourceLicense.html>、<http://fusesource.com/downloads/license-agreements/fuse-message-broker-v-5-3-license-agreement>、<http://antlr.org/license.html>、<http://aopalliance.sourceforge.net/>、<http://www.bouncycastle.org/licence.html>、<http://www.jgraph.com/jgraphdownload.html>、<http://www.jcraft.com/jsch/LICENSE.txt>、http://jotm.objectweb.org/bsd_license.htmlに基づいて許諾されたソフトウェアが含まれています。<http://www.w3.org/Consortium/Legal/2002/copyright-software-20021231>、<http://www.slf4j.org/license.html>、<http://www.nanoxml.sourceforge.net/orig/copyright.html>、<http://www.json.org/license.html>、<http://forge.ow2.org/projects/javaservice/>、<http://www.postgresql.org/about/licence.html>、<http://www.sqlite.org/copyright.html>、<http://www.tcl.tk/software/tcltk/license.html>、<http://www.jaxen.org/faq.html>、<http://www.jdom.org/docs/faq.html>、<http://www.slf4j.org/license.html>、<http://www.iodbc.org/dataspace/iodbc/wiki/iODBC/License>、<http://www.keplerproject.org/m5d/license.html>、<http://www.toedter.com/en/jcalendar/license.html>、<http://www.edankert.com/bounce/index.html>、<http://www.net-snmp.org/about/license.html>、<http://www.openmdx.org/#FAQ>、http://www.php.net/license/3_01.txt、<http://srp.stanford.edu/license.txt>、<http://www.schneier.com/blowfish.html>、<http://www.jmock.org/license.html>、<http://xsom.java.net>、<http://benalman.com/about/license/>、<https://github.com/CreateJS/EaselJS/blob/master/src/easeljs/display/Bitmap.js>、<http://www.h2database.com/html/license.html#summary>、<http://jsoncpp.sourceforge.net/LICENSE>、<http://jdbc.postgresql.org/license.html>、<http://protobuf.googlecode.com/svn/trunk/src/google/protobuf/descriptor.proto>、<http://github.com/rantav/hector/blob/master/LICENSE>、<http://web.mit.edu/Kerberos/krb5-current/doc/mitk5license.html>、<http://jibx.sourceforge.net/jibx-license.html>、<https://github.com/lyokato/libgeohash/blob/master/LICENSE>、<https://github.com/hjiang/jsonxx/blob/master/LICENSE>、<https://code.google.com/p/lz4/>、<https://github.com/jedisct1/libodium/blob/master/LICENSE>、<https://one-jar.sourceforge.net/index.php?page=documents&file=license>、<https://github.com/EsotericSoftware/kryo/blob/master/license.txt>、<http://www.scala-lang.org/license.html>、<https://github.com/tinkerpop/blueprints/blob/master/LICENSE.txt>、<http://gee.cs.oswego.edu/dl/classes/EDU/oswego/cs/dl/util/concurrent/intro.html>、<https://aws.amazon.com/asl/>、<https://github.com/twbs/bootstrap/blob/master/LICENSE>、および <https://sourceforge.net/p/xmlunit/code/HEAD/tree/trunk/LICENSE.txt>。

本製品には、Academic Free License (<http://www.opensource.org/licenses/afl-3.0.php>)、Common Development and Distribution License (<http://www.opensource.org/licenses/cddl1.php>)、Common Public License (<http://www.opensource.org/licenses/cpl1.0.php>)、Sun Binary Code License Agreement Supplemental License Terms、BSD License (<http://www.opensource.org/licensesbsd-license.php>)、BSD License (<http://opensource.org/licenses/BSD-3-Clause>)、MIT License (<http://www.opensource.org/licenses/mit-license.php>)、Artistic License (<http://www.opensource.org/licenses/artistic-license-1.0>)、Initial Developer's Public License Version 1.0 (<http://www.firebirdsql.org/en/initial-developer-s-public-license-version-1-0/>) に基づいて許諾されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 2003-2006 Joe Walnes, 2006-2007 XStream Committers が含まれています。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://j.org/license.html> にある使用条件に従います。本製品には、Indiana University Extreme! Lab によって開発されたソフトウェアが含まれています。詳細については、<http://www.extreme.indiana.edu> を参照してください。

本製品には、ソフトウェア Copyright (C) 2013 Frank Balluffi and Markus Moeller が含まれています。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、MIT ライセンスの使用条件に従います。

特許については、<https://www.informatica.com/legal/patents.html> を参照してください。

免責: 本文書は、一切の保証を伴わない「現状渡し」で提供されるものとし、Informatica LLC は他社の権利の非侵害、市場性および特定の目的への適合性の默示の保証などを含めて、一切の明示的および默示的保証の責任を負いません。Informatica LLC では、本ソフトウェアまたはドキュメントに誤りのないことを保証していません。本ソフトウェアまたはドキュメントに記載されている情報には、技術的に不正確な記述や誤植が含まれる場合があります。本ソフトウェアまたはドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。

NOTICES

この Informatica 製品（以下「ソフトウェア」）には、Progress Software Corporation（以下「DataDirect」）の事業子会社である DataDirect Technologies からの特定のドライバ（以下「DataDirect ドライバ」）が含まれています。DataDirect ドライバには、次の用語および条件が適用されます。

1. DataDirect ドライバは、特定物として現存するままの状態で提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは默示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。
2. DataDirect または第三者は、予見の有無を問わず発生した ODBC ドライバの使用に関するいかなる直接的、間接的、偶発的、特別、あるいは結果的損害に対して責任を負わないものとします。本制限事項は、すべての訴訟原因に適用されます。訴訟原因には、契約違反、保証違反、過失、厳格責任、詐称、その他の不法行為を含みますが、これらに限るものではありません。

発行日: 2018-07-04

目次

序文	9
Informatica のリソース.....	9
Informatica マイサポートポータル.....	9
Informatica マニュアル.....	9
Informatica 製品可用性マトリックス.....	9
Informatica の Web サイト.....	10
Informatica How-To ライブラリ.....	10
Informatica ナレッジベース.....	10
Informatica サポートの YouTube チャンネル.....	10
Informatica Marketplace.....	10
Informatica Velocity.....	10
Informatica グローバルカスタマサポート.....	10
第 1 章 : アップグレードの概要	12
Informatica のアップグレード.....	12
Informatica Upgrade Paths.....	12
アップグレードプロセス.....	14
Business Glossary のアップグレード.....	15
第 2 章 : Windows でドメインをアップグレードする前に	17
リリースノートの確認.....	17
パッチ要件の確認.....	18
ドメインアップグレード要件の確認.....	18
一時的なディスク容量要件.....	18
アプリケーションサービスのハードウェア要件の確認.....	19
環境変数の確認.....	20
最大ヒープサイズの確認.....	21
インストーラファイルの抽出.....	22
インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行.....	22
第 3 章 : UNIX でドメインをアップグレードする前に	25
リリースノートの確認.....	25
パッチ要件の確認.....	26
Java Development Kit のインストール.....	26
ドメインアップグレード要件の確認.....	27
一時的なディスク容量の要件.....	27
アプリケーションサービスのハードウェア要件の確認.....	28
環境変数の確認.....	29
ファイル記述子の制限の設定.....	30
最大ヒープサイズの確認.....	31

インストーラファイルの抽出.....	31
インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行.....	32
第4章 : アップグレードの準備.....	35
Data Transformation ファイルのバックアップ.....	35
PowerCenter リポジトリの準備.....	36
モデルリポジトリの準備.....	36
リポジトリのバックアップ.....	36
データベースユーザーアカウントの要件の確認.....	36
データ統合サービスの準備.....	37
電子メールサーバーのプロパティの記録.....	37
実行オプションの記録.....	37
すべてのワークフローの完了.....	38
レポートおよびダッシュボードサービスの準備.....	38
Jaspersoft リソースのエクスポート.....	38
Jaspersoft リポジトリのデータベースユーザーの設定.....	39
Profiling ウェアハウスの準備.....	39
参照データウェアハウスの準備.....	39
参照データのディレクトリの準備.....	39
ステージングデータベースの準備.....	40
Metadata Manager の準備.....	40
Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ.....	40
ビジネス用語集のエクスポートと削除.....	40
Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ.....	43
Data Analyzer の準備.....	44
ユーザーとグループへのロールの割り当て.....	44
リポジトリのバックアップ.....	44
ODBC データソース名の記録.....	44
ドメインの準備.....	44
管理者グループの名前変更.....	44
データベースユーザーアカウント要件の確認.....	45
ドメインのシャットダウン.....	45
ドメインのバックアップ.....	45
第5章 : ドメインのアップグレード.....	47
ドメインのアップグレードの概要.....	47
グラフィカルモードでのアップグレード.....	48
コンソールモードでのアップグレード.....	52
サイレントモードでのアップグレード.....	55
プロパティファイルの作成.....	55
サイレントインストーラの実行.....	57
プロパティファイル内のパスワードの保護.....	58
ドメインアップグレードのトラブルシューティング.....	58

第 6 章 : ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード.....	59
ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要.....	59
ノード設定の変更の準備.....	59
別のデータベースへの移行.....	60
別のマシンへのインストールの移行.....	60
グラフィカルモードでのアップグレード.....	65
コンソールモードでのアップグレード.....	71
サイレントモードでのアップグレード.....	76
第 7 章 : アプリケーションサービスをアップグレードする前に.....	77
POSIX Asynchronous I/O の設定.....	77
Informatica の環境変数の設定.....	77
ロケール環境変数の設定.....	78
Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認.....	78
ブラウザキャッシュのクリア.....	79
ノード設定の変更の完了.....	79
環境変数の設定.....	79
動的ポート番号の範囲の確認.....	81
ノードバックアップディレクトリの確認.....	81
PowerExchange アダプタの設定.....	81
第 8 章 : アプリケーションサービスのアップグレード.....	82
アプリケーションサービスのアップグレードの概要.....	82
サービスをアップグレードする特権.....	82
以前のバージョンからのサービスアップグレード.....	83
サービスアップグレードウィザードの実行.....	84
モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認.....	84
オブジェクト依存関係のグラフ.....	85
最大ヒープサイズ.....	85
第 9 章 : Informatica クライアントのアップグレード.....	86
Informatica クライアントのアップグレードの概要.....	86
Informatica クライアントのアップグレードオプション.....	87
グラフィカルモードでのアップグレード.....	87
サイレントモードでのアップグレード.....	88
プロパティファイルの作成.....	89
サイレントインストーラの実行.....	89
第 10 章 : アップグレードした後に.....	91
Informatica ドメイン.....	91
ログイベントディレクトリの更新.....	92
ODBC データソースの更新.....	92

セキュアデータベースの設定.....	92
SMTP 設定プロパティの確認.....	92
ドメインへのクライアントの接続の保護.....	93
Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード.....	93
ODBC データソースの更新.....	94
PowerCenter 統合サービス.....	94
オペレーティングシステムのプロファイル用の Umask の設定.....	94
コンテンツ管理サービス.....	94
ID ポリュレーションファイルの場所の確認.....	94
サービスの再起動.....	95
Data Integration Service.....	95
HTTP プロキシサーバーパスワードのリセット.....	95
ワークフロー オプションの確認.....	95
実行オプションの確認.....	96
要求ごとの最大メモリの確認.....	96
電子メールサービス.....	96
アナリストサービス.....	97
フラットファイルキャッシュの場所の確認.....	97
ヒューマンタスクプロパティの確認.....	97
特権の割り当て.....	97
アナリストサービスのリサイクル.....	98
Business Glossary Desktop.....	98
Business Glossary Desktop ポート番号およびホスト名の変更.....	98
検索サービス.....	99
ビジネス用語集.....	99
手順 1。Metadata Manager のモデルエクスポートファイルのインポート.....	100
手順 2。Business Glossary ファイルのマージ.....	100
手順 3。Business Glossary ファイルのインポート.....	101
手順 4。カテゴリおよび非公開の用語の公開.....	101
Metadata Manager Agent.....	103
Metadata Manager サービス.....	103
Metadata Manager プロパティファイルの更新.....	103
UNIX での ODBCINST 環境変数の確認.....	103
Metadata Manager リソースの移行およびリロード.....	104
Business Glossary リソースの作成.....	107
Metadata Manager ユーザーのロード特権および権限の確認.....	108
Reporting and Dashboards Service.....	109
Jaspersoft 4.7 へのアップグレード.....	109
参照データ.....	110
参照データのディレクトリのリストア.....	110
確率的なモデルのコンパイル.....	110
PowerCenter での分類子モデルおよび確率モデルのプロパティファイルの更新.....	111

PowerCenter でのアドレス参照データ構成ファイルの更新.....	111
プロファイル.....	111
プロファイルおよびスコアカードの結果の移行.....	112
データドメインのインポート.....	112
SQL データサービス用の Informatica ドライバのアップグレード.....	112
ユーザー認証.....	112
Data Transformation ファイルのコピー.....	113
リリースガイドの確認.....	113
付録 A : DB2 データベースの DynamicSections パラメータの更新.....	114
DynamicSections パラメータの概要.....	114
DynamicSections パラメータの更新.....	114
DataDirect Connect for JDBC ユーティリティのダウンロードとインストール.....	115
Test for JDBC Tool の実行.....	115
付録 B : アップグレードチェックリスト.....	116
アップグレードチェックリストの概要.....	116
ドメインをアップグレードする前に.....	116
ドメインのアップグレード.....	118
アプリケーションサービスをアップグレードする前に.....	119
アプリケーションサービスのアップグレード.....	119
Informatica クライアントのアップグレード.....	120
アップグレードした後に.....	120
索引.....	123

序文

バージョン 9.5.1 からのアップグレードは、Informatica 製品からのアップグレードを行うシステム管理者を対象としています。読者には、オペレーティングシステム、リレーションナルデータベースの概念、および使用する環境内のデータベースエンジン、フラットファイル、またはメインフレームシステムについての知識が必要です。また、使用するアプリケーションのインターフェース条件についても理解していることを前提としています。

Informatica のリソース

Informatica マイサポートポータル

Informatica のユーザーは、最初に Informatica マイサポートポータル (<https://mysupport.informatica.com>) から Informatica にアクセスします。マイサポートポータルは、大規模なオンラインデータ統合コラボレーションプラットフォームであり、全世界で 10 万人を超える Informatica の顧客およびパートナーが利用しています。

メンバーは以下の操作を行うことができます。

- 1 つの場所からすべての Informatica のリソースにアクセスできます。
- 自分のサポート事例を確認できます。
- ナレッジベースや製品マニュアルを検索したり、入門ドキュメントを参照したり、サポートビデオを視聴したりできます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルチームは、正確で役に立つマニュアルの作成に努めています。このマニュアルに関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) です。お客様のフィードバックは、マニュアルの改良に利用させていただきます。コメントに返信をご希望のお客様は、その旨をお知らせください。

マニュアルチームは、必要に応じてマニュアルを更新します。製品の最新のマニュアルを入手するには、<https://mysupport.informatica.com> から製品マニュアルにアクセスします。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。PAM は、Informatica My Support ポータル (<https://mysupport.informatica.com>) でアクセスできます。

Informatica の Web サイト

Informatica 社の Web サイトは、<https://www.informatica.com> からアクセスできます。このサイトでは、Informatica 社の概要と沿革、今後のイベント、営業拠点などの情報を提供しています。また、製品情報やパートナー情報も提供しています。サービス関連のページには、テクニカルサポート、トレーニングと教育、および実装に関するサービスの重要な情報を掲載しています。

Informatica How-To ライブラリ

Informatica のユーザーとして、Informatica How-To ライブラリ (<https://mysupport.informatica.com>) にアクセスできます。How-To Library は、Informatica の製品および機能についての詳細を確認できるリソースのコレクションです。一般的な問題に対するソリューションを提供したり、機能や動作を比較したり、特定の実際のタスクを実行するための方法を示したりする記事やインタラクティブなデモンストレーションが含まれています。

Informatica ナレッジベース

Informatica のユーザーとして、Informatica ナレッジベース (<https://mysupport.informatica.com>) にアクセスできます。この Knowledge Base を利用して、Informatica 製品に関する既知の技術的問題の解決策を検索することができます。また、FAQ（よくある質問）の答え、技術的ホワイトペーパー、技術的なヒントも得られます。Knowledge Base に関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica サポートの YouTube チャンネル

<http://www.youtube.com/user/INFASupport> で Informatica サポートの YouTube チャンネルにアクセスできます。Informatica サポートの YouTube チャンネルでは、特定のタスクを実行するソリューションについてのビデオを用意しています。Informatica サポートの YouTube チャンネルに関する質問、コメント、またはアイデアがある場合は、サポート YouTube チームに電子メール (supportvideos@informatica.com) を送信するか、または@INFASupport でツイートしてください。

Informatica Marketplace

情報マーケットプレースは、開発者とパートナーがデータ統合実装を増幅、拡張、強化するソリューションを共有するためのフォーラムです。マーケットプレースにある何百ものソリューションを利用して、プロジェクトで実装にかかる時間を短縮したり、生産性を向上させたりできます。Informatica Marketplace には、<http://www.informaticamarketplace.com> からアクセスできます。

Informatica Velocity

<https://mysupport.informatica.com> で Informatica Velocity にアクセスできます。数多くのデータ管理プロジェクトの実世界での経験から開発された Informatica Velocity は、世界中の組織と協力して優れたデータ管理ソリューションの計画、開発、展開、および維持を行ってきた弊社コンサルタントの知識の集合体を表しています。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話またはオンラインサポートからカスタマサポートセンターに連絡できます。

オンラインサポートのご利用には、ユーザー名とパスワードが必要です。<http://mysupport.informatica.com> から、ユーザー名とパスワードが入手できます。

Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica の Web サイト
<http://www.informatica.com/us/services-and-training/support-services/global-support-centers/>に掲載
されています。

第 1 章

アップグレードの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica のアップグレード, 12 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Paths, 12 ページ](#)
- [アップグレードプロセス, 14 ページ](#)
- [Business Glossary のアップグレード, 15 ページ](#)

Informatica のアップグレード

Informatica プラットフォームは、サーバーコンポーネントおよび 1 つ以上のクライアントコンポーネントで構成されます。Informatica では、Informatica サービスおよびクライアントをアップグレードするために別々のインストーラが提供されます。

ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。

Informatica Upgrade Paths

You can directly upgrade to 10.0 from Informatica 9.5.1 and 9.6.1

If the product version that is currently installed cannot be upgraded to Informatica 10.0, you must first upgrade to a supported version. To determine the Informatica product version that is currently installed, click **Help > About Informatica Administrator** in the Informatica Administrator header area.

The following table describes the Informatica product versions from which you can upgrade:

Informatica Version	Upgrade Path	Comments
8.1.x	9.1.0 -> 9.6.1 -> 10.0	If the PowerCenter 8.1.x domain includes Metadata Manager or Data Analyzer, you must first upgrade to PowerCenter 8.6.1 and then upgrade to Informatica PowerCenter 9.1.0.
8.5.x	9.1.0 -> 9.6.1 -> 10.0	If the PowerCenter 8.5.x domain includes Metadata Manager or Data Analyzer, you must first upgrade to PowerCenter 8.6.1 and then upgrade to Informatica PowerCenter 9.1.0.
8.6	9.1.0 -> 9.6.1 -> 10.0	If the PowerCenter 8.1.x domain includes Metadata Manager or Data Analyzer, you must first upgrade to PowerCenter 8.6.1 and then upgrade to Informatica PowerCenter 9.1.0.
8.6.1	9.1.0 -> 9.6.1 -> 10.0	After you upgrade to version 9.1.0, you must upgrade to version 9.6.1, and then upgrade to version 10.0.
8.6.2	9.1.0 -> 9.6.1 -> 10.0	After you upgrade to version 9.1.0, you must upgrade to version 9.6.1, and then upgrade to version 10.0.
9.0	9.1.0 -> 9.6.1 -> 10.0	After you upgrade to version 9.1.0, you must upgrade to version 9.6.1, and then upgrade to version 10.0.
9.0.1	9.1.0 -> 9.6.1 -> 10.0	After you upgrade to version 9.1.0, you must upgrade to version 9.6.1, and then upgrade to version 10.0.
9.1.0	9.6.1 -> 10.0	Upgrade to version 9.6.1, and then upgrade to upgrade to version 10.0.
9.5.0	9.5.1 -> 10.0	Upgrade to version 9.5.1, and then upgrade to upgrade to version 10.0.
9.5.1	10.0	You can directly upgrade to version 10.0.
9.6.0	9.6.1 -> 10.0	Upgrade to version 9.6.1, and then upgrade to upgrade to version 10.0.
9.6.1	10.0	You can directly upgrade to version 10.0.

アップグレードプロセス

Informatica サービスと Informatica クライアントのアップグレードは、複数のフェーズで構成されています。アップグレードは以下のフェーズで構成されます。

1. ドメインに対するアップグレード前タスクを実行し、正常にインストーラを実行できるようにします。
2. ドメインをアップグレードします。ドメインをアップグレードするには、Informatica サーバーインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。ドメインアップグレードウィザードでサーバーファイルをインストールし、ドメインを設定します。ドメインに複数のノードがある場合、すべてのノードをアップグレードする必要があります。ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。

以下の表に、ドメインをアップグレードするときにインストーラが実行する処理を示します。

タスク	説明
アップグレード前チェックの実行	インストーラによってアップグレード前チェックが実行され、ドメイン内の競合が表示されます。アップグレードを進める前に、競合を解決します。
Informatica のインストール。	Informatica のディレクトリとファイルを新しいディレクトリにインストールします。
infa_shared ディレクトリのコピー。	infa_shared ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにコピーします。
既存ドメインで Metadata Manager サービスが使用されている場合は、mm_files ディレクトリをコピーします。	mm_files ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリのデフォルトの場所から新しいインストールディレクトリにコピーします。
ドメインのアップグレード。	バージョン 10.0 のアプリケーションサービスを実行するためにドメインをアップグレードします。 このアップグレードでは、ドメイン内のユーザー アカウントおよび管理者 アカウントが保持されます。
Informatica サービスの開始。	ノード上で Informatica サービスを開始します。

3. アプリケーションサービスをアップグレードします。ドメインをアップグレードした後、Administrator ツールにログインしてアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードでは、アップグレードが必要なすべてのアプリケーションサービスの一覧が表示されます。依存オブジェクトで必要な順序に基づいてサービスがアップグレードされます。
4. Informatica クライアントをアップグレードします。クライアントインストーラを使用して次の Informatica クライアントツールをアップグレードします。
 - PowerCenter Client
 - Informatica DeveloperInformatica Developer を、ドメインをアップグレードした HotFix バージョンを含む Informatica のバージョンにアップグレードします。
注: 以前のバージョンのデベロッパツールを使用して Informatica ドメインに接続することはできません。

Informatica クライアントをアップグレードするには、Informatica クライアントインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。クライアントが複数のマシンにインストールされている場合は、すべてのマシンのクライアントをアップグレードします。

5. アップグレード後のタスクを実行します。

注: Informatica のインストールを複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、付録のアップグレードチェックリストを利用して実行できます。

Business Glossary のアップグレード

バージョン 9.6.0 では、ビジネス用語集機能は Metadata Manager から Analyst ツールに移動されています。ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager からビジネス用語集のエクスポートと削除を行います。Metadata Manager の用語集エクスポートファイルを使用して、アップグレード後に Analyst ツールで対応するビジネス用語集を作成します。

Analyst ツールのビジネス用語集には、Metadata Manager のビジネス用語集にはないいくつかの機能が含まれています。例えば、Analyst ツールのビジネス用語集には、ビジネス用語に関連するビジネスの実践を左右するビジネスポリシーがあります。Analyst ツールの用語集は、広範囲のビジネスユーザーが使用できます。データリネージュの表示が不要なビジネスユーザーは、Metadata Manager を使用してビジネス用語とカテゴリの作成と表示を行う必要はなくなりました。

ビジネス用語集のアップグレードプロセスは、以下のフェーズで構成されます。

1. ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager からビジネス用語集のエクスポートとページを行います。
2. ドメインをアップグレードします。
3. ビジネス用語集を Analyst ツールにインポートします。
4. Analyst ツールのビジネス用語集に基づく Metadata Manager のリソースの作成とロードを行います。

以下の表に、ビジネス用語集をアップグレードするときに実行する手順を示します。

手順	Metadata Manager のタスク	Analyst ツールのタスク
1.	Metadata Manager リポジトリをバックアップします。	-
2. (オプション)	列挙されたリンクまたはルールベースのリンクを使用する各用語集で、列挙されたリンクおよびリンクルールのファイルをバックアップします。	-
3. (オプション)	ビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合は、Business Glossary モデルをエクスポートします。	-
4.	各ビジネス用語集を Microsoft Excel ファイルにエクスポートします。	-
5.	各 Microsoft Excel に Metadata Manager サービス名を含むワークシートを追加します。	-
6.	Metadata Manager から各ビジネス用語集のページと削除を行います。	-

手順	Metadata Manager のタスク	Analyst ツールのタスク
7.	ドメインをアップグレードします。	
8. (オプション)	-	Metadata Manager でビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合は、Metadata Manager のモデルエクスポートファイルをインポートします。
9. (オプション)	-	Metadata Manager の複数の用語集間でビジネス用語またはカテゴリがリンクされている場合は、用語集エクスポートファイルをマージし、重複するビジネス用語を削除します。
10.	-	各ビジネス用語集ファイルをインポートします。
11. (オプション)	-	Metadata Manager で表示する非公開のビジネス用語とカテゴリを公開します。
12.	各 Analyst ツールのビジネス用語集に対して 1 つのビジネス用語集リソースを作成します。	-
13. (オプション)	列挙されたリンクまたはルールベースのリンクを使用する各用語集で、列挙されたリンクおよびリンクルールのファイルをビジネス用語集リソースに関連付けます。	-
14.	各ビジネス用語集リソースをロードし、各用語集を確認します。	-

バージョン 9.5.x と 9.6.x でのビジネス用語集の違いの詳細については、*Business Glossary 9.5.x to 9.6.x Transition Guide* を参照してください。Analyst ツールのビジネス用語集の詳細については、『*Informatica Business Glossary ガイド*』を参照してください。Metadata Manager でのビジネス用語集リソースの作成と設定の詳細については、*Metadata Manager 管理者ガイド*を参照してください。

すべての製品マニュアルは、Informatica マイサポートポータル (<http://mysupport.informatica.com>) で入手できます。

第 2 章

Windows でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 17 ページ](#)
- [パッチ要件の確認, 18 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 18 ページ](#)
- [アプリケーションサービスのハードウェア要件の確認, 19 ページ](#)
- [環境変数の確認, 20 ページ](#)
- [最大ヒープサイズの確認, 21 ページ](#)
- [インストーラファイルの抽出, 22 ページ](#)
- [インストール前 \(i10Pi\) システムチェックツールの実行, 22 ページ](#)

リリースノートの確認

Informatica リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、リリースでの既知および修正済みの制限事項についての情報も確認できます。

パッチ要件の確認

Informatica ドメインをアップグレードする前に、必要なオペレーティングシステムのパッチおよびライブラリがマシンにインストールされていることを確認します。

次の表に、Windows プラットフォーム上で Informatica サービスを使用する場合に必要なパッチとライブラリを示します。

プラットホーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
Windows x64	2012 R2 64 ビット	必要なし
Windows x64	2008 R2 64 ビット	必要なし
Windows x64	2008 64 ビット	SP2

ドメインアップグレード要件の確認

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

以下の表に、Informatica ドメインのアップグレードに必要な最小のメモリおよびディスク容量を示します。

RAM	ディスクスペース
4 GB	10 GB

注: アップグレードする際、インストーラで追加の 4 GB のディスク領域と、既存の `infa_shared` ディレクトリが使用しているディスク領域が必要です。

次の表に、Informatica クライアントツールを実行するための最小システム要件を示します。

クライアント	プロセッサ	RAM	ディスクスペース
PowerCenter Client	1 CPU	512 MB	3 GB
Informatica Developer	1 CPU	512 MB	5 GB

製品の要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、Informatica マイサポートポータルの Product Availability Matrix を参照してください。

<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

一時的なディスク容量要件

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートする、マシンに十分な利用可能なディスク容量があることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

Informatica サービスインストーラには 1 GB の一時ディスク容量が必要です。

Informatica クライアントインストーラにも 1 GB の一時ディスク容量が必要です。

アプリケーションサービスのハードウェア要件の確認

アップグレードしている Informatica バージョンでは、以前のバージョンよりも多くのメモリとディスクスペースを必要とします。

以下の表に、ノード設定の異なるドメインの最小システム要件を一覧表示します。

サービス	プロセッサ	メモリ	ディスク容量
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス - コンテンツ管理サービス - データ統合サービス - Metadata Manager サービス - モデルリポジトリサービス - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス - レポートサービス - レポートおよびダッシュボードサービス - 検索サービス - Web サービス Hub	複数のコアを搭載した 2 個の CPU	12 GB	20 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス - コンテンツ管理サービス - データ統合サービス - モデルリポジトリサービス - 検索サービス	複数のコアを搭載した 2 個の CPU	12 GB	20 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス	複数のコアを搭載した 1 個の CPU	4 GB	該当なし
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - 検索サービス	複数のコアを搭載した 1 個の CPU	4 GB	10 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス - 検索サービス	複数のコアを搭載した 1 個の CPU	4 GB	10 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - Metadata Manager サービス - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス - レポートサービス	複数のコアを搭載した 2 個の CPU	8 GB	10 GB

サービス	プロセッサ	メモリ	ディスク容量
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - Metadata Manager サービス - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス - レポートおよびダッシュボードサービス	複数のコアを搭載した2個のCPU	8 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - データ統合サービス - モデルリポジトリサービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - データ統合サービス - コンテンツ管理サービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - Metadata Manager サービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - レポートサービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスコンポーネントが実行されます。 - Metadata Manager Agent	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	400 MB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - Web サービス Hub	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	5 GB

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、Windows 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
%TEMP%	インストール中に作成される一時ファイルの場所。 Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 デフォルトのドライブに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
PATH	インストーラにより、Informatica で必要とされるファイルパスが PATH 環境変数に追加されます。 PATH 環境変数の長さがシステムの制限を超えていないことを確認します。 PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。 アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。 アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。

最大ヒープサイズの確認

Informatica サービスがドメイン内のユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズを使用しているかどうかを確認します。

以下の表に、ドメイン内のユーザーとサービスの数に基づく、最大ヒープサイズ設定の最小要件を示します。

ドメインのユーザー数	最大ヒープ サイズ (1~5 個のサービス)	最大ヒープ サイズ (6~10 個のサービス)
最大 1,000	512MB (デフォルト)	1024MB
5,000	2048MB	3072MB
10,000	3072MB	5120MB
20,000	5120MB	6144MB
30,000	5120MB	6144MB

注: この表の最大ヒープサイズの設定内容は、ドメイン内のアプリケーションサービスの数に基づいています。

ドメインのユーザー数が 1,000 を超える場合、ドメインのユーザー数に基づいて最大ヒープサイズを更新します。

1. インストールファイルを抽出します。
2. <インストーラファイルディレクトリ>/source/tomcat/bin ディレクトリに移動します。
3. テキストエディタを使用して、infaservice ファイルを開きます。

4. テキスト「INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX」を検索します。
5. -Xmx の値を、Informatica ドメインのユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズに設定します。例えば、最大ヒープサイズを 3072MB に設定するには、以下の設定を使用します。

```
set INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX:GCTimeRatio=9 -Xmx3072m
```

インストーラファイルの抽出

インストーラファイルは zip ファイルとして圧縮および配布されます。

zip ユーティリティを使用して、インストーラファイルをマシン上のディレクトリに抽出します。zip ユーティリティのバージョンが、Windows オペレーティングシステムのバージョンと互換性があることを確認します。ファイルを解凍する場合は、zip ユーティリティが空のフォルダも抽出することを確認します。

インストーラファイルは以下の方法で抽出できます。

- インストール DVD。Informatica zip ファイルをインストール DVD からマシン上のディレクトリにダウンロードしてからインストーラファイルを抽出するか、インストーラファイルを DVD から直接マシン上のディレクトリに抽出します。zip ファイルをマシン上のディレクトリにダウンロードする場合、zip ファイル名を含むインストールディレクトリパス全体の長さが 60 文字以下であることを確認します。
- FTP からのダウンロード。Informatica インストール zip ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからマシン上のディレクトリにダウンロードしてからインストーラファイルを抽出します。

注: 必ずファイルをローカルディレクトリか、マシンにマッピングされた共有ネットワークドライブにダウンロードしてください。次に、インストーラファイルを抽出します。ただし、マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできません。抽出したファイルをローカルドライブにコピーしてから、インストーラを実行します。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行

インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行し、マシンがインストールまたはアップグレードのシステム要件を満たしているかどうかを確認します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして [管理者として実行] を選択します。

注: 管理者としてインストーラを実行しないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じことがあります。

[Informatica 10.0] ページが表示されます。

4. [Informatica のインストールまたはアップグレード] を選択します。
5. [インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行] を選択し、マシンがインストールまたはアップグレードのシステム要件を満たしているかどうかを確認します。

6. 【開始】をクリックします。

Informatica のインストール前 (i10Pi) システムチェックツールの **【ようこそ】** ページが表示されます。

7. 【次へ】をクリックします。

【システム情報】 ページが表示されます。

8. インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。

パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @ | * \$ # ! % () {} [] , ; '。

注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や€などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じことがあります。

9. マシン上で作成またはアップグレードするノードの開始ポート番号を入力します。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。

10. 【次へ】をクリックします。

【データベースおよび JDBC 接続情報】 ページが表示されます。

11. ドメイン環境設定リポジトリのデータベース情報を入力します。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース情報を示します。

プロンプト	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。Oracle、IBM DB2、Microsoft SQL Server、または Sybase ASE を選択します。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリに関するデータベースユーザー アカウントのユーザー ID。
データベースユーザーのパスワード	データベースユーザー アカウントのパスワード。

ドメイン環境設定リポジトリがドメイン内の全ゲートウェイノードにアクセス可能である必要があります。

12. JDBC 接続情報を入力します。

- JDBC URL 情報を使用して接続情報を入力するには、**【JDBC 接続プロパティの指定】** を選択して、JDBC URL のプロパティを指定します。

以下の表に、JDBC URL プロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースホスト名	データベースサーバーのホスト名。
データベースポート番号	データベースサーバーのポート番号。
データベースサービス名	Oracle および IBM DB2 データベースのサービス名、または Microsoft SQL Server および Sybase ASE のデータベース名。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、【カスタム JDBC 接続文字列】を選択して接続文字列を入力します。

データベースの JDBC 接続文字列に次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://host_name:port_no;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://host_name:port_no;ServiceName=
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

Sybase

```
jdbc:Informatica:sybase://host_name:port_no;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

13. 【テスト接続】をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、【OK】をクリックして続行します。

14. 【次へ】をクリックしてシステムチェックを開始します。

ハードドライブの設定、ポートの可用性、およびデータベースの設定がチェックされます。システムチェックが完了すると、【システムチェックの概要】ページにシステムチェックの結果が表示されます。

15. システムチェックの結果を分析します。

各要件が、次のいずれかのチェックステータスとともに表示されます。

- 【成功】 - この要件は Informatica のインストールまたはアップグレードの条件を満たしています。
- 【不可】 - この要件は Informatica のインストールまたはアップグレード条件を満たしていません。インストールまたはアップグレードを続行する前に問題を解決します。
- 【情報】 - 情報を確認し、記載された追加タスクがあればすべて実行します。

システムチェックの結果は、.../Server/i10Pi/i10Pi/en/i10Pi_summary.txt というファイルに保存されます。

16. 【完了】をクリックしてインストール前 (i10Pi) システムチェックツールを終了します。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツールが要件を満たしていないことを検出して終了した場合は、失敗した要件を解決してもう一度インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行します。

注: Informatica インストール前 (i10Pi) システムチェックツールのチェックが要件を満たさずに終了した場合も、Informatica のインストールまたはアップグレードを続行できます。ただし、Informatica では、次の作業に移る前に、失敗した要件を解決することを強くお勧めします。

第 3 章

UNIX でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 25 ページ](#)
- [パッチ要件の確認, 26 ページ](#)
- [Java Development Kit のインストール, 26 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 27 ページ](#)
- [アプリケーションサービスのハードウェア要件の確認, 28 ページ](#)
- [環境変数の確認, 29 ページ](#)
- [ファイル記述子の制限の設定, 30 ページ](#)
- [最大ヒープサイズの確認, 31 ページ](#)
- [インストーラファイルの抽出, 31 ページ](#)
- [インストール前 \(i10Pi\) システムチェックツールの実行, 32 ページ](#)

リリースノートの確認

Informatica リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、リリースでの既知および修正済みの制限事項についての情報も確認できます。

パッチ要件の確認

Informatica ドメインをアップグレードする前に、必要なオペレーティングシステムのパッチおよびライブラリがマシンにインストールされていることを確認します。

次の表に、UNIX プラットフォーム上で Informatica サービスを使用する場合に必要なパッチとライブラリを示します。

プラットホーム	オペレーティングシステム	オペレーティングシステムパッチ
AIX	7.1 TL2	OS レベル: 7100-02 bos.adt.debug バージョン 7.1.2.0
AIX	6.1 TL8	OS レベル: 6100-08 bos.adt.debug バージョン 6.1.8.0
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 6.5	次のすべてのパッケージにて、<version>はパッケージのバージョンです。 - e2fsprogs-libs-<version>.el6 - keyutils-libs-<version>.el6 - libselinux-<version>.el6 - libsepol-<version>.el6
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 7	次のすべてのパッケージにて、<version>はパッケージのバージョンです。 - e2fsprogs-libs-<version>.el5 - keyutils-libs-<version>.el5 - libselinux-<version>.el5 - libsepol-<version>.el5

Java Development Kit のインストール

AIX で Informatica をアップグレードする場合は、アップグレード後の Informatica のバージョンで、マシンにインストールされている Java Development Kit (JDK) のバージョンがサポートされていることを確認します。サポートされているバージョンの JDK がインストールされていない場合は、現在のバージョンをアンインストールし、サポートされているバージョンをダウロードしてインストールします。

JDK は、AIX 用の Informatica インストーラにはバンドルされていません。他のすべてのプラットフォーム用の Informatica インストーラには JDK がバンドルされています。

AIX

AIX 上の Informatica サービスは、JDK バージョン 7.1 SR3 FP1 で認証されています。IBM ID を使用して、IBM の Web サイトから AIX 用の JDK をダウンロードします。

JDK のインストールに問題がある場合は、JDK ベンダーに問い合わせてください。

参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica LLC ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとします。

ドメインアップグレード要件の確認

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

以下の表に、Informatica ドメインのアップグレードに必要な最小のメモリおよびディスク容量を示します。

オペレーティングシステム	RAM	ディスクスペース
AIX	4 GB	10 GB
Linux	4 GB	10 GB

製品の要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、Informatica マイサポートポータルの Product Availability Matrix を参照してください。

<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

一時的なディスク容量の要件

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートする、マシンに十分な利用可能なディスク容量があることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

インストーラを実行するには、1 GB の一時ディスク容量が必要です。

アプリケーションサービスのハードウェア要件の確認

アップグレードしている Informatica バージョンでは、以前のバージョンよりも多くのメモリとディスクスペースを必要とします。

以下の表に、ノード設定の異なるドメインの最小システム要件を一覧表示します。

サービス	プロセッサ	メモリ	ディスク容量
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス - コンテンツ管理サービス - データ統合サービス - Metadata Manager サービス - モデルリポジトリサービス - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス - レポートサービス - レポートおよびダッシュボードサービス - 検索サービス - Web サービス Hub	複数のコアを搭載した 2 個の CPU	12 GB	20 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス - コン텐ツ管理サービス - データ統合サービス - モデルリポジトリサービス - 検索サービス	複数のコアを搭載した 2 個の CPU	12 GB	20 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス	複数のコアを搭載した 1 個の CPU	4 GB	該当なし
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - 検索サービス	複数のコアを搭載した 1 個の CPU	4 GB	10 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - アナリストサービス - 検索サービス	複数のコアを搭載した 1 個の CPU	4 GB	10 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - Metadata Manager サービス - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス - レポートサービス	複数のコアを搭載した 2 個の CPU	8 GB	10 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - Metadata Manager サービス - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス - レポートおよびダッシュボードサービス	複数のコアを搭載した 2 個の CPU	8 GB	10 GB
1 台のノードで次のサービスが実行されます。 - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス	複数のコアを搭載した 1 個の CPU	4 GB	10 GB

サービス	プロセッサ	メモリ	ディスク容量
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - データ統合サービス - モデルリポジトリサービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - データ統合サービス - コンテンツ管理サービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - Metadata Manager サービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - レポートサービス	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	10 GB
1台のノードで次のサービスコンポーネントが実行されます。 - Metadata Manager Agent	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	400 MB
1台のノードで次のサービスが実行されます。 - Web サービス Hub	複数のコアを搭載した1個のCPU	4 GB	5 GB

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、UNIX 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
IATEMPDIR	インストール中に作成される一時ファイルの場所。 Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。 アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。 アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_JDK_HOME	サポートされる Java Development Kit (JDK) が含まれるフォルダの場所。 AIX、HP-UX、または zLinux に Informatica をインストールする場合は、INFA_JDK_HOME 環境変数を設定します。 シェルのコンフィギュレーションファイル、例えば.bashrc ファイルでは、INFA_JDK_HOME 環境変数を JDK が含まれるディレクトリに設定します。 ログインシェルが INFA_JDK_HOME 環境変数にアクセスできることを確認します。

変数	説明
JRE_HOME	Informatica サービスを Linux マシンにインストールする場合、インストールを開始する前に環境変数 JRE_HOME をクリアします。
LANG および LC_ALL	ロケールを変更してターミナルセッションに適切な文字エンコードを設定します。例えば、フランス語の場合は Latin1 または ISO-8859-1 に、日本語の場合は EUC-JP または Shift JIS に、中国語と韓国語の場合は UTF-8 にエンコードを設定します。文字エンコードにより、UNIX 端末に表示される文字の種類が決まります。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。
LD_PRELOAD	HP-UX では、環境変数が JRE の Data Transformation の libjvm 共有オブジェクトを選択します。 HP-UX で Informatica をアップグレードする場合は、LD_PRELOAD 環境変数を設定解除します。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
PATH	インストーラにより、Informatica で必要とされるファイルパスが PATH 環境変数に追加されます。PATH 環境変数の長さがシステムの制限を超えていないことを確認します。 PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。

ファイル記述子の制限の設定

オペレーティングシステムがファイル記述子の要件を満たしていることを確認します。

Informatica サービスプロセスは、多数のファイルを使用することができます。プロセスごとのファイル記述子の制限を 16,000 以上に設定します。推奨されるファイル記述子の制限は、プロセスごとに 32,000 です。

ファイル記述子の制限を確認するには、次のコマンドを実行します。

C シェル

制限

Bash シェル

```
ulimit -a
```

ファイル記述子の制限を設定するには、次のコマンドを実行します。

C シェル

```
limit -h filesize <value>
```

Bash シェル

```
ulimit -n <value>
```

最大ヒープサイズの確認

Informatica サービスがドメイン内のユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズを使用しているかどうかを確認します。

以下の表に、ドメイン内のユーザーとサービスの数に基づく、最大ヒープサイズ設定の最小要件を示します。

ドメインのユーザー数	最大ヒープ サイズ (1~5 個のサービス)	最大ヒープ サイズ (6~10 個のサービス)
最大 1,000	512MB (デフォルト)	1024MB
5,000	2048MB	3072MB
10,000	3072MB	5120MB
20,000	5120MB	6144MB
30,000	5120MB	6144MB

注: この表の最大ヒープサイズの設定内容は、ドメイン内のアプリケーションサービスの数に基づいています。

ドメインのユーザー数が 1,000 を超える場合、ドメインのユーザー数に基づいて最大ヒープサイズを更新します。

1. インストールファイルを抽出します。
2. <インストーラファイルディレクトリ>/source/tomcat/bin ディレクトリに移動します。
3. テキストエディタを使用して、infaservice ファイルを開きます。
4. テキスト 「INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX」 を検索します。
5. -Xmx の値を、Informatica ドメインのユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズに設定します。
例えば、最大ヒープサイズを 3072MB に設定するには、以下の設定を使用します。

```
set INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX:GCTimeRatio=9 -Xmx3072m
```

インストーラファイルの抽出

インストーラファイルは tar ファイルとして圧縮および配布されます。

ネイティブの tar または GNU tar ユーティリティを使用して、マシン上のディレクトリにインストーラファイルを抽出します。インストーラを実行するユーザーは、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限と、install.sh の実行権限を持っている必要があります。

インストーラファイルは以下の方法で抽出できます。

- インストール DVD。Informatica tar ファイルをインストール DVD からマシン上のディレクトリにダウンロードしてから、インストーラファイルを抽出するか、インストーラファイルを DVD から直接マシン上のディレクトリに抽出します。
- FTP からのダウンロード。Informatica インストール tar ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからマシン上のディレクトリにダウンロードした後で、インストーラファイルを抽出します。

注: 必ずファイルをローカルディレクトリか、マシンにマッピングされた共有ネットワークドライブにダウンロードしてください。次に、インストーラファイルを抽出します。ただし、マッピングされたファイルからイン

ストーラを実行することはできません。抽出したファイルをローカルドライブにコピーしてから、インストーラを実行します。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行

インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行し、マシンがインストールまたはアップグレードのシステム要件を満たしているかどうかを確認します。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. 他のすべてのアプリケーションを終了します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある `install.sh` ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
5. Informatica のインストールまたはアップグレードを行う場合は、**1** を押します。
6. マシンがインストールまたはアップグレードのシステム要件を満たしているか確認するためにインストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行するには、**1** を押します。
7. Informatica インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの **【ようこそ】** セクションで、**Enter** キーを押します。
[システム情報] セクションが表示されます。
8. インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。
パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @|^\$#!%(){}[],;'
注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。áや€などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じことがあります。
9. **Enter** キーを押します。
10. マシン上で作成またはアップグレードするノードの開始ポート番号を入力します。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
11. **Enter** キーを押します。
[データベースおよび接続情報] セクションが表示されます。
12. カスタム JDBC 接続文字列を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**1** を押します。JDBC URL 情報を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**2** を押します。
セキュアなデータベースに接続するには、カスタムの JDBC 接続文字列を使った JDBC 接続を入力する必要があります。

13. JDBC 接続情報を入力します。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、接続文字列をタイプ入力し、接続パラメータを指定します。

データベースの JDBC 接続文字列に次の構文を使用します。

IBM DB2

`jdbc:Informatica:db2://host_name:port_no;DatabaseName=`

Oracle

`jdbc:Informatica:oracle://host_name:port_no;ServiceName=`

Microsoft SQL Server

`jdbc:Informatica:sqlserver://host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=`

Sybase

`jdbc:Informatica:sybase://host_name:port_no;DatabaseName=`

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、JDBC の URL のプロパティを指定します。以下の表に、接続情報を示します。

プロンプト	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリ用データベースのタイプ。次のデータベースのタイプから選択します。 <ul style="list-style-type: none">- 1 - Oracle- 2 - Microsoft SQL Server- 3 - IBM DB2- 4 - Sybase ASE
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリに関するデータベースユーザー アカウントのユーザー ID。
データベースユーザーのパスワード	データベースユーザー アカウントのパスワード。
データベースホスト名	データベースサーバーのホスト名。
データベースポート番号	データベースのポート番号。
データベースサービス名	Oracle および IBM DB2 データベースのサービス名、または Microsoft SQL Server および Sybase ASE のデータベース名。

ハードドライブの設定、ポートの可用性、およびデータベースの設定がチェックされます。システムチェックが完了すると、[システムチェックの概要] セクションにシステムチェックの結果が表示されます。

14. システムチェックの結果を分析します。

各要件が、次のいずれかのチェックステータスとともに表示されます。

- [成功] - この要件は Informatica のインストールまたはアップグレードの条件を満たしています。

- [不可] - この要件は Informatica のインストールまたはアップグレード条件を満たしていません。インストールまたはアップグレードを続行する前に問題を解決します。
 - [情報] - 情報を確認し、記載された追加タスクがあればすべて実行します。
- システムチェックの結果は、`.../Server/i10Pi/i10Pi/en/i10Pi_summary.txt` というファイルに保存されます。
15. **Enter** キーを押してインストール前 (i10Pi) システムチェックツールを終了します。
- Informatica サービスのインストールを続行するか、ただちにアップグレードできます。またはシステムチェックを終了してインストールを続行するか、後でアップグレードすることができます。インストールまたはアップグレードをただちに続行する場合は、インストーラを再起動する必要はありません。
16. 引き続き Informatica サービスのインストールまたは今すぐアップグレードを行う場合は、**y** を押します。
- システムチェックを終了し、続きのインストールまたはアップグレードを後で行う場合は、**n** を押します。
- インストール前 (i10Pi) システムチェックツールが要件を満たしていないことを検出して終了した場合は、失敗した要件を解決してもう一度インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行します。
- 注:** Informatica インストール前 (i10Pi) システムチェックツールのチェックが要件を満たさずに終了した場合も、Informatica のインストールまたはアップグレードを続行できます。ただし、Informatica では、次の作業に移る前に、失敗した要件を解決することを強くお勧めします。

第 4 章

アップグレードの準備

この章では、以下の項目について説明します。

- [Data Transformation ファイルのバックアップ, 35 ページ](#)
- [PowerCenter リポジトリの準備, 36 ページ](#)
- [モデルリポジトリの準備, 36 ページ](#)
- [データ統合サービスの準備, 37 ページ](#)
- [レポートおよびダッシュボードサービスの準備, 38 ページ](#)
- [Profiling ウェアハウスの準備, 39 ページ](#)
- [参照データウェアハウスの準備, 39 ページ](#)
- [参照データのディレクトリの準備, 39 ページ](#)
- [ステージングデータベースの準備, 40 ページ](#)
- [Metadata Manager の準備, 40 ページ](#)
- [Data Analyzer の準備, 44 ページ](#)
- [ODBC データソース名の記録, 44 ページ](#)
- [ドメインの準備, 44 ページ](#)

Data Transformation ファイルのバックアップ

アップグレードの前に、以前のバージョンで作成された Data Transformation ファイルをバックアップする必要があります。アップグレードの完了後、新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

以下の表に、バックアップする必要があるファイルまたはディレクトリを示します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (TGP ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (DLL および JAR ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user
構成ファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CMConfig.xml
ライセンスファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CDELicense.cfg

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

PowerCenter リポジトリの準備

ドメインをアップグレードする前に、PowerCenter リポジトリをバックアップします。

PowerCenter リポジトリをバックアップするには、Administrator ツールの PowerCenter リポジトリサービスを選択します。[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] を選択します。

モデルリポジトリの準備

ドメインをアップグレードする前に、モデルリポジトリを準備するための手順を実行します。

1. リポジトリをバックアップします。
2. データベースユーザーアカウントの要件を確認します。
3. 最大ヒープサイズを確認します。

リポジトリのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、モデルリポジトリをバックアップします。

各モデルリポジトリをバックアップするには、Administrator ツールで Model Repository Service を選択します。次に、[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] の順に選択します。

データベースユーザーアカウントの要件の確認

モデルリポジトリデータベースが Oracle 上にある場合は、OPEN_CURSORS パラメータを 4000 以上に設定します。

モデルリポジトリデータベースが IBM DB2 上にある場合は、DynamicSections パラメータを 3000 以上に設定します。

データ統合サービスの準備

ドメインをアップグレードする前に、データ統合サービスを準備します。

電子メールサーバーのプロパティの記録

スコアカード通知およびワークフロー通知を送信するために同じ電子メールサーバーを使用するには、ドメインをアップグレードする前に、データ統合サービスの電子メールサーバーのプロパティ値を記録しておきます。場合によっては、アップグレード中に電子メールサーバーのプロパティ値が保持されないことがあります。

バージョン 10.0 では、データ統合サービス用の電子メールサーバーのプロパティは削除されています。以下の通知タイプに応じて、異なる場所にある電子メールサーバーを設定します。

スコアカード通知

スコアカード通知では、ドメイン用に設定された電子メールサーバーが使用されます。以前のバージョンのデータ統合サービス用に設定されていた電子メールサーバーを使用するには、アップグレードの前にデータ統合サービスの値を記録し、その後、ドメインの SMTP が正しく設定されていることを確認します。

ワークフロー通知

ワークフロー通知には、ワークフローのヒューマンタスクおよび通知タスクから送られる電子メールが含まれます。ワークフロー通知は、電子メールサービス用に設定された電子メールサーバーを使用します。以前のバージョンのデータ統合サービス用に設定されていた電子メールサーバーを使用するには、アップグレードの前にデータ統合サービスの値を記録し、電子メールサービスに対してそれらの値を設定し、その後電子メールサービスを有効にします。

データ統合サービスの電子メールサーバーのプロパティを取得するには、infacmd dis ListServiceOptions コマンドを実行し、その出力をテキストファイルにリダイレクトします。例えば、Windows で次のコマンドを実行します。

```
infacmd dis ListServiceOptions -dn MyDomain -sn MyDIS -un MyUserName -pd MyPassword > MyDISOptions.txt
```

実行オプションの記録

データ統合サービスが複数のノード上で実行され、データ統合サービスのプロセスごとに異なる実行オプションを設定した場合は、ドメインをアップグレードする前にプロパティ値を記録します。場合によっては、アップグレード中に実行オプションの値が保持されないことがあります。

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの [プロセス] ビューの実行オプションは、[プロパティ] ビューに移動されています。データ統合サービスの実行オプションを設定します。各サービスプロセスは、オプションごとに同じ値を使用します。アップグレード後のデータ統合サービスで正しい値が使用されていることを確認するために、アップグレード前に、データ統合サービスの各プロセスで使用される実行オプションの値を記録します。

データ統合サービスの各プロセスの実行オプションを取得するには、サービスプロセスごとに infacmd dis ListServiceProcessOptions コマンドを実行して、その出力をテキストファイルにリダイレクトします。例えば、Windows で次のコマンドを実行します。

```
infacmd dis ListServiceProcessOptions -dn MyDomain -sn MyDIS -un MyUserName -pd MyPassword -nn Node1 > MyDISProcessOptionsNode1.txt
```

すべてのワークフローの完了

ドメインをアップグレードする前に、すべてのワークフローが完了していることを確認します。データ統合サービスは、アップグレードプロセス中にユーザーが中断したワークフローをリカバリできません。

Informatica はワークフロー・オブジェクトをモデルリポジトリに保存し、ワークフローのランタイムメタデータをワークフローデータベースに保存します。以前のリリースでは、すべてのワークフローメタデータがモデルリポジトリに保存されていました。

レポートおよびダッシュボードサービスの準備

ドメインをアップグレードする前に、レポートおよびダッシュボードサービスを準備します。

Jaspersoft リソースのエクスポート

Informatica をアップグレードし、レポートおよびダッシュボードサービスがある場合は、ドメインをアップグレードする前に Jaspersoft リポジトリリソースをエクスポートします。

default_master.properties ファイルに含まれているデータが有効なことを確認します。

1. Jaspersoft リポジトリリソースをエクスポートします。

以下のコマンドを入力して、Jaspersoft リポジトリリソースをエクスポートします。

```
js-ant export -DexportArgs="--roles <role name> --roles-users <user name>
--uris </Report_Folder_Name> --repository-permissions --report-jobs
--include-access-events" -DdatabaseUser=<username> -DdatabasePass=<password> -DexportFile=<File_Name>.zip
```

以下の表に、エクスポートコマンドのオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
--roles	role name	エクスポートするロールのカンマ区切りリスト。値を指定しないと、すべてのロールがエクスポートされる。
--roles-users	ユーザ名	エクスポートするユーザーのカンマ区切りリスト。値を指定しないと、すべてのロールがエクスポートされる。
--uris	/folder name	リポジトリ内のフォルダーの名前。
--repository-permissions	-	エクスポートするフォルダーに関連付けられている権限。
--report-jobs	-	エクスポートするレポートに関連付けられているスケジュールされたジョブ。
--include-access-events	-	エクスポートするアクセスイベント。
-DdatabaseUser	username	データベースのユーザー・アカウント。
-DdatabasePass	password	データベース・ユーザー・アカウントのパスワード。

2. エクスポートするすべてのレポート・フォルダに対して、上記の手順を繰り返します。

注: Jaspersoft リポジトリリソースをエクスポートした後、default_master.properties ファイルに、有効なデータベースユーザーとパスワードを追加します。

Jaspersoft リポジトリのデータベースユーザーの設定

アップグレードする前に、Jaspersoft リポジトリのデータベースユーザーを設定します。

Jaspersoft をインストールし、以前の JasperReports Server インストールからリポジトリデータをインポートする前に、設定されているデータソースがアップグレード処理で使用できることを確認します。

1. ドメインをアップグレードする前に、Reporting and Dashboard Service 内の Jaspersoft リポジトリリソースがエクスポート済みであることを確認します。
2. Reporting and Dashboard Service を無効にします。
3. <Informatica インストールディレクトリ>/jasperreports-server/buildomatic ディレクトリに移動します。
4. 有効なデータベースユーザーとパスワードを default_master.properties ファイルに追加します。

Profiling ウェアハウスの準備

ドメインをアップグレードする前に、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

参照データウェアハウスの準備

ドメインをアップグレードする前に、参照データウェアハウスをバックアップします。

ネイティブデータベースのバックアップオプションを使用して、参照データウェアハウスをバックアップします。

参照データのディレクトリの準備

PowerCenter をアップグレードする前に、PowerCenter ディレクトリ構造のディレクトリの参照データの場所を確認します。

デフォルトでは、アップグレード操作によって以下の参照データディレクトリの内容が保持されます。

- <Informatica_installation_directory>/services/DQContent/INFA_Content/dictionaries/ ディクショナリファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica_installation_directory>/services/DQContent/INFA_Content/av/ アドレス参照データファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica_installation_directory>/services/DQContent/INFA_Content/identity/ ID ポピュレーションデータファイルの親ディレクトリ。

参照データファイルを PowerCenter ディレクトリ構造のデフォルト以外のディレクトリにインストールまたはコピーする場合は、アップグレードする前にディレクトリをバックアップします。アップグレード後に PowerCenter ディレクトリ構造にディレクトリをリストアできるように、ディレクトリの場所を記録します。参照データファイルを PowerCenter ディレクトリ構造の外部のディレクトリにインストールまたはコピーする場合、ディレクトリをバックアップする必要はありません。

参照データのディレクトリは、構成ファイルと環境変数を使用して指定できます。INFA_CONTENT 環境変数を使用して、ディクショナリファイルの親ディレクトリを指定します。AD50.cfg ファイルを使用して、アドレス参照データファイルの親ディレクトリを指定します。IDQTx.cfg ファイルを使用して、ID ポピュレーションデータファイルの親ディレクトリを指定します。アップグレード後の手順に従って、設定した構成ファイルまたは環境変数の内容を確認します。

ステージングデータベースの準備

ドメインをアップグレードする前に、ステージングデータベースをバックアップします。

ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、ステージングデータベースをバックアップします。

Metadata Manager の準備

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager を準備します。

1. Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。
2. ビジネス用語集のエクスポートと削除を行います。
3. Metadata Manager サービスを無効にします。
4. Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

ネイティブのデータベースバックアップオプションを使用するか、または Metadata Manager の backupCmdLine というコマンドラインプログラムを使用して、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

backupCmdLine には、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップおよびリストアするためのコマンドが含まれます。backupCmdLine は次のディレクトリにあります。

```
<Informatica サービスのインストールディレクトリ>\services\MetadataManagerService\utilities\mmBackupUtil  
backupCmdLine を使用して Metadata Manager ウェアハウスをバックアップするには、以下の構文を使用します。  
backupCmdLine.(bat | sh) backup <DBType> "<JDBCConnectionString>" <DBUserName> <DBPassword> <FileName.bkp>
```

ビジネス用語集のエクスポートと削除

バージョン 9.6.0 では、ビジネス用語集機能は Metadata Manager から Analyst ツールに移動されています。ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager からビジネス用語集のエクスポートと削除を行う必

要があります。Metadata Manager の用語集エクスポートファイルを使用して、アップグレード後に Analyst ツールで対応するビジネス用語集を作成します。

ヒント: Metadata Manager からビジネス用語集をエクスポートする前に、使用されていないカスタム属性がないかビジネス用語集モデルを確認します。同様に、用語集でも使用されていないビジネス用語やカテゴリがないかどうかを確認します。使用されていないオブジェクトが Analyst ツールの用語集に移行されないように、ビジネス用語集の移行プロセスを開始する前にこれらのオブジェクトを削除します。

Metadata Manager からのビジネス用語集のエクスポートと削除を行うには、以下のタスクを実行します。

1. リンクルールおよび列挙されたリンクのファイルをバックアップします。

アップグレードするビジネス用語集がリンクルールまたは列挙されたリンクを使用してデータリネージュを確立している場合は、リンクルールおよび列挙されたリンクのファイルをバックアップします。Analyst ツールでビジネス用語集を再作成した後に、これらのファイルを使用して Metadata Manager で対応するビジネス用語集リソースのリネージュリンクを作成します。

注: この手順は、Metadata Manager のビジネス用語集でリンクルールまたは列挙されたリンクのファイルが使用されている場合に必要です。Metadata Manager のビジネス用語集でリンクルールファイルまたは列挙されたリンクのファイルが使用されていない場合、この手順は省略してもかまいません。

2. Business Glossary モデルをエクスポートします。

Analyst ツールは、モデルエクスポート XML ファイルを使用して、ビジネス用語テンプレートに追加可能なプロパティを作成します。

注: この手順は、ビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合に必要です。モデルにカスタム属性が追加されていない場合、この手順は省略してもかまいません。

3. 各ビジネス用語集を Microsoft Excel ファイルにエクスポートします。

アップグレードするそれぞれのビジネス用語集をエクスポートします。アップグレード後、これらのファイルを Analyst ツールにインポートして Analyst ツールで用語集を再作成します。

4. 各 Microsoft Excel ファイルを更新します。

Analyst ツールの用語集インポートファイル形式に適合するように、エクスポートした各 Microsoft Excel ファイルを更新します。

5. ビジネス用語集のページと削除を行います。

アップグレードする前に、Metadata Manager から用語集のページと削除を行う必要があります。この操作を実行しないと、用語集が Metadata Manager リポジトリに読み取り専用として残り、Analyst ツールでの編集または同期が行えなくなります。

アップグレード後、各 Microsoft Excel ビジネス用語集ファイルを Analyst ツールにインポートします。用語集をインポートする手順については、「アップグレードした後に」の章を参照してください。

手順 1. リンクルールおよび列挙されたリンクのファイルのバックアップ

アップグレードするビジネス用語集がリンクルールまたは列挙されたリンクのファイルを使用している場合は、ドメインをアップグレードする前にファイルをバックアップします。アップグレード後に Metadata Manager でビジネス用語集リソースを作成する場合は、ビジネス用語と他のリソースのメタデータオブジェクト間のリネージュリンクを再確立するためにこれらのファイルが必要です。

注: Metadata Manager のビジネス用語集でリンクルールファイルまたは列挙されたリンクのファイルが使用されていない場合、この手順は省略してもかまいません。

ビジネス用語集がリンクルールファイルまたは列挙されたリンクのファイルを使用しているかどうかを判断するには、【ロード】タブで用語集のプロパティを確認します。

1. Metadata Manager で、【ロード】タブをクリックします。

2. ビジネス用語集を選択します。

[プロパティ] パネルにビジネス用語集のプロパティが表示されます。

3. [列挙されたリンク] タブをクリックします。

このタブに表示されているすべてのファイルを探してバックアップします。

ファイルを追加する代わりにアップロードした場合は、Metadata Manager サービスによってファイルが次のディレクトリにアップロードされます。

<Metadata Manager file location directory>\mm_load\data_files\<resource ID>

4. [リンク作成ルール] タブをクリックします。

このタブにリンクルールが表示される場合は、リンクルールの作成に使用されたファイルを探してバックアップします。

Metadata Manager サービスによってファイルが次のディレクトリにアップロードされます。

<Metadata Manager file location directory>\mm_load\data_files\<resource ID>

手順 2。Business Glossary モデルのエクスポート

ビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合は、Business Glossary モデルをエクスポートします。Analyst ツールは、モデルエクスポート XML ファイルを使用して、ビジネス用語テンプレートに追加可能なプロパティを作成します。

Metadata Manager にはすべてのビジネス用語集に対して 1 つのモデルがあるため、この手順は 1 回のみ実行します。

注: ビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されていない場合、この手順は省略してもかまいません。

Analyst ツールは、カスタムクラス内の属性を含むビジネス用語のための属性を抽出します。これにより、デフォルトではビジネス用語テンプレートに存在しない各属性用のプロパティが作成されます。カスタム属性またはカテゴリ用の使用コンテキストは抽出されません。

例えば、Metadata Manager から抽出したビジネス用語集には「引用 ID」と呼ばれるカスタム属性が含まれています。この属性は、デフォルトでは Analyst ツールのビジネス用語テンプレートに存在しません。アップグレード後にモデルエクスポート XML ファイルを Analyst ツールにインポートする場合、Analyst ツールはモデルエクスポートファイルから「引用 ID」属性を抽出します。これにより、ビジネス用語テンプレートに追加することが可能な「引用 ID」と呼ばれるビジネス用語テンプレートのプロパティが作成されます。

1. Metadata Manager で、[モデル] タブをクリックします。

2. [アクション] > [モデルのエクスポート] を選択します。

[モデルのエクスポート] ダイアログボックスが表示されます。

3. [使用可能なモデル] リストで Business Glossary モデルを選択し、[追加] をクリックします。

ルールセット定義を含める必要はありません。

4. [エクスポート] をクリックします。

モデルエクスポート XML ファイルを保存するオプションは、ブラウザによって異なります。

手順 3。ビジネス用語集を Microsoft Excel ファイルにエクスポート

ドメインをアップグレードする前に、すべてのビジネス用語集を Microsoft Excel (.xlsx) ファイルにエクスポートします。アップグレード後にビジネス用語集をエクスポートすることはできません。

アップグレードするそれぞれのビジネス用語集をエクスポートします。アップグレード後に、ビジネス用語集の Microsoft Excel ファイルを Analyst ツールにインポートできます。

1. Metadata Manager で、[参照] タブをクリックします。

2. [用語解説] ビューの [表示] リストからビジネス用語集を選択します。

3. [アクション] > [エクスポート] > [用語集を Excel へ] をクリックします。

Metadata Manager によってビジネス用語集が Microsoft Excel ファイルにエクスポートされます。

手順 4。Microsoft Excel ファイルの更新

ビジネス用語集を Microsoft Excel ファイルにエクスポートしたら、各 Microsoft Excel ファイルを編集し、Metadata Manager サービス名を含むワークシートを追加します。この手順は、Metadata Manager からエクスポートした各 Microsoft Excel ファイルで実行する必要があります。

Analyst ツールは、Metadata Manager サービス名を使用してアセットリンク用のビジネス用語集の内部 ID を作成します。Metadata Manager サービス名を指定しないで Analyst ツールでビジネス用語を表示すると、Metadata Manager カタログオブジェクトである関連アセットはリンクとして表示されません。

Excel ファイルにワークシートを追加しない場合、Analyst ツールは Metadata Manager サービスの名前を「MM」に設定します。

1. この Microsoft Excel ファイルを開きます。
2. MMServiceName という名前のワークシートを作成します。
3. MMServiceName ワークシートの A1 セルに、アップグレードされたドメイン内の Metadata Manager サービスの名前を入力します。
4. ファイルを保存します。

手順 5。ビジネス用語集のページと削除

アップグレードを行う前に、Metadata Manager リポジトリからビジネス用語集メタデータをページし、ビジネス用語集を削除します。すべてのビジネス用語集のページと削除を行う必要があります。

警告: ビジネス用語集のページと削除を行わない場合、ビジネス用語集は Metadata Manager リポジトリに残ります。ビジネス用語集を表示することは可能ですが、次のタスクを実行することはできません。

- カテゴリまたは用語を追加する。
- 用語集メタデータをエクスポート、またはメールで送信する。
- 用語集を Analyst ツールのビジネス用語集と同期する（用語集のアップグレード前後における内部 ID が異なるため）。
- カテゴリまたはビジネス用語を選択して Metadata Manager 内から対応する Analyst ツールのビジネス用語集を開く。

さらに、古い用語集でカスタム属性を使用している場合、アップグレードされた用語集はアップグレードされたビジネス用語集モデルに適合しないため、ロードに失敗する可能性があります。アップグレード後にモデルの削除と再インポートを行うことはできません。

1. Metadata Manager で、[ロード] タブをクリックします。
2. メタデータをページするビジネス用語集リソースを選択します。
3. [アクション] > [リソースメタデータのページ] をクリックします。

Metadata Manager は、Metadata Manager ウェアハウスからメタデータをページして、[リソース] パネルにページ操作の結果を表示します。

4. [アクション] > [リソースの削除] をクリックします。

Metadata Manager はビジネス用語集を削除します。

Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica のインストールディレクトリ>\services\shared\jars\pc\classes

Data Analyzer の準備

ドメインをアップグレードする前に、Data Analyzer リポジトリを準備します。

1. ユーザーとグループにロールを割り当てます。
2. Data Analyzer リポジトリをバックアップします。

ユーザーとグループへのロールの割り当て

Reporting Service 特権のロールを作成し、ユーザーとグループに割り当てます。Reporting Service 特権を割り当てるロールを使用しない場合は、ユーザーとグループはアップグレード後に特権の割り当てを失います。

リポジトリのバックアップ

各 Data Analyzer リポジトリをバックアップします。

各 Data Analyzer リポジトリをバックアップするには、Administrator ツールでサービスを選択します。次に、[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] の順に選択します。

ODBC データソース名の記録

Informatica 9.5.1 以前のバージョンからアップグレードする場合、ODBC データソース名を再作成する必要があります。

使用している ODBC 接続の ODBC データソース名の詳細を記録して、アップグレード後にデータソースを再作成できるようにする必要があります。ODBC データソース名の詳細は、ODBC データソースアドミニストレータで表示できます。

ドメインの準備

ドメインをアップグレードする前に、ドメインを準備するための手順を実行します。

管理者グループの名前変更

Informatica ドメインバージョン 9.6.0 にはデフォルト管理者特権を持つ管理者グループが含まれています。

バージョン 9.6.0 以降では、管理者グループにドメインおよびすべてのアプリケーションサービスに対する管理者の権限と特権があります。管理者グループ内のすべてのユーザーに、インストール中に作成されたデフォルトの管理者と同じ権限および特権が与えられます。

Administrator という名前が付けられたグループを含むドメインをアップグレードすると、アップグレードプロセスではそのグループにデフォルト管理者特権が割り当てられます。前のリリースのグループに割り当てられた特権は削除されます。

アップグレード後に管理者グループがデフォルトの管理者グループ特権を持たないようにする場合は、次のタスクを実行します。

1. Administrator ツールにログインします。

2. 別のグループを作成して、新しいグループに管理者グループの特権を割り当てます。
3. 管理者グループ内のユーザーのうち、デフォルト管理者特権を設定してはならないユーザーを新しいグループに移動します。

データベースユーザーアカウント要件の確認

ドメイン環境設定リポジトリデータベースに次のタスクを実行します。

- OPEN_CURSORS パラメータを 4000 以上に設定します。
- Oracle データベースのビュー\$parameter に関する権限を設定します。
- Oracle データベースで *show parameter open_cursors* を実行する特権を設定します。
インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行すると、i10Pi はデータベースに対してコマンドを実行して、ドメインデータベースユーザーの資格情報で OPEN_CURSORS パラメータを識別します。
次のクエリを実行すると、ドメインデータベースユーザーアカウントのオープンカーソル設定を判別できます。


```
SELECT VALUE OPEN_CURSORS FROM V$PARAMETER WHERE UPPER(NAME)=UPPER('OPEN_CURSORS')
```
- IBM DB2 データベースの DynamicSections パラメータを 3000 以上に設定します。
DynamicSections パラメータの更新の詳細については、[付録 A、「DB2 データベースの DynamicSections パラメータの更新」（ページ 114）](#)を参照してください。

ドメインのシャットダウン

ドメインをバックアップしてからアップグレードする前にドメインを停止する必要があります。

ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。

各ノードで Informatica サービスプロセスを停止するには、次のいずれかの方法を使用します。

- Informatica を Windows の [スタート] メニューから停止するには、[プログラム] > [Informatica[バージョン]] > [サーバー] > [Informatica サービスの停止] の順にクリックします。
- UNIX 上で Informatica を停止するには、infaservice コマンドを使用します。デフォルトでは、実行可能ファイル infaservice は次のディレクトリにインストールされています。
`<Informatica installation directory>/tomcat/bin`
 デーモンを停止するには次のコマンドを入力します。
`infaservice shutdown`

Windows のコントロールパネルまたは Administrator ツールから Informatica サービスを停止することもできます。

ドメインのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、ドメインの設定メタデータをバックアップする必要があります。

ドメインをバックアップするには、次の手順を実行します。

- infasetup BackupDomain コマンドを実行して、ドメイン環境設定データベーステーブルをファイルにバックアップします。
- メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。

Informatica infasetup には、ドメインのバックアップとリストアを行うためのコマンドラインプログラムが含まれています。infasetup は、以下のディレクトリにあります。

`<Informatica installation directory>/server`

`infasetup` を使用してドメインをバックアップするには、以下の構文を使用します。

```
<-BackupDomain  
<<-DatabaseAddress|-da> database_hostname:database_port|  
<-DatabaseConnectionString|-cs> database_connection_string>  
<-DatabaseUserName|-du> database_user_name  
<-DatabasePassword|-dp> database_password  
<-DatabaseType|-dt> database_type  
[<-DatabaseServiceName|-ds> database_service_name]  
<-BackupFile|-bf> backup_file_name  
[<-Force|-f>]  
<-DomainName|-dn> domain_name  
[<-Tablespace|-ts> tablespace_name (used for IBM DB2 only)]  
[<-SchemaName|-sc> schema_name (used for Microsoft SQL Server only)]  
[<-DatabaseTlsEnabled|-dbtls> database_tls_enabled]  
[<-DatabaseTruststorePassword|-dbtp> database_truststore_password]  
[<-TrustedConnection|-tc> trusted_connection (used for Microsoft SQL Server only)]  
[<-EncryptionKeyLocation|-kl> encryption_key_location]
```

メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。以下の表は、メタデータファイルと、その場所を示します。

メタデータファイル	説明	場所
nodemeta.xml	ノードのメタデータが含まれます。	ドメイン内の各ノード上の <code>isp/config</code> ディレクトリに格納されます。すべてのノードで同じバックアップディレクトリ名を使用する場合、バックアップ場所にコピーする前に <code>nodemeta.xml</code> の名前を変更します。たとえば、 <code>nodemeta.xml</code> を、ノード A とノード B の <code>/nodebak</code> ディレクトリにバックアップするとします。ノード A の場合、ファイルが <code>/nodebak/nodemeta_A.xml</code> に、ノード B の場合、 <code>/nodebak/nodemeta_B.xml</code> にバックアップされるように、コンフィギュレーションファイルの名前を変更します。
domains.infa	ゲートウェイノードの接続情報が含まれます。	次のいずれかの場所に格納されます。 - クライアントおよびサーバーマシン上の Informatica インストールディレクトリ。 - <code>INFA_DOMAINS_FILE</code> 環境変数で設定されている場所。

第 5 章

ドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [ドメインのアップグレードの概要, 47 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 48 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 52 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 55 ページ](#)
- [ドメインアップグレードのトラブルシューティング, 58 ページ](#)

ドメインのアップグレードの概要

以前のバージョンの Informatica サービスのドメインをアップグレードするには、サーバーインストーラを使用します。サーバーインストーラのドメインアップグレードウィザードを使用してアップグレードプロセスを実行できます。

アップグレードウィザードによって、指定したインストールディレクトリに Informatica 10.0 がインストールされます。以前のバージョンのディレクトリにあるファイルは変更されません。

アップグレードウィザードによって、以前のバージョンのファイルからドメイン情報が読み込まれ、同じ設定を使用して Informatica 10.0 のドメインとサーバーファイルが設定されます。これにより、以前のバージョンと同じデータベース内のドメイン環境設定リポジトリのテーブルがアップグレードされます。

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。Windows では、グラフィカルモードまたはサイレントモードでアップグレードできます。UNIX では、コンソールモード、またはサイレントモードでアップグレードできます。

注: 複数ノードのドメインでは、マスタゲートウェイノードをアップグレードした後でその他のノードをアップグレードしてください。

DVD から、またはインストールファイルのダウンロード元であるディレクトリのルートからアップグレードを実行できます。

ドメインをアップグレードした後、Informatica Developer を、HotFix バージョンを含む同じ Informatica バージョンにアップグレードします。

グラフィカルモードでのアップグレード

グラフィカルモードでは、同じマシンのドメインと同じドメイン環境設定リポジトリデータベースのドメインをアップグレードできます。Windows では、グラフィカルモードでドメインをアップグレードできます。

ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードして、ノード設定を変更するには、[第6章、「ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード」\(ページ 59\)](#)を参照してください。

Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。
管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして [管理者として実行] を選択します。

注: 管理者としてインストーラを実行しないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じることがあります。

[[Informatica 10.0](#)] ページが表示されます。

4. [[Informatica 10.0 をインストールするかそのバージョンにアップグレードする](#)] を選択します。

Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツール。

Informatica サービスをインストール中のマシンがインストールに必要なシステム要件を満たしているかを確認します。インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行に関する詳細は、[「インストール前 \(i10Pi\) システムチェックツールの実行」\(ページ 22\)](#) を参照してください。

5. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから [[契約条項に同意します](#)] を選択します。

Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『*Informatica Administrator ガイド*』を参照してください。

6. [[開始](#)] をクリックします。
7. [[Informatica <バージョン>へアップグレード](#)] を選択します。
[[アップグレード前提条件](#)] ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。
8. アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
9. [[次へ](#)] をクリックします。
10. [[アップグレードディレクトリ](#)] ページで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.0 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.0 のディレクトリ	Informatica 10.0 のインストール先にするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ ^\$#!%(){}[],;' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。áや€などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。 Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。

11. アップグレードに潜在的な問題があるかどうかを特定するためにアップグレード前チェックプロセスを実行するには、【アップグレード前のチェックの有効化】オプションを選択します。

12. 【ノードホスト名とポート番号への変更を許可】オプションが選択されていないことを確認します。

13. 【次へ】をクリックします。

アップグレードを続行する前に Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

14. 【OK】をクリックします。

15. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのキーワードとディレクトリを入力します。

Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。ドメインを単一のノードでアップグレードするときには、そのドメインの暗号化キー作成に使用するキーワードを指定する必要があります。

複数のノードを持つドメインをアップグレードするときには、インストーラがアップグレードするノードのタイプを判断し、ノードのタイプに応じて異なる画面を表示します。マスター・ゲートウェイノードをアップグレードする場合、ドメイン用の暗号化キーを作成するためのキーワードを指定する必要があります。

その他のノードのアップグレードを続けて行うときには、マスタゲートウェイノードをアップグレードしたときにドメイン用に作成された暗号化キーを指定する必要があります。

- 次の表に、単一のノードでドメインをアップグレードする場合、または複数ノードドメインのマスタゲートウェイノードをアップグレードする場合に指定する暗号化キーのパラメータを示します。

プロパティ	説明
キーワード	<p>ドメイン内で機密データを保護するためのカスタム暗号化キーの作成時に使用するキーワードです。キーワードは以下の基準をすべて満たす必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 長さが 8~20 文字である - 大文字を 1 文字以上使用する - 小文字を 1 文字以上使用する - 数字を 1 文字以上使用する - スペースを含まない <p>暗号化キーは、Informatica ドメインを作成するときに指定するキーワードに基づいて作成されます。</p>
暗号化キークリエイタリ	マスタゲートウェイノードの暗号化キーを格納するクリエイタリ。

- 次の表に、マスタゲートウェイノード以外のノードをアップグレードするときに指定する暗号化キーのパラメータを示します。

プロパティ	説明
暗号化キーの選択	アップグレードするノードの Informatica ドメイン用の暗号化キーのパスとファイル名。ドメイン内のノードにアクセスできるように暗号化キー/ファイルを一時ディレクトリにコピーした場合、一時ディレクトリ内の暗号化キー/ファイルパスおよびファイル名を指定します。
暗号化キークリエイタリ	アップグレードするノードの暗号化キーを格納するクリエイタリ。

注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キー/ファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。暗号化キーがない場合は、暗号化キーを生成するために使用されたドメイン名とキーワードが必要です。

- [次へ] をクリックします。
- [インストール前のサマリ] ページでアップグレード情報を確認し、続行する場合は [インストール] をクリックします。
アップグレードウィザードによって、Informatica のサーバーファイルが Informatica 10.0 のインストールディレクトリにインストールされます。
- ゲートウェイノードをアップグレードしている場合は、アップグレードされるドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザー/アカウントの情報が表示されます。
作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリについて表示されるプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザー アカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザー アカウントのパスワード。

以前のバージョンの接続文字列がインストール時に作成された方法に基づいて、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース接続文字列が表示されます。

- 以前のバージョンがインストール時に JDBC URL を使用した場合は、データベースのアドレスとサービス名を含む JDBC 接続プロパティが表示されます。
必要に応じて、追加の JDBC パラメータを指定して JDBC URL に含めることができます。追加の JDBC パラメータを指定するには、JDBC パラメータを選択して、有効な JDBC パラメータ文字列を入力します。
- 以前のバージョンでインストール時にカスタム JDBC 接続文字列が使用された場合は、カスタム接続文字列が表示されます。
追加の JDBC パラメータは指定できません。

19. [テスト接続] をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、[OK] をクリックして続行します。

20. [次へ] をクリックします。

Windows では、アップグレード ウィザードによって Informatica を起動するためのサービスが作成されます。デフォルトでは、サービスはインストールに使用されるアカウントと同じユーザー アカウントで実行されます。別のユーザー アカウントで Windows サービスを実行できます。

21. 別のユーザー アカウントで Windows サービスを実行するかどうかを選択します。

以下の表に、設定するプロパティを示します。

プロパティ	説明
別のユーザー アカウントで Informatica を実行する	別のユーザー アカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザ名	Informatica Windows サービスを実行するユーザー アカウント。 次の形式を使用します。 DomainName\UserName このユーザアカウントには、「オペレーティングシステムの一部として機能」権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザー アカウントのパスワード。

22. [完了] をクリックします。

アップグレード ログ ファイルを表示して、アップグレード ウィザードが実行したタスクの詳細およびインストールされたコンポーネントの設定を確認できます。

コンソールモードでのアップグレード

コンソールモードでは、同じマシンのドメインと同じドメイン環境設定リポジトリデータベースのドメインをアップグレードできます。UNIX では、ドメインをコンソールモードでアップグレードできます。

ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードして、ノード設定を変更するには、[第6章、「ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード」\(ページ 59\)](#)を参照してください。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit および Back という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使用しないでください。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、N キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、Y キーを押して続行します。
5. Informatica のインストールまたはアップグレードを行う場合は、1 を押します。

Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツール。

Informatica サービスをインストール中のマシンがインストールに必要なシステム要件を満たしているかを確認します。インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの詳細については、「[「インストール前 \(i10Pi\) システムチェックツールの実行」\(ページ 32\)](#)」を参照してください。

6. Informatica サービスのインストールを実行するには 3 を押します。
7. インストールを続行するには、Y キーを押します。
8. Informatica 10.0 にアップグレードするには、2 キーを押します。
9. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから 2 を押して更新を続行します。
Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『*Informatica Administrator ガイド*』を参照してください。
10. Enter キーを押します。
11. プロンプトで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.0 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要のあるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.0 のディレクトリ	Informatica 10.0 のインストール先にするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ *#\$!%(){}[],;' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。áやéなどの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。 Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。

12. アップグレードに潜在的な問題があるかどうかを特定するためにアップグレード前チェックプロセスを実行するには、【アップグレード前のチェックの有効化】オプションを選択します。
13. 「1」と入力すると、以前のバージョンと同じノード設定が使用されます。
アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
14. **Enter** キーを押します。
15. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのキーワードとディレクトリを入力します。
Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。ドメインを単一のノードでアップグレードするときには、そのドメインの暗号化キー作成に使用するキーワードを指定する必要があります。
複数のノードを持つドメインをアップグレードするときには、インストーラがアップグレードするノードのタイプを判断し、ノードのタイプに応じて異なる画面を表示します。マスタゲートウェイノードをアップグレードする場合、ドメイン用の暗号化キーを作成するためのキーワードを指定する必要があります。

その他のノードのアップグレードを続けて行うときには、マスタゲートウェイノードをアップグレードしたときにドメイン用に作成された暗号化キーを指定する必要があります。

- 次の表に、単一のノードでドメインをアップグレードする場合、または複数ノードドメインのマスタゲートウェイノードをアップグレードする場合に指定する暗号化キーのパラメータを示します。

プロパティ	説明
キーワード	<p>ドメイン内で機密データを保護するためのカスタム暗号化キーの作成時に使用するキーワードです。キーワードは以下の基準をすべて満たす必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 長さが 8~20 文字である - 大文字を 1 文字以上使用する - 小文字を 1 文字以上使用する - 数字を 1 文字以上使用する - スペースを含まない <p>暗号化キーは、Informatica ドメインを作成するときに指定するキーワードに基づいて作成されます。</p>
暗号化キークリエイタ	マスタゲートウェイノードの暗号化キーを格納するクリエイタ。

- 次の表に、マスタゲートウェイノード以外のノードをアップグレードするときに指定する暗号化キーのパラメータを示します。

プロパティ	説明
暗号化キーの選択	アップグレードするノードの Informatica ドメイン用の暗号化キーのパスとファイル名。ドメイン内のノードにアクセスできるように暗号化キー/ファイルを一時ディレクトリにコピーした場合、一時ディレクトリ内の暗号化キー/ファイルパスおよびファイル名を指定します。
暗号化キークリエイタ	アップグレードするノードの暗号化キーを格納するクリエイタ。

注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キー/ファイル名は安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。暗号化キーがない場合は、暗号化キーを生成するために使用されたドメイン名とキーワードが必要です。

16. アップグレード情報を確認し、Enter キーを押して続行します。

インストーラがサーバーファイルを Informatica 10.0 のインストールディレクトリにコピーします。

アップグレードするドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウントの情報が表示されます。以前のバージョンの接続文字列がインストール時に作成された方法に基づいて、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース接続文字列が表示されます。

- 以前のバージョンがインストール時に JDBC URL を使用した場合は、データベースのアドレスとサービス名を含む JDBC 接続プロパティが表示されます。
- 以前のバージョンでインストール時にカスタム JDBC 接続文字列が使用された場合は、カスタム接続文字列が表示されます。

17. Enter キーを押します。

18. JDBC URL を使用する場合は、追加のパラメータを指定して接続文字列に含めることができます。

カスタム接続文字列を使用する場合は、追加のパラメータを指定できません。

[インストール後のサマリ] ウィンドウには、アップグレードが正常に完了したかどうかを示すメッセージが表示されます。また、インストールされたコンポーネントとその設定のステータスも表示されます。

アップグレードログファイルを表示して、インストーラが実行したアップグレードタスクの詳細およびインストールされたコンポーネントの設定プロパティを確認できます。

サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでは、同じマシンのドメインと同じドメイン環境設定リポジトリデータベースのドメインをアップグレードできます。

ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードして、ノード設定を変更するには、[第6章、「ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード」\(ページ 59\)](#)を参照してください。

ユーザーの操作なしで Informatica サービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica サービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシン上のハードディスクにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

プロパティファイルの作成

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのアップグレードプロパティファイルの名前は SilentInput_upgrade.properties で、インストール DVD のルートディレクトリまたはインストーラのダウンロードの場所にあります。ファイルをカスタマイズした後、SilentInput.properties というファイル名で保存します。

1. インストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput_upgrade.properties という名前のファイルを検索します。
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。

以下の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	Informatica をインストールするか、アップグレードするかを指定します。 値が 0 の場合、インストーラは Informatica の新規インストールを実行します。値が 1 の場合、インストーラは以前のバージョンの Informatica をアップグレードします。
USER_INSTALL_DIR	新しいバージョンの Informatica サービスをインストールするディレクトリ。以前のバージョンの Informatica サービスが存在するディレクトリと同じディレクトリは使用できません。
UPG_BACKUP_DIR	アップグレードする Informatica サービスの以前のバージョンを含むディレクトリ。
KEY_DEST_LOCATION	このインストールで作成されたノードの暗号化キーを格納するディレクトリ。
PASS_PHRASE_PASSWD	ドメイン内で機密データを保護するための暗号化キーの作成時に使用するキーワードです。キーワードは以下の基準をすべて満たす必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> - 長さが 8~20 文字である - 大文字を 1 文字以上使用する - 小文字を 1 文字以上使用する - 数字を 1 文字以上使用する - スペースを含まない マスタゲートウェイノードをアップグレードする場合は、このプロパティを設定します。
KEY_SRC_LOCATION	Informatica ドメインのマスタゲートウェイノード用の暗号化キーを含むディレクトリ。マスタゲートウェイノード以外のノードをアップグレードした場合にこのプロパティを設定します。
SERVER_PORT	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。このパラメータは、ADVANCE_PORT_CONFIG=1 の場合に設定できます。
AC_PORT	Administrator ツールで使用されるポート番号。 このパラメータは、ADVANCE_PORT_CONFIG=1 の場合に設定できます。

プロパティ名	説明
AC_SHUTDOWN_PORT	Administrator ツール用にサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。 Administrator ツールは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。 このパラメータは、ADVANCE_PORT_CONFIG=1 の場合に設定できます。
ENABLE_USAGE_COLLECTION	Informatica DiscoveryIQ を有効にします。これは、データの使用状況とシステムの統計値に関するレポートを定期的に Informatica に送信する製品使用状況ツールです。 Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『 <i>Informatica Administrator ガイド</i> 』を参照してください。 アップグレードするには、値を 1 に設定する必要があります。

4. Windows の場合は、アップグレードに使用するアカウントと同じユーザーアカウントで Informatica サービスを実行するかどうかを指定します。

以下の表に、設定するプロパティを示します。

プロパティ	説明
USE_LOGIN_DETAILS	別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。値が 0 の場合、サービスは現在のユーザーアカウントで実行するように設定されます。値が 1 の場合、サービスは別のユーザーアカウントで実行するように設定されます。
WIN_USER_ID	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウント。 次の形式を使用します。 <code><domain name>\<user account></code> このユーザーアカウントには、[オペレーティングシステムの一部として機能] 権限を付与する必要があります。
WIN_USER_PSSWD	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントのパスワード。

5. プロパティファイルを SilentInput.properties という名前で保存します。

サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。

Windows で、管理者としてコマンドプロンプトを開きます。管理者としてコマンドプロンプトを開かないとい、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じことがあります。

2. サーバーインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む SilentInput.properties ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントアップグレードを実行します。 Windows で silentInstall.bat を実行します。 UNIX では、silentInstall.sh を実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。 `Informatica_<バージョン>_Services_InstallLog.log` がインストールディレクトリに作成されると、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、サイレントアップグレードログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。サイレントアップグレードログファイルの名前は `silentErrorLog.log` です。このファイルは、Windows ではルートディレクトリに、UNIX ではユーザーホームディレクトリに作成されます。

プロパティファイル内のパスワードの保護

サイレントアップグレードの実行後、プロパティファイル内のパスワードが保護されていることを確認します。

サイレントアップグレード用のプロパティファイルを設定する場合は、パスワードをブレーンテキストで入力します。サイレントアップグレードを実行したら、次のいずれかの方法を使用してパスワードを保護します。

- プロパティファイルからパスワードを削除する。
- プロパティファイルを削除する。
- プロパティファイルを安全な場所に保存する。

ドメインアップグレードのトラブルシューティング

アップグレードが正常に完了しない場合は、ログファイルを調べて障害の原因を特定します。アップグレードログファイルは、新しいバージョンの Informatica がインストールされているディレクトリのルートにあります。次のログファイルを確認します。`Informatica_<Version>_Services_Upgrade.log`

アップグレードが失敗した場合は、バックアップからドメイン環境設定リポジトリデータベースをリストアし、インストーラを再度実行します。

安全な通信のために Administrator ツールが設定されている場合、Administrator ツールにアクセスしたときに、404 Not Found メッセージが表示される場合があります。この問題は、ゲートウェイノードを実行しているマシンが、Administrator ツールへの HTTPS 接続に使用されているキーストアファイルにアクセスできない場合に発生します。キーストアファイルをアクセス可能な場所にコピーしてから、ドメインをシャットダウンします。`infasetup UpdateGatewayNode` コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

第 6 章

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要, 59 ページ](#)
- [ノード設定の変更の準備, 59 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 65 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 71 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 76 ページ](#)

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要

ドメインをアップグレードする場合は、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定を変更できます。

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいマシンのノードを設定するようにノード設定を変更します。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいデータベースを設定するようにノード設定を変更します。

インストーラを実行する前にアップグレード前のタスクを完了します。Windows では、グラフィカルモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。UNIX では、コンソールモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。

ノード設定の変更の準備

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードを行う前に、アップグレードの準備として以下の手順を行います。

ノード設定にどのような変更を行うかによって、実行する手順は異なります。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行できます。または、Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行できます。

別のデータベースへの移行

ドメイン環境設定リポジトリのデータベースのタイプまたはバージョンのサポートが終了した場合は、リポジトリを別のデータベースに移行する必要があります。ドメインをアップグレードする前に、以前の Informatica インスタンスのリポジトリを移行します。

例えば、ドメイン環境設定リポジトリが Sybase ASE 15.0.3 データベースにある場合は、Sybase ASE 15.7 データベースにそのリポジトリを移行します。

製品の要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、Informatica マイサポートポータルの Product Availability Matrix を参照してください。

<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

1. ドメインがシャットダウンされていることを確認します。
2. infasetup BackupDomain コマンドを使用して、ドメイン環境設定データベーステーブルがファイルにバックアップされていることを確認します。
3. データベーススキーマとユーザーアカウントをサポートされるデータベース中に作成します。
4. infasetup RestoreDomain コマンドを使用して、バックアップファイル中のドメイン環境設定を指定したデータベーススキーマにリストアします。
5. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、[ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する] オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいドメイン環境設定リポジトリデータベースに接続するようにゲートウェイノードを設定できます。すべてのゲートウェイノードには、ドメイン環境設定を取得および更新するためのドメイン環境設定リポジトリへの接続が必要です。作業ノードをアップグレードする場合は、[ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する] オプションをオフにします。

別のマシンへのインストールの移行

サポートが終了しているオペレーティングシステムのマシンに Informatica サービスがインストールされている場合、ドメインをアップグレードする前に、別のマシンにそのインストールを移行する必要があります。

例えば、Informatica の 9.6.0 では、32 ビットの Linux をサポートしなくなりました。9.5.1 ドメインのノードが 32 ビットの Linux にある場合、ノードを 10.0 にアップグレードする前に、このノードをサポートされているオペレーティングシステムのマシンに移行する必要があります。

製品の要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、Informatica マイサポートポータルの Product Availability Matrix を参照してください。

<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

ドメインをアップグレードする前に、新しいバージョンの Informatica を実行するマシン上で、次の手順を実行します。

1. インストールディレクトリをコピーします。
2. ポート要件を確認します。
3. システムユーザーアカウントを作成します。
4. 新しいマシンでデータ統合サービス、PowerCenter リポジトリサービス、または PowerCenter 統合サービスを実行する場合は、これらのサービスがデータベースに接続できるように、新しいマシンでネイティブ接続を設定します。

移行したノードをアップグレードする場合は、[ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する] オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいマシンのノードの設定を更新できます。別のマシンに移行しなかったドメイン内の他のノードをアップグレードする場合は、[ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する] オプションをオフにします。

インストールディレクトリのコピー

以前のバージョンの Informatica のディレクトリを、新しいバージョンの Informatica を実行するマシンにコピーします。

例えば、以前のバージョンの Informatica が C:\Informatica\9.5.1 にインストールされている場合、C:\Informatica\9.5.1 ディレクトリとサブディレクトリを新しいマシンにコピーします。

アップグレードインストーラを実行するとき、新しいマシン上の Informatica インストールディレクトリを、アップグレード対象のディレクトリとして指定します。

ポート要件の確認

インストーラによって Informatica ドメイン内のコンポーネントのポートが設定され、一部のアプリケーションサービスに使用する動的ポートの範囲が指定されます。

コンポーネントに使用するポート番号と、アプリケーションサービスに使用する動的ポート番号の範囲を指定することができます。あるいは、インストーラによって提供されるデフォルトのポート番号を使用することができます。ポート番号が Informatica サービスをインストールするマシンで利用可能かどうかを確認します。

以下の表に、Informatica で使用されるポートを示します。

ポートタイプ	説明
ノードのポート	インストール中に作成されるノード用のポート番号。デフォルトは 6005 です。
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。サービスマネージャは、このポートで受信する接続要求をリスンします。クライアントアプリケーションは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。これは、Informatica コマンドラインプログラムがドメインと通信するために使用するポートです。このポートは、SQL データサービスの JDBC/ODBC ドライバ用のポートでもあります。デフォルトは 6006 です。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6007 です。
Informatica Administrator ポート	Informatica Administrator が使用するポート番号。デフォルトは 6008 です。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Informatica Administrator のサーバーシャットダウンを制御するポート番号。Informatica Administrator は、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6009 です。

ポートタイプ	説明
アプリケーションサービス用の動的ポートの範囲	<p>アプリケーションサービスプロセスの起動時に動的に割り当て可能なポート番号の範囲。動的ポートを使用するアプリケーションサービスを起動すると、サービスマネージャがこの範囲内の使用可能なポートの 1 番目をサービスプロセスに動的に割り当てます。範囲内のポート数は、少なくとも、ノード上で実行するアプリケーションサービスプロセスの数の 2 倍以上である必要があります。デフォルトは 6014~6114 です。</p> <p>サービスマネージャは、この範囲からポート番号を次のアプリケーションサービスに動的に割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - モデルリポジトリサービス - PowerCenter 統合サービス - PowerCenter リポジトリサービス <p>サービスマネージャは、システムサービスにもこの範囲からポート番号を割り当てます。</p>
アプリケーションサービスの静的ポート	<p>静的ポートは、番号を変更しない専用ポート番号に割り当てられるポートです。アプリケーションサービスを作成する際に、デフォルトのポート番号を受け入れることも、手動でポート番号を割り当てることもできます。</p> <p>次のサービスでは、静的ポート番号を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - アナリストサービス。HTTP のデフォルトのポート番号は 8085 です。 - コンテンツ管理サービス。HTTP のデフォルトのポート番号は 8105 です。 - データ統合サービス。HTTP のデフォルトのポート番号は 8095 です。 - Metadata Manager サービス。HTTP のデフォルトのポート番号は 10250 です。 - レポートおよびダッシュボードサービス。HTTP のデフォルトのポート番号は 10370 です。 - レポートサービス。HTTP のデフォルトのポート番号は 16080 です。 - 検索サービス。HTTP のデフォルトのポート番号は 8084 です。 - Web サービス Hub。HTTP のデフォルトのポート番号は 7333 です。

注: ポートの競合がある場合、サービスおよびノードは起動に失敗する場合があります。アップグレード後に、アプリケーションサービスのポートの範囲を更新することができます。

Windows でのシステムユーザーアカウントの作成

システムユーザーアカウントを作成し、インストールを行ってから Informatica サービスを実行します。Informatica サービスのインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

マシンにログインしたユーザーアカウントを使用して Informatica をインストールし、別のユーザーアカウントで実行することができます。ローカルアカウントまたはドメインアカウントを作成して、Informatica をインストールするか、または Informatica Windows サービスを実行することができます。

注: Windows の信頼関係接続を使用する Microsoft SQL Server 上のリポジトリにアクセスするには、ドメインアカウントを作成します。

ユーザーアカウントは、インストーラを実行するための、または Informatica Windows サービスを実行するための以下の権限が必要になります。

- **ログインユーザーアカウント。** このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインします。
- **別のユーザーアカウント。** このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン、およびオペレーティングシステムの一部として機能の権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインする必要はありません。インストール中に、Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントを指定することができます。

UNIX でのシステムユーザーアカウントの作成

Informatica デーモンを実行する専用のユーザーアカウントを作成します。

Informatica のインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

サービスマシンでのネイティブ接続の設定

アプリケーションサービスとデータベース間にネイティブ接続を確立するには、アクセスするデータベースのデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

ネイティブドライバは、データベースサーバーおよびクライアントソフトウェアにパッケージ化されています。データベースにアクセスする必要があるマシンに接続を設定します。アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確認するには、データベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールし、適切なデータベースクライアントライブラリを使用します。

次のサービスは、ネイティブ接続を使ってさまざまなデータベースに接続します。

データ統合サービス

データ統合サービスは、ネイティブデータベースドライバを使って次のデータベースに接続します。

- ソースデータベースとターゲットデータベース。ソースデータベースからデータを読み取って、ターゲットデータベースに書き込みます。
- データオブジェクトキャッシュデータベース。データオブジェクトキャッシュを保存します。
- Profiling ソースデータベース。リレーションナルソースデータベースから読み取って、プロファイルをソースに対して実行します。
- プロファイリングウェアハウス。プロファイリング結果をプロファイリングウェアハウスに書き込みます。
- 参照テーブル。マッピングを実行して、参照テーブルと外部データソース間でデータを転送します。

データ統合サービスが単一のノードまたはプライマリノードやバックアップノードで実行されている場合は、データ統合サービスが実行されるマシンにデータベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

データ統合サービスがグリッドで実行されている場合は、計算ロールを持つノードまたはサービスロールと計算ロールの両方を持つノードの各マシンに、データベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

PowerCenter リポジトリサービス

PowerCenter リポジトリサービスは、ネイティブデータベースドライバを使って PowerCenter リポジトリデータベースに接続します。

PowerCenter リポジトリサービスと PowerCenter リポジトリサービスプロセスが実行されるマシンに、データベースクライアントソフトウェアをインストールして接続性を設定します。

PowerCenter 統合サービス

PowerCenter 統合サービスは、ネイティブデータベースドライバを使って次のデータベースに接続します。

- ソースデータベースとターゲットデータベース。ソースデータベースから読み取って、ターゲットデータベースに書き込みます。
- Metadata Manager ソースデータベース。Metadata Manager でリレーションナルデータソースをロードします。

リレーションナルデータソースとリポジトリデータベースに関連付けられたデータベースクライアントソフトウェアを、PowerCenter 統合サービスが実行されるマシンにインストールします。

データベースクライアントソフトウェアのインストール

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、所定のマシンにデータベースクライアントをインストールする必要があります。

アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確保するには、適切なデータベースクライアントライブラリを使用して、そのデータベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールします。

Windows 上の Informatica サービスをアップグレードする場合、データ統合サービス、PowerCenter 統合サービス、および PowerCenter リポジトリサービスが実行するマシン上に適切なデータベースクライアントがインストールされていることを確認します。

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、次のデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

IBM DB2 Client Application Enabler (CAE)

所定のマシンに Informatica サービスを起動するユーザーとして接続し、そのマシンの接続を設定します。

Microsoft SQL Server 2012 Native Client

既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

次の Microsoft の Web サイトからクライアントをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/en-in/download/details.aspx?id=29065>.

Oracle クライアント

互換性のあるバージョンの Oracle クライアントと Oracle データベースサーバをインストールします。また、必要とするすべてのマシンに Oracle クライアントの同じバージョンをインストールする必要があります。互換性を確認するには、Oracle に問い合わせてください。

Sybase Open Client (OCS)

Sybase ASE データベースサーバと互換性のあるバージョンの Open Client をインストールします。また、Sybase ASE データベースおよび Informatica をホストするマシンに同じバージョンの Open Client をインストールする必要があります。互換性を確認するには、Sybase に問い合わせてください。

UNIX 上でのデータベースクライアントの環境変数の設定

データ統合サービス、PowerCenter 統合サービス、PowerCenter リポジトリサービスプロセスが実行されるマシンに、データベースクライアントの環境変数を設定します。

データベースクライアントのパスの変数名と要件は、UNIX プラットフォームとデータベースによって異なります。

データベース環境変数の設定後、データベースとデータベースクライアント間の接続をテストできます。

次の表に、UNIX に設定する必要のあるデータベース環境変数を示します。

データベース	環境変数名	データベースユーティリティ	値
Oracle	ORACLE_HOME PATH	sqlplus	設定 : <DatabasePath> 追加 : <DatabasePath>/bin
IBM DB2	DB2DIR DB2INSTANCE PATH	db2connect	設定 : <DatabasePath> 設定 : <DB2InstanceName> 追加 : <DatabasePath>/bin
Sybase ASE	SYBASE15 SYBASE_ASE SYBASE_OCS PATH	isql	設定: <DatabasePath>/sybase<version> 設定 : \${SYBASE15}/ASE-<version> 設定 : \${SYBASE15}/OCS-<version> 追加: \${SYBASE_ASE}/bin:\${SYBASE_OCS}/bin: \$PATH

グラフィカルモードでのアップグレード

グラフィカルモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。Windows では、グラフィカルモードでドメインをアップグレードできます。

同じマシン上および同じドメイン環境設定リポジトリデータベース上でドメインをアップグレードするには、「[グラフィカルモードでのアップグレード](#)」(ページ 48)を参照してください。

Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

- 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
- アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
- インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。
管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして [管理者として実行] を選択します。

注: 管理者としてインストーラを実行しないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じことがあります。

[Informatica 10.0] ページが表示されます。

- [Informatica 10.0 をインストールするかそのバージョンにアップグレードする] を選択します。

Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツール。

Informatica サービスをインストール中のマシンがインストールに必要なシステム要件を満たしているかを確認します。インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの実行に関する詳細は、「[\[インストール前 \(i10Pi\) システムチェックツールの実行\]](#)」(ページ 22) を参照してください。

- Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **【契約条項に同意します】** を選択します。
- Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『*Informatica Administrator ガイド*』を参照してください。
- 【開始】** をクリックします。
- 【Informatica <バージョン>へアップグレード】** を選択します。
- 【アップグレード前提条件】** ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。
- アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
- 【次へ】** をクリックします。
- 【アップグレードディレクトリ】** ページで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.0 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.0 のディレクトリ	Informatica 10.0 のインストール先にするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$#!%(){}[],;' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。áやéなどの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じことがあります。 Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。

- アップグレードに潜在的な問題があるかどうかを特定するためにアップグレード前チェックプロセスを実行するには、**【アップグレード前のチェックの有効化】** オプションを選択します。
- 【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** を選択します。
- アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。
- 【次へ】** をクリックします。
- アップグレードを続行する前に Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
- 【OK】** をクリックします。
- 【次へ】** をクリックします。
- 【インストール前のサマリ】** ページでアップグレード情報を確認し、続行する場合は **【インストール】** をクリックします。
- アップグレードウィザードによって、Informatica のサーバーファイルが Informatica 10.0 のインストールディレクトリにインストールされます。

17. ゲートウェイノードをアップグレードしている場合は、[ドメイン環境設定リポジトリのアップグレード] ページにドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウント情報を入力します。作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [22](#) に進みます。

以下の表に、データベースおよびユーザーアカウント用に指定するプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。Oracle、IBM DB2、Microsoft SQL Server、または Sybase ASE を選択します。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザーアカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
テーブルスペース	IBM DB2 で使用できます。テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSize の要件である 32768 バイトを満たすテーブルスペースを指定します。 単一パーティションのデータベースでは、このオプションが選択されていない場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。 複数パーティションのデータベースでは、このオプションを選択し、データベースのカタログパーティション内に存在するテーブルスペースの名前を指定します。
スキーマ名	Microsoft SQL Server で使用できます。ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。選択されていない場合、インストーラはデフォルトのスキーマでテーブルを作成します。
信頼関係接続	Microsoft SQL Server で使用できます。信頼関係接続を使用して Microsoft SQL Server に接続するかどうかを示します。信頼認証は、現在のユーザーのセキュリティ資格情報を使用して Microsoft SQL Server へ接続します。選択されていない場合、インストーラは Microsoft SQL Server 認証を使用します。

18. [セキュアデータベース] オプションが選択されていないことを確認します。

以前のバージョンではセキュアデータベースオプションがサポートされていないため、アップグレード中は、SSL プロトコルで保護されたデータベース内にドメイン環境設定リポジトリを作成できません。アップグレード後は、セキュアなドメイン環境設定リポジトリデータベースを設定できます。

19. JDBC 接続情報を入力します。

- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、[JDBC URL] を選択し、JDBC の URL のプロパティを指定します。

次の表で、指定する必要のある JDBC URL プロパティについて説明します。

プロパティ	説明
データベースアドレス	host_name:port フォーマットのデータベースのホスト名とポート番号。
データベースサービス名	サービスまたはデータベースの名前: - Oracle: サービス名を入力します。 - Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。 - IBM DB2: サービス名を入力します。 - Sybase ASE: データベース名を入力します。
JDBC パラメータ	データベース接続文字列に含めるオプションのパラメータです。パラメータを使用して、設定データベースのデータベース操作を最適化します。アップグレードウィザードは、前バージョンをインストールしたときに指定したパラメータを表示します。JDBC パラメータ文字列を変更できます。パラメータ文字列が有効であることを確認してください。アップグレードウィザードは、文字列を JDBC URL に追加する前にパラメータ文字列を検証しません。選択されていない場合、アップグレードウィザードは追加パラメータなしで JDBC URL 文字列を作成します。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、[カスタム JDBC 接続文字列] を選択して接続文字列を入力します。

データベースの JDBC 接続文字列に次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://host_name:port_no;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://host_name:port_no;ServiceName=
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

Sybase

```
jdbc:Informatica:sybase://host_name:port_no;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

- [テスト接続] をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、[OK] をクリックして続行します。
- [次へ] をクリックします。
インストーラで、ドメインとノードのプロパティが表示されます。
- 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。

以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , <> \ /
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	新しいバージョンの Informatica のノードをホストするマシンのホスト名。マシンに 1 つのネットワーク名しかない場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。 作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

23. カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルのパスワードと場所を指定します。

次の表に、Informatica Administrator カスタムキーストアのプロパティを示します。

プロパティ	説明
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのプレーンテキストパスワード。
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\

24. [次へ] をクリックします。

[ポート設定のアップグレード] ページに、ドメインおよびノードコンポーネントに割り当てられているポート番号が表示されます。

25. 新しいポート番号を指定しても、デフォルトのポート番号を使用してもかまいません。

以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

26. [次へ] をクリックします。

Windows では、アップグレードウィザードによって Informatica を起動するためのサービスが作成されます。デフォルトでは、サービスはインストールに使用されるアカウントと同じユーザー アカウントで実行されます。別のユーザー アカウントで Windows サービスを実行できます。

27. 別のユーザー アカウントで Windows サービスを実行するかどうかを選択します。

以下の表に、設定するプロパティを示します。

プロパティ	説明
別のユーザー アカウントで Informatica を実行する	別のユーザー アカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザ名	Informatica Windows サービスを実行するユーザー アカウント。 次の形式を使用します。 DomainName\UserName このユーザアカウントには、「オペレーティングシステムの一部として機能」権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザー アカウントのパスワード。

28. [次へ] をクリックします。

[アップグレード後のサマリ] ページに、アップグレードが正常に完了したかどうかが示されます。

29. [完了] をクリックします。

アップグレードログファイルを表示して、アップグレードウィザードが実行したタスクの詳細およびインストールされたコンポーネントの設定を確認できます。

コンソールモードでのアップグレード

コンソールモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。UNIX では、ドメインをコンソールモードでアップグレードできます。

同じマシン上および同じドメイン環境設定リポジトリデータベース上でドメインをアップグレードするには、[「コンソールモードでのアップグレード」（ページ 52）](#)を参照してください。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit および Back という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使用しないでください。

1. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
2. 環境変数が設定されていない場合は、N キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、Y キーを押して続行します。
3. Informatica のインストールまたはアップグレードを行う場合は、1 を押します。

Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

インストール前 (i10Pi) システムチェックツール。

Informatica サービスをインストール中のマシンがインストールに必要なシステム要件を満たしているかを確認します。インストール前 (i10Pi) システムチェックツールの詳細については、「[「インストール前 \(i10Pi\) システムチェックツールの実行」（ページ 32）](#)」を参照してください。

4. Informatica サービスのインストールを実行するには、3 キーを押します。
5. インストールを続行するには、Y キーを押します。
6. Informatica 10.0 にアップグレードするには、2 キーを押します。
7. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから 2 を押して更新を続行します。
Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『*Informatica Administrator ガイド*』を参照してください。
8. Enter キーを押します。
9. プロンプトで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.0 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要のあるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.0 のディレクトリ	Informatica 10.0 のインストール先ディレクトリ。以前のバージョンの Informatica サービスが存在するディレクトリと同じディレクトリは使用できません。パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @ ^\$#!%(){}[],;' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。áや€などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じことがあります。

10. アップグレードに潜在的な問題があるかどうかを特定するためにアップグレード前チェックプロセスを実行するには、【アップグレード前のチェックの有効化】オプションを選択します。
11. ノードのホスト名とポート番号の変更を許可するには、**2**と入力します。
アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。
アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
12. **Enter** キーを押します。
13. アップグレード情報を確認し、**Enter** キーを押して続行します。
インストーラがサーバーファイルを Informatica 10.0 のインストールディレクトリにコピーします。
14. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、ドメイン環境設定リポジトリに使用するデータベースを選択します。
作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [18](#) に進みます。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリに使用できるデータベースを示します。

プロンプト	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリ用データベースのタイプ。次のオプションから選択します。 1 - Oracle 2 - Microsoft SQL Server 3 - IBM DB2 4 - Sybase ASE

15. データベースユーザーアカウントのプロパティを入力します。

以下の表に、データベースユーザー帳のプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースユーザー ID	ドメイン設定データベースのユーザー帳の名前。
ユーザーパスワード	ドメイン環境設定データベースのユーザー帳のパスワード。

16. セキュアではないデータベースにドメイン環境設定リポジトリを作成する場合は、2を押します。

以前のバージョンではセキュアデータベースオプションがサポートされていないため、アップグレード中は、SSLプロトコルで保護されたデータベース内にドメイン環境設定リポジトリを作成できません。アップグレード後は、セキュアなドメイン環境設定リポジトリデータベースを設定できます。

17. データベースのパラメータを入力します。

- a. IBM DB2を選択した場合は、テーブルスペースを設定するかどうかを選択し、テーブルスペース名を入力します。

以下の表に、IBM DB2データベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
テーブルスペースの設定	テーブルスペースを指定するかどうかを選択します。 1 - いいえ 2 - はい 単一パーティションのデータベースでは、いいえを選択した場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。複数パーティションのデータベースでは、はいを選択する必要があります。
テーブルスペース	テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSizeの要件である32768バイトを満たすテーブルスペースを指定します。 単一パーティションのデータベースでは、テーブルスペースを設定するために「はい」を選択する場合は、テーブルを作成するテーブルスペースの名前を入力します。 複数パーティションのデータベースでは、データベースのカタログパーティション内に存在するテーブルスペースの名前を指定します。

- b. Microsoft SQL Serverを選択した場合は、データベースのスキーマ名を入力します。

以下の表に、Microsoft SQL Serverデータベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
スキーマ名	ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。このパラメータが空白の場合、インストーラによりデフォルトのスキーマにテーブルが作成されます。

- c. JDBC URL情報を使用してJDBC接続情報を入力するには、1を押します。カスタムJDBC接続文字列を使用してJDBC接続情報を入力するには、2を押します。

d. JDBC 接続情報を入力します。

- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、JDBC の URL のプロパティを指定します。以下の表に、データベース接続情報を示します。

プロンプト	説明
データベースホスト名	データベースのホスト名。
データベースポート番号	データベースのポート番号。
データベースサービス名	サービスまたはデータベースの名前: - Oracle: サービス名を入力します。 - Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。 - IBM DB2: サービス名を入力します。 - Sybase ASE: データベース名を入力します。
JDBC パラメータの設定	追加の JDBC パラメータを接続文字列に追加するかどうかを選択します。 1 - はい 2 - いいえ はいを選択する場合は、パラメータを入力するか Enter キーを押してデフォルトを受け入れます。いいえを選択する場合は、インストーラによりパラメータを使用せずに JDBC 接続文字列が作成されます。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、接続文字列を入力します。データベースの JDBC 接続文字列に次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://host_name:port_no;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://host_name:port_no;ServiceName=
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

Sybase

```
jdbc:Informatica:sybase://host_name:port_no;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

18. 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。

以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , <> \ /
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	アップグレードするノードをホストするマシンのホスト名。マシンに 1 つのネットワーク名しかない場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのブレーンテキストパスワード。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアパスワードを入力します。
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルを入力します。 このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。 作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

19. ドメインコンポーネントに割り当てられているポート番号が表示されます。

新しいポート番号を指定しても、デフォルトのポート番号を使用してもかまいません。

以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

[インストール後のサマリ] ウィンドウには、アップグレードが正常に完了したかどうかを示すメッセージが表示されます。また、インストールされたコンポーネントとその設定のステータスも表示されます。

アップグレードログファイルを表示して、インストーラが実行したアップグレードタスクの詳細およびインストールされたコンポーネントの設定プロパティを確認できます。

サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。

同じマシン上および同じドメイン環境設定リポジトリデータベース上でドメインをアップグレードするには、[「サイレントモードでのアップグレード」 \(ページ 55\)](#)を参照してください。

ユーザーの操作なしで Informatica サービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica サービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシン上のハードディスクにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

第 7 章

アプリケーションサービスをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [POSIX Asynchronous I/O の設定, 77 ページ](#)
- [Informatica の環境変数の設定, 77 ページ](#)
- [ロケール環境変数の設定, 78 ページ](#)
- [Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認, 78 ページ](#)
- [ブラウザキャッシュのクリア, 79 ページ](#)
- [ノード設定の変更の完了, 79 ページ](#)

POSIX Asynchronous I/O の設定

Informatica を IBM AIX マシンにインストールする場合、PowerCenter 統合サービスを実行するすべてのノードで POSIX Asynchronous I/O を有効にします。IBM AIX マシンで実行される PowerCenter 統合サービスは、POSIX Asynchronous I/O が有効になっていないと起動できないことがあります。

Informatica の環境変数の設定

INFA_DOMAINS_FILE および INFA_HOME の各環境変数を設定して、ドメインおよびインストール場所の設定を格納できます。

INFA_DOMAINS_FILE

インストーラにより、domains.infa ファイルが Informatica インストールディレクトリに作成されます。domains.infa ファイルには、ドメイン名、ドメインホスト名、およびドメインホストのポート番号など、ドメイン内のゲートウェイノードの接続情報が含まれています。

INFA_DOMAINS_FILE 変数の値を、domains.infa ファイルのパスおよびファイル名に設定します。

Informatica サービスをインストールするマシンで INFA_DOMAINS_FILE 変数を設定します。Windows では、INFA_DOMAINS_FILE をシステム変数として設定します。

INFA_HOME

INFA_HOME を使用して、Informatica インストールディレクトリを指定します。Informatica ディレクトリ構造を変更する場合は、環境変数に Informatica インストールディレクトリの場所、またはインストールされた Informatica ファイルがあるディレクトリの場所を設定する必要があります。

例えば、UNIX では任意の Informatica ディレクトリに対してソフトリンクを使用します。いずれの Informatica アプリケーションやサービスでも、実行する必要のあるその他の Informatica コンポーネントを見つけられるように INFA_HOME を設定するには、INFA_HOME に Informatica インストールディレクトリの場所を設定します。

ロケール環境変数の設定

LANG、LC_CTYPE、または LC_ALL を使用して、UNIX コードページを設定します。

異なる UNIX オペレーティングシステムには、同じロケールに対して異なる値が必要です。ロケール変数の値は、大文字と小文字が区別されます。

以下のコマンドを使用して、ロケール環境変数がマシンの言語設定、およびリポジトリで使用するコードページのタイプと互換性があることを確認します。

```
locale -a
```

このコマンドでは、UNIX オペレーティングシステムにインストールされている言語、および既存のロケールの設定が返されます。

Linux のロケール

Linux 以外のすべての UNIX オペレーティングシステムでは、各ロケールに対して一意の値を持っています。Linux では、さまざまな値を使用して同じロケールを表すことができます。たとえば、「utf8」、「UTF-8」、「UTF8」、および「utf-8」は、Linux マシンでは同じロケールを表しています。Informatica では、Linux マシンでロケールごとに特定の値を使用する必要があります。すべての Linux マシンについて、LANG 環境変数が適切に設定されていることを確認してください。

Oracle データベースクライアントのロケール

Oracle データベースクライアントの場合は、NLS_LANG をデータベースクライアントおよびサーバーへのログインで使用するロケールに設定します。ロケール設定は、言語、地域、および文字セットから構成されています。NLS_LANG の値は、設定に応じて異なります。例えば、値が american_america.UTF8 の場合、C シェルでは次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG american_america.UTF8
```

Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認

Administrator ツールへの接続を保護するために作成したキーストアファイルを使用していた場合は、Administrator ツールにアクセスする前に、そのキーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前のドメインでインストーラによって作成されたデフォルトのキーストアファイルを使用していた場合は、キーストアファイルの場所を確認する必要はありません。

実行する必要があるタスクは、キーストアファイルを以前に保存した以下の場所に応じて異なります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。
2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、ゲートウェイノードを更新します。

`infasetup UpdateGatewayNode` コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所にキーストアファイルを格納した場合は、ゲートウェイノードを実行するマシンがこのファイルにアクセスできることを確認します。

ブラウザキャッシュのクリア

Administrator ツールにアクセスする前に、ブラウザキャッシュをクリアします。

Windows Internet Explorer では、一時ファイル、クッキー、履歴などの閲覧履歴を削除します。

ブラウザキャッシュをクリアしない場合、以前の Administrator ツールの URL が最新の URL にリダイレクトされず、一部のメニューオプションが表示されないことがあります。

ノード設定の変更の完了

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行したという理由で、ドメインのアップグレード中にノード設定の変更を選択した場合は、アプリケーションサービスをアップグレードする前に追加のタスクを実行する必要があります。

注: ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行したという理由で、ドメインのアップグレード時にノード設定の変更を選択した場合、追加のタスクを実行する必要はありません。

次の追加タスクを実行する必要があります。

1. 環境変数を設定します。
2. 動的ポート番号の範囲の確認
3. ノードバックアップディレクトリの場所を確認します。
4. PowerExchange アダプタを設定します。

環境変数の設定

Informatica は、アプリケーションサービスを実行してクライアントに接続する場合に、環境変数を使用して設定情報を格納します。Informatica の要件を満たすように環境変数を設定します。環境変数の設定が正しくない場合、Informatica ドメインまたはノードの開始に失敗したり、Informatica クライアントとドメインとの接続に問題が発生したりする可能性があります。

UNIX に環境変数を設定するには、Informatica のインストールに使用したシステムユーザー アカウントでログインします。

UNIX 上のライブラリパス環境変数の設定

データ統合サービス、PowerCenter 統合サービス、PowerCenter リポジトリサービスプロセスが実行されるマシンに、ライブラリパスの環境変数を設定します。変数名と要件は、プラットフォームとデータベースによって異なります。

Linux

LD_LIBRARY_PATH 環境変数を設定します。

以下の表に、各種データベースの LD_LIBRARY_PATH に対して設定する値を示します。

データベース	値
Oracle	<DatabasePath>/lib
IBM DB2	<DatabasePath>/lib
Sybase ASE	`\${SYBASE_OCS}/lib:\${SYBASE_ASE}/lib:\${LD_LIBRARY_PATH}`
Informix	<DatabasePath>/lib
Teradata	<DatabasePath>/lib
ODBC	<CLOSEDODBCHOME>/lib

AIX

次の Java ベースのコンポーネントとデータベースに対して、LIBPATH 環境変数を設定します。

Java コンポーネント変数

PowerCenter 統合サービスを使用するには、Java Runtime Environment ライブラリによって次の Java ベースのコンポーネントを処理する必要があります。

- Java を使用するカスタムトランスマッパー
- Java トランスマッパー
- Java を使用する PowerExchange アダプタ:PowerExchange for JMS、PowerExchange for Web Services、および PowerExchange for webMethods。

PowerCenter 統合サービスプロセスが実行されるマシンのインストール済み Java ディレクトリを参照するように、ライブラリパス環境変数を設定します。LIBPATH 環境変数を次の値で設定します。

- JAVA_HOME/java/jre/bin
- JAVA_HOME/java/jre/bin/classic
- JAVA_HOME/usr/lib:/lib

データベース

次の表に、各種データベースの LIBPATH 環境変数に対して設定する値を示します。

データベース	値
Oracle	<DatabasePath>/lib
IBM DB2	<DatabasePath>/lib
Sybase ASE	"\${SYBASE_OCS}/lib:\${SYBASE_ASE}/lib:\${LIBPATH}"
Informix	<DatabasePath>/lib
Teradata	<DatabasePath>/lib
ODBC	<CLOSEDODBCHOME>/lib

動的ポート番号の範囲の確認

移行されたノードをアップグレードする場合、アップグレードウィザードは、ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるデフォルトの範囲のポート番号を割り当てます。

動的ポート番号のデフォルトの範囲は、6013～6113 です。Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ポート番号のデフォルトの範囲が使用可能になっていることを確認します。このポート番号の範囲を使用できない場合は、Administrator ツールを使用して範囲を更新します。ノードの [プロパティ] ビューの [詳細プロパティ] セクションで、サービスプロセスの動的ポート番号の最小値と最大値を設定します。

ノードバックアップディレクトリの確認

Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ノードのバックアップディレクトリにアクセスできることを確認します。Administrator ツールで、ノードの [プロパティ] ビューの [詳細プロパティ] セクションの [バックアップディレクトリ] プロパティを表示します。

PowerExchange アダプタの設定

以前のインストールに PowerExchange アダプタが含まれていた場合は、新しいバージョンの Informatica を実行するマシンで PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。

第 8 章

アプリケーションサービスのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [アプリケーションサービスのアップグレードの概要, 82 ページ](#)
- [サービスアップグレードウィザードの実行, 84 ページ](#)
- [モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認, 84 ページ](#)

アプリケーションサービスのアップグレードの概要

アプリケーションサービスのアップグレードプロセスは、アップグレード前の Informatica サービスのバージョンによって決まります。

Informatica サービスのバージョンによっては、アプリケーションサービスのアップグレードが必要です。アプリケーションサービスをアップグレードする場合、依存サービスもアップグレードする必要があります。アプリケーションサービスのアップグレード時には、アップグレードプロセスによって、そのサービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

[サービスアップグレード] ウィザード、各サービスの [アクション] メニュー、またはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードは、適切な順序で複数のサービスをアップグレードし、依存関係をチェックします。各サービスの [アクション] メニューまたはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードする場合は、適切な順序でアプリケーションサービスをアップグレードし、依存サービスをアップグレードしたことを確認する必要があります。

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、サービスによって異なります。

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後は、ログをチェックしてアップグレードが正常に完了したことを見つめます。

サービスをアップグレードする特権

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、アプリケーションサービスによって異なります。

サービスアップグレードウィザードにアクセスするには、ドメインに対する管理者ロールが必要です。

以下のアプリケーションサービスをアップグレードするには、ユーザーにこれらのロール、特権、および権限が必要です。

モデルリポジトリサービス

サービスのアップグレードウィザードを使用してモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに以下の資格情報が必要です。

- ドメインの管理者ロール。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

[アクション] メニューまたはコマンドラインからモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに次の資格情報が必要です。

- ドメインに対するサービスの管理特権、およびモデルリポジトリサービスでの権限。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

データ統合サービス

データ統合サービスをアップグレードするには、ユーザーにデータ統合サービスでの管理者ロールが必要です。

コンテンツ管理サービス

コンテンツ管理サービスをアップグレードするには、ユーザーにコンテンツ管理サービスでの管理者ロールが必要です。

PowerCenter リポジトリサービス

PowerCenter リポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および PowerCenter リポジトリサービスでの権限が必要です。

Metadata Manager サービス

Metadata Manager サービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および Metadata Manager サービスでの権限が必要です。

以前のバージョンからのサービスアップグレード

以前のバージョンからアップグレードする場合、一部のアプリケーションサービスでアップグレードが必要です。前のバージョンで使用したアプリケーションサービスをアップグレードします。

アップグレード前に、Metadata Manager サービスが無効になっていることを確認します。他のアプリケーションサービスがすべて有効になっていることを確認します。

アプリケーションサービスをアップグレードするには、次のサービスと関連データベースをこの順にアップグレードします。

- モデルリポジトリサービス
- データ統合サービス
- データ統合サービスのプロファイリングウェアハウス
- Metadata Manager サービス
- PowerCenter リポジトリサービス

注: 他のアプリケーションサービスをすべてアップグレードする場合は、アップグレードプロセスによって、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

サービスアップグレードウィザードの実行

アプリケーションサービスと、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツのアップグレードには、サービスアップグレードウィザードを使用します。サービスアップグレードウィザードには、アップグレードが必要なサービスと関連するデータベースとともにアップグレード済みのサービスのリストが表示されます。現在または前のアップグレードレポートを保存することもできます。

注: アップグレードの前に Metadata Manager サービスが無効になっている必要があります。その他のすべてのサービスは、アップグレードの前に有効になっている必要があります。

1. Informatica Administrator のヘッダ領域で、[管理] > [アップグレード] をクリックします。
2. アップグレードするアプリケーションサービスと関連データベースを選択します。
3. 必要に応じて、[アップグレード後、サービスが自動的に再起動します] を指定します。
アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択した場合は、アップグレードウィザードによってサービスがアップグレード後に再起動されます。
4. [次へ] をクリックします。
5. 依存関係エラーが存在する場合は、[依存関係エラー] ダイアログボックスが表示されます。依存関係エラーを確認し、[OK] をクリックします。次に、依存関係エラーを解決して [次へ] をクリックします。
6. リポジトリログイン情報を入力します。
7. [次へ] をクリックします。
サービスアップグレードウィザードによって各アプリケーションサービスと関連データベースがアップグレードされ、ステータスと処理の詳細が表示されます。
8. アップグレードが完了すると、[サマリ] セクションにアプリケーションサービスとアップグレードステータスのリストが表示されます。各サービスをクリックすると、[サービスの詳細] セクションにアップグレードの詳細が表示されます。
9. 必要に応じて、[レポートの保存] をクリックして、アップグレードの詳細をファイルに保存します。
レポートを保存しないことにした場合は、次回サービスアップグレードウィザードを起動したときに [前のレポートの保存] をクリックできます。
10. [閉じる] をクリックします。
11. アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択しなかった場合は、アップグレードしたサービスを再起動します。
アップグレードレポートを表示し、保存できます。2回目にサービスアップグレードウィザードを実行する場合、[前のレポートの保存] オプションが表示されます。サービスをアップグレードした後にアップグレードレポートを保存しなかった場合は、このオプションを選択して、前回のアップグレードレポートを表示または保存できます。

モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認

モデルリポジトリサービスをアップグレード後は、モデルリポジトリサービスログをチェックしてアップグレードが正常に完了したことを確認します。

オブジェクト依存関係のグラフ

モデルリポジトリサービスをアップグレードする場合、アップグレードプロセスはモデルリポジトリのコンテンツをアップグレードし、オブジェクトの依存関係のグラフを再作成します。

アップグレードプロセスでモデルリポジトリのコンテンツのアップグレード中に致命的なエラーが発生した場合、サービスのアップグレードは失敗します。Administrator ツールまたはコマンドラインプログラムによって、アップグレードをもう一度実行する必要があることが知らされます。

オブジェクト依存関係のグラフの再構築中にアップグレードプロセスで致命的なエラーが発生する場合、サービスのアップグレードは成功します。オブジェクト依存関係のグラフを再構築するまでは、Developer ツールでオブジェクトの依存関係を表示することはできません。

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後、モデルリポジトリサービスログに次のメッセージが含まれることを確認します。

MRS_50431 "Finished rebuilding the object dependency graph for project group '<project group>'."

ログにこのメッセージが存在しない場合は、infacmd mrs rebuildDependencyGraph コマンドを実行してオブジェクト依存関係のグラフを再構築します。この再構築プロセスが完了するまで、モデルリポジトリオブジェクトにユーザーアクセスがあってはなりません。完了前にユーザーがアクセスすると、オブジェクト依存関係のグラフが正確でなくなることがあります。サービスのアップグレードを行う前にモデルリポジトリサービスからログアウトするようユーザーに要請します。

infacmd mrs rebuildDependencyGraph コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
rebuildDependencyGraph
<-DomainName|-dn> domain_name
[<-SecurityDomain|-sdn> security_domain]
<-UserName|-un> user_name
<-Password|-pd> password
<-ServiceName|-sn> service_name
[<-ResilienceTimeout|-re> timeout_period_in_seconds]
```

最大ヒープサイズ

モデルリポジトリのアップグレード後に、最大ヒープサイズを推奨設定値の 1 GB にリセットします。

アップグレードプロセスにより、モデルリポジトリサービスの最大ヒープサイズが 4 GB に設定されます。アップグレードが完了したら、最大ヒープサイズのプロパティを、アップグレード前に設定されていた値か、ご使用の環境に合わせてグローバルカスタマサポートから推奨された設定にリセットします。

最大ヒープサイズをリセットするには、【ドメインナビゲータ】でサービスを選択し、【プロパティ】ビューをクリックして 【詳細プロパティ】 を展開します。【最大ヒープサイズ】 プロパティをアップグレード前の値に設定します。【permGen】 プロパティを最小の 512 MB に設定します。

第 9 章

Informatica クライアントのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica クライアントのアップグレードの概要, 86 ページ](#)
- [Informatica クライアントのアップグレードオプション, 87 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 87 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 88 ページ](#)

Informatica クライアントのアップグレードの概要

クライアントインストーラを使用して Informatica クライアントツールの以前のバージョンをアップグレードします。 Informatica クライアントツールは、指定したインストールディレクトリにインストールされます。 クライアントインストーラは新しくインストールしたクライアントツールを、以前のバージョンと同じ設定で設定します。 クライアントインストーラは、クライアントツールの以前のバージョンのファイルを変更しません。

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。 アップグレードする Informatica クライアントツールの以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。

Informatica クライアントは、グラフィカルモードまたはサイレントモードでアップグレードできます。

クライアントインストーラを実行するときに、次の中からアップグレードする次の Informatica クライアントツールを選択できます。

Informatica Developer

Informatica Developer は、マッピング、データオブジェクト、および仮想データベースの作成と実行に使用するクライアントアプリケーションです。 Informatica Developer で作成されたオブジェクトは、モデルリポジトリに保存され、データ統合サービスで実行されます。 Informatica Developer をアップグレードする場合は、HotFix バージョンを含む Informatica バージョンが、ドメインのアップグレードのバージョンと一致することを確認してください。

PowerCenter Client ツール

PowerCenter Client は、PowerCenter リポジトリ、マッピング、およびセッションの管理に使用できるツールのセットです。 クライアントのアップグレードによって、以下のクライアントツールもアップグレードされます。

- Custom Metadata Configurator

- Mapping Architect for Visio
- Mapping Analyst for Excel

デフォルトでは、Informatica クライアントツールをアップグレードすると、以下のコンポーネントもアップグレードされます。

- DataDirect ODBC ドライバ
- Java Runtime Environment ライブラリ

DVD から、またはインストールファイルのダウンロード元であるディレクトリのルートからアップグレードを実行できます。

Windows では、zip ファイル名を含むインストールディレクトリパスの全体の長さが 60 文字以下でなければなりません。zip ユーティリティのバージョンが、Windows オペレーティングシステムのバージョンと互換性があることを確認します。ファイルを解凍する場合は、zip ユーティリティが空のフォルダも抽出することを確認します。

Informatica クライアントのアップグレードオプション

以下のいずれかの方法で Informatica クライアントツールをアップグレードできます。

- グラフィカルモードでのアップグレード。Informatica クライアントツールをグラフィカルモードでアップグレードします。インストーラを使用してアップグレードプロセスを実行できます。
- サイレントモードでのアップグレード。アップグレードオプションを含むプロパティファイルを使用して Informatica クライアントツールをアップグレードします。

グラフィカルモードでのアップグレード

ルートディレクトリから install.bat ファイル実行時に問題を検出した場合は、以下のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>\client\install.exe

1. すべてのアプリケーションを終了します。
2. ルートディレクトリから install.bat を実行します。
3. [インストールタイプ] ページで、[Informatica 10.0 クライアントへのアップグレード] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. インストールを続行する前に、[アップグレード前提条件] ページでシステム要件を確認し、[次へ] をクリックします。
5. [クライアントツールの選択] ページで、アップグレードする Informatica クライアントを選択します。
以下の Informatica クライアントアプリケーションをアップグレードできます。
 - Informatica Developer
 - PowerCenter Client
6. [次へ] をクリックします。

7. [ディレクトリの選択] ページで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリと、Informatica 10.0 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要のあるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica クライアントのディレクトリ	アップグレードする Informatica クライアントツールの以前のバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.0 のクライアントツールのディレクトリ	Informatica 10.0 のクライアントツールのインストール先にするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。インストールディレクトリは、現在のマシンに存在している必要があります。パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @ * \$#!%(){}[],;' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。áや€などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じことがあります。

8. [次へ] をクリックします。
9. [インストール前のサマリ] ページで、インストール情報を確認し、[インストール] をクリックします。インストーラによって、Informatica クライアントファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
10. [インストール後のサマリ] ページで、アップグレードが成功したかどうかを確認し、[完了] をクリックしてインストーラを終了します。
11. Informatica Developer のアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。
インストーラログファイルを参照すると、インストーラで実行されるアップグレードタスクの詳細を取得できます。

サイレントモードでのアップグレード

ユーザーの操作なしで Informatica クライアントツールをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica クライアントツールをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica クライアントをホストするマシン上のハードディスクにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。

プロパティファイルの作成

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのプロパティファイルの名前は SilentInput.properties で、クライアントインストーラディレクトリのルートにあります。

1. クライアントのインストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput.properties という名前のファイルを探します。
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。

以下の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	Informatica クライアントツールをインストールするか、アップグレードするかを指定します。 以前のバージョンの Informatica からアップグレードするには、値を 1 に設定します。
USER_INSTALL_DIR	新しいバージョンの Informatica クライアントツールをインストールするディレクトリです。
UPG_BACKUP_DIR	アップグレードする Informatica ツールの以前のバージョンのディレクトリです。
DXT_COMP	Informatica Developer をインストールするかどうかを指定します。 値が 1 の場合は、Developer ツールがインストールされます。値が 0 の場合、Developer ツールはインストールされません。 デフォルトは 1 です。
CLIENT_COMP	PowerCenter クライアントをインストールするかどうかを指定します。 値が 1 の場合、PowerCenter クライアントがインストールされます。値が 0 の場合、PowerCenter クライアントはインストールされません。 デフォルトは 1 です。

4. プロパティファイルを保存します。

サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. クライアントインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む SilentInput.properties ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントアップグレードプロセスを開始するには、silentInstall.bat を実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。Informatica_<Version>_Services_InstallLog.log がインストールディレクトリに作成されるごとに、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、インストールログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。

5. Informatica Developer のアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。

第 10 章

アップグレードした後に

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica ドメイン, 91 ページ](#)
- [ドメインへのクライアントの接続の保護, 93 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード, 93 ページ](#)
- [ODBC データソースの更新, 94 ページ](#)
- [PowerCenter 統合サービス, 94 ページ](#)
- [コンテンツ管理サービス, 94 ページ](#)
- [Data Integration Service, 95 ページ](#)
- [電子メールサービス, 96 ページ](#)
- [アナリストサービス, 97 ページ](#)
- [Business Glossary Desktop, 98 ページ](#)
- [検索サービス, 99 ページ](#)
- [ビジネス用語集, 99 ページ](#)
- [Metadata Manager Agent, 103 ページ](#)
- [Metadata Manager サービス, 103 ページ](#)
- [Reporting and Dashboards Service, 109 ページ](#)
- [参照データ, 110 ページ](#)
- [プロファイル, 111 ページ](#)
- [SQL データサービス用の Informatica ドライバのアップグレード, 112 ページ](#)
- [ユーザー認証, 112 ページ](#)
- [Data Transformation ファイルのコピー, 113 ページ](#)
- [リリースガイドの確認, 113 ページ](#)

Informatica ドメイン

アップグレードしたら、ドメインのアップグレード後のタスクを実行します。

ログイベントディレクトリの更新

アップグレード後に、ドメインのログイベントディレクトリを更新しなければならない場合があります。

アップグレード後のログイベントディレクトリのデフォルト値は、次のアップグレードタイプによって異なります。

ノード設定を変更しないでドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは、以前のバージョンで指定された場所を指します。

ノード設定を変更してドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは新しいインストールディレクトリ内の `isp/logs` ディレクトリを指します。

別のディレクトリをログに使用するには、Administrator ツールでドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。 `infasetup updateGatewaynode` コマンドを使用してディレクトリを更新することもできます。 例えば、ログイベントディレクトリを新しいインストールディレクトリの `server/infa_shared/logs` ディレクトリに設定できます。

ODBC データソースの更新

Informatica のインストールには、DataDirect 7.1 ODBC ドライバが含まれています。Informatica 9.5.1 からアップグレードする場合、新しいドライバを使用するには、各 ODBC データソースを再作成します。

セキュアデータベースの設定

アップグレードすると、SSL プロトコルで保護されているデータベースでドメイン環境設定リポジトリを必要に応じて設定できるようになります。 コマンドラインからセキュアなドメイン環境設定リポジトリデータベースを設定します。

SSL プロトコルはトラストストアファイルに保存された SSL 証明書を使用します。セキュアデータベースへのアクセスには、データベースの証明書を含んだトラストストアが必要です。セキュアなドメイン環境設定リポジトリのデータベースが使用できるのは、ドメインに対し安全な通信を有効にした場合のみです。

セキュアなドメイン環境設定リポジトリデータベースの設定についての詳細は、『*Informatica セキュリティガイド*』を参照してください。

SMTP 設定プロパティの確認

以前のバージョンで、スコアカード通知を送信するようにデータ統合サービスの電子メールサーバーを設定していた場合は、アップグレード後に、ドメインの SMTP が正しく設定されていることを確認します。データ統合サービス用に設定されていた電子メールサーバーを使用するには、アップグレード前にデータ統合サービス用に記録しておいた値を使用します。

バージョン 10.0 では、データ統合サービス用の電子メールサーバーのプロパティは削除されています。スコアカード通知では、ドメイン用に設定された電子メールサーバーが使用されます。以前のバージョンでドメインの SMTP を設定しなかった場合、アップグレード後のドメインは、アップグレード中に最初に検出されたデータ統合サービス用に設定された電子メールサーバーを使用します。以前のバージョンでドメインの SMTP を設定していた場合は、アップグレード後のドメインでも引き続きその電子メールサーバーが使用されます。

ドメインへのクライアントの接続の保護

以前のバージョンで、クライアントアプリケーションと Informatica ドメイン間で安全な通信を有効にした場合は、アップグレード後にキーストアファイルの場所を確認します。

クライアントアプリケーションとサービス間で安全な接続を設定する場合は、セキュアな HTTPS 接続用のキーおよび証明書を含むキーストアファイルを指定します。アップグレード後に、キーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこれらの場所が更新されません。

注: 512 ビット未満の RSA 暗号化を使用してプライベートキーと SSL 証明書を作成した場合は、新しい SSL 証明書ファイルを作成する必要があります。FREAK 脆弱性により、512 ビット未満の RSA 暗号化はサポートされていません。

実行する必要があるタスクは、キーストアファイルを以前に保存した以下の場所に応じて異なります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。
2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、アプリケーションサービスを更新します。

Administrator ツールを使用して、適切なアプリケーションサービスのキーストアファイルの場所を更新します。例えば、Analyst ツールのセキュリティにキーストアファイルが使用されている場合は、アナリストサービスのプロパティでキーストアファイルの場所を更新します。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場所にキーストアファイルを保存した場合は、アプリケーションサービスが実行されるマシンからそのキーストアファイルにアクセスできることを確認します。

Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード

アップグレード後に、Microsoft SQL Server 接続は、デフォルトで OLEDB プロバイダタイプに設定されます。

すべての Microsoft SQL Server 接続を ODBC プロバイダタイプを使用するようにアップグレードすることをお勧めします。次のコマンドを使用すると、すべての Microsoft SQL Server 接続を ODBC プロバイダタイプにアップグレードできます。

- PowerCenter を使用している場合は、pmrep upgradeSqlServerConnection コマンドを実行します。
- Informatica プラットフォームを使用している場合は、infacmd.sh isp upgradeSQLSConnection コマンドを実行します。

アップグレードコマンドの実行後、Developer tool をホストする各マシンと、Informatica サービスをホストするマシン上で、環境変数を次の形式で設定する必要があります。

ODBCINST=<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini

環境変数を設定したら、Informatica サービスをホストするノードを再起動する必要があります。

ODBC データソースの更新

Informatica のインストールには、DataDirect 7.1 ODBC ドライバが含まれています。Informatica 9.5.1 からアップグレードする場合、新しいドライバを使用するには、各 ODBC データソースを再作成します。

PowerCenter 統合サービス

アップグレードしたら、PowerCenter 統合サービスのアップグレード後のタスクを実行します。

オペレーティングシステムのプロファイル用の Umask の設定

オペレーティングシステムプロファイルを使用したバージョンからアップグレードした場合は、umask 設定値を設定し、STM が書き込むファイルのセキュリティを変更してください。

たとえば、umask を 077 に変更するとセキュリティを最大化できます。Umask の設定を変更した場合は Informatica サービスを再起動してください。

コンテンツ管理サービス

アップグレード後、ドメインの各コンテンツ管理サービスにある参照データの設定オプションを確認します。

ID ポピュレーションファイルの場所の確認

ID ポピュレーションデータファイルをインストールする場合は、マッピングおよびセッションを実行する Informatica サービスでファイルを検索できることを確認します。

Data Quality の ID ポピュレーションファイル

データ統合サービスはコンテンツ管理サービスの **[ID プロパティ]** オプションからポピュレーションファイルのパスを読み取ります。アップグレードプロセスでは、ID プロパティのパスは保持されます。

PowerCenter の ID ポピュレーションファイル

PowerCenter 統合サービスでは、ポピュレーションファイルへのパスを IDQTx.cfg 設定ファイルまたは SSAPR 環境変数から読み取ります。

アップグレード中に、PowerCenter インストーラは空の IDQTx.cfg ファイルを以下のディレクトリに書き込みます。

<Informatica インストールディレクトリ>/server/bin

インストーラが server/bin ディレクトリで IDQTx.cfg ファイルを見つけた場合、そのファイルは以下の名前に変更されます。

IDQTx.cfg.bak

アップグレード操作でインストールされる IDQTx.cfg では、ID ポピュレーションのデータファイルの場所は指定されません。IDQTx.cfg.bak ファイルから場所をコピーできます。IDQTx.cfg にポピュレーションファイルの場所が設定されていないと、PowerCenter 統合サービスは、SSAPR 環境変数内でその場所を探します。

サービスの再起動

コンテンツ管理サービスは、他のサービスと対話して参照データを管理します。

アップグレード後、コンテンツ管理サービスを再起動します。サービスは手動で再起動できますが、サービスアップグレードウィザードを実行しているときには自動で再起動できます。コンテンツ管理サービスのプロパティを更新する場合には、更新したプロパティを使用するサービスを再起動します。

以下のプロパティを更新したときにはアナリストサービスを再起動します。

- 参照データウェアハウス名

以下の参照データタイプのプロパティを更新したときはデータ統合サービスを再起動します。

- アドレス参照データ
- ID ポピュレーションデータ
- 分類子モデルデータ
- 確率モデルデータ

Data Integration Service

アップグレードしたら、Data Integration Service ごとにアップグレード後のタスクを実行します。

HTTP プロキシサーバーパスワードのリセット

Data Integration Service が Web サービスコンシューマトランスマッショニングを実行し、かつ認証付きの HTTP プロキシサーバーを使用するように設定されている場合は、HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

パスワードをリセットしないと、Data Integration Service で Web サービスコンシューマトランスマッショニングを正常に処理できません。

Administrator ツールで、Data Integration Service 用の HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

ワークフローオプションの確認

データ統合サービスでワークフローを実行する場合は、Workflow Orchestration サービスマジュールがアクティブになっていることを確認し、ワークフローデータベースを特定します。

Workflow Orchestration サービスマジュールは、ワークフローを実行します。ワークフローデータベースには、ランタイムのワークフローメタデータが保存されます。Workflow Orchestration サービスマジュールとワークフローデータベース接続は、データ統合サービスのプロパティです。

ワークフローデータベースを特定したら、ワークフローデータベースのコンテンツを作成します。コンテンツを作成するには、Administrator ツールで、データ統合サービスの [アクション] メニューオプションを使用します。ワークフローデータベースのコンテンツを作成する前に、サービスを再起動します。

実行オプションの確認

データ統合サービスを複数ノードで実行し、各サービスプロセスで異なる実行オプションを設定した場合は、[プロパティ] ビューの [実行オプション] で正しい値が使用されていることを確認します。アップグレードを実施する前に記録しておいた、データ統合サービスの各プロセスの値を使用します。

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの [プロセス] ビューの実行オプションは、[プロパティ] ビューに移動されています。データ統合サービスの実行オプションを設定します。データ統合サービスの各プロセスは、それぞれのオプションに同じ値を使用します。

値は次の状況に基づいて決定されます。

- オプションで最大の整数値が定義されている場合は、すべてのプロセスに定義されている値のうち最も大きい値が、[プロパティ] ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。
- オプションで文字列値が定義されている場合は、アップグレード中に最初に検出されたノードに定義されている値が、[プロパティ] ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。

要求ごとの最大メモリの確認

以前のバージョンのデータ統合サービスプロセス用に [最大セッションサイズ] プロパティのデフォルト値を変更していた場合は、サービスの [要求ごとの最大メモリ] プロパティで適切な値が使用されていることを確認します。

バージョン 10.0 では、データ統合サービスプロセスの [最大セッションサイズ] プロパティの名前が [要求ごとの最大メモリ] に変更されました。以下のデータ統合サービスモジュールに対して [要求ごとの最大メモリ] プロパティを設定します。

- マッピングサービスモジュール。デフォルトは 536,870,912 バイトです。
- プロファイリングサービスモジュール。デフォルトは 536,870,912 バイトです。
- SQL サービスモジュール。デフォルトは 50,000,000 バイトです。
- Web サービスモジュール。デフォルトは 50,000,000 バイトです。

アップグレードされたサービスでは、各モジュールにバージョン 10.0 のデフォルト値が使用されます。以前のバージョンで [最大セッションサイズ] のデフォルト値を変更していた場合は、アップグレード後に [要求ごとの最大メモリ] の値を変更する必要があります。アップグレードを実施する前に記録しておいた、データ統合サービスの各プロセスの値を使用します。

電子メールサービス

以前のバージョンで、ワークフロー通知を送信するためにデータ統合サービス用の電子メールサーバーを設定していた場合は、アップグレード後に電子メールサービスを設定して有効にします。ワークフロー通知には、データ統合サービスによって実行されるワークフローのヒューマンタスクおよび通知タスクから送られる電子メールが含まれます。

バージョン 10.0 では、データ統合サービス用の電子メールサーバーのプロパティは削除されています。ワークフロー通知は、電子メールサービス用に設定された電子メールサーバーを使用します。

ワークフロー通知を送信するには、電子メールサービス用の電子メールサーバーを設定してから、電子メールサービスを有効化します。以前のバージョンでデータ統合サービス用に設定されていた電子メールサーバーを使用するには、アップグレード前にデータ統合サービス用に記録しておいた値を使用します。

アナリストサービス

アップグレードしたら、アナリストサービスごとにアップグレード後のタスクを実行します。

フラットファイルキャッシュの場所の確認

アップグレード後に、フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内にフラットファイルキャッシュディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。

以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスとデータ統合サービスの両方がそのディレクトリにアクセスできることを確認します。

アナリストサービスとデータ統合サービスが異なるノードで実行されている場合は、共有ディレクトリを使用するようにフラットファイルディレクトリを設定します。データ統合サービスがプライマリノードおよびバックアップノード、またはグリッド上で実行される場合、データ統合サービスの各プロセスから共有ディレクトリ内のファイルにアクセスできる必要があります。

フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認するには、アナリストサービスのランタイムプロパティにある [フラットファイルキャッシュの場所] プロパティを表示します。

ヒューマンタスクプロパティの確認

ヒューマンタスクを含むワークフローの実行を想定している場合、ワークフローを実行するデータ統合サービスにアナリストサービスを関連付けます。データ統合サービスを識別するには、アナリストサービスのヒューマンタスクプロパティを使用します。アナリストサービスの URL にログインして、ヒューマンタスクが指定するレコードで作業することが可能です。

ヒューマンタスクプロパティを確認する場合には、次のルールとガイドラインを考慮してください。

- ワークフローを実行するように設定するデータ統合サービスを選択します。
- プロファイルを実行し、他のランタイム操作を実行するデータ統合サービスを識別するために、アナリストサービスはランタイムプロパティを使用します。ランタイムプロパティを設定しない場合は、アナリストサービスをモデルリポジトリサービスに関連付けないでください。
- データディレクタサービスを含むドメインをアップグレードする場合、アップグレードプロセスによってデータディレクタサービスがアナリストサービスに変換されます。アップグレードプロセスは、アナリストサービスのヒューマンタスクプロパティを更新するために、データディレクタサービスのデータ統合サービスプロパティを使用します。
- アナリストサービスとデータディレクタサービスを含むドメインのサービスをアップグレードする場合、アップグレード後にドメインには 2 つのアナリストサービスが含まれます。これらの 2 つのサービスを保持することも、プロパティを単一のアナリストサービスにマージすることもできます。

特権の割り当て

Informatica ドメインにアナリストサービスが存在する場合は、ユーザーにモデルリポジトリサービス特権を付与する必要があります。アナリストサービス特権は、ユーザーが Analyst ツールで実行する必要があるタスクに基づいて付与する必要があります。

ユーザーに、以下のモデルリポジトリサービス特権を付与します。

- Access Analyst

ユーザーに、以下のアナリストサービス特権を付与します。

- マッピング仕様にアクセス
- マッピング仕様の結果のロード
- ワークスペースアクセス
- グロッサリの管理
- 設計ワークスペース
- 検出ワークスペース
- 用語集のワークスペース
- スコアカードのワークスペース

アナリストサービスのリサイクル

アップグレード後に Analyst ツールにアクセスするには、アナリストサービスをリサイクルします。アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスおよびデータ統合サービスのアップグレード手順とアップグレード後の手順を完了します。アナリストサービスをリサイクルしたら、少なくも 10 分間待機し、その後で **【用語集】** ワークスペースにアクセスします。

アナリストサービスをリサイクルする前に、次のタスクが実行されていることを確認します。

- モデルリポジトリサービスのアップグレード
- データ統合サービスのアップグレード

注: アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスとデータ統合サービスが実行されている必要があります。

Business Glossary Desktop

アナリストサービスをホストするマシン上の用語集を参照するために、Business Glossary Desktop アプリケーションのポート番号およびホスト名を変更します。

Business Glossary Desktop ポート番号およびホスト名の変更

Business Glossary Desktop サーバーの設定を変更し、アナリストサービスをホストするマシンとの接続を確立します。

1. Business Glossary Desktop アプリケーションで、**【編集】** > **【設定】** をクリックします。
[Informatica Business Glossary 設定] ウィンドウが表示されます。
2. **【サーバー】** タブをクリックします。
3. **【ポート】** フィールドで、アナリストサービスが実行されるマシンのポート番号を入力します。
4. **【ホスト】** フィールドで、アナリストサービスが実行されるマシンのホスト名を入力します。
5. 必要に応じて、**【ユーザー名】** および **【パスワード】** フィールドで Analyst ツールのユーザー名およびパスワードを更新します。
6. **【テスト】** をクリックし、ビジネス用語集への接続をテストします。

7. [OK] をクリックします。

検索サービス

アップグレード後に Analyst ツールおよび Business Glossary Desktop で検索を実行するには、Informatica ドメインで検索サービスを作成します。検索サービスを作成する前に、モデルリポジトリサービス、データ統合サービス、アナリストサービスのアップグレードおよびアップグレード後の手順を完了します。

検索サービスを作成して有効にする前に、次のタスクが実行されていることを確認します。

- モデルリポジトリサービスのアップグレード
- データ統合サービスのアップグレード
- アナリストサービスをリサイクルする。

注: モデルリポジトリサービス、データ統合サービス、およびアナリストサービスは、検索サービスを有効にする前に実行する必要があります。

ビジネス用語集

Metadata Manager からビジネス用語集をエクスポートした場合、アップグレード後にその用語集を Analyst ツールにインポートします。用語集をインポートする前に、アナリストサービス、モデルリポジトリサービス、およびデータ統合サービスを有効化します。

さらに、製品ライセンスに Business Glossary オプションが含まれていることを確認します。ライセンスに Business Glossary オプションが含まれていない場合は、Analyst ツールに **[用語集]** ワークスペースが表示されません。

ビジネス用語集をインポートして Metadata Manager サービスのアップグレード後のタスクを完了したら、Metadata Manager でビジネス用語集リソースを作成できます。

ビジネス用語集を Analyst ツールにインポートするには、以下のタスクを完了します。

1. Metadata Manager でビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合は、Metadata Manager のモデルエクスポートファイルをインポートします。
Analyst ツールは、モデルエクスポートファイルを使用して、デフォルトではビジネス用語テンプレートに存在しない属性のプロパティを作成します。
注: Metadata Manager でビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されていない場合、この手順は省略してもかまいません。
2. Metadata Manager でビジネス用語とカテゴリが複数の用語集間でリンクされている場合は、エクスポートされた Microsoft Excel ビジネス用語集ファイルを 1 つのファイルにマージし、重複するビジネス用語を削除します。
エクスポートした用語集のカテゴリにビジネス用語がリンクされている場合、Metadata Manager によって他の用語集のビジネス用語がエクスポートされます。Microsoft Excel ファイルをマージした後にファイルを Analyst ツールにインポートする前に、重複するビジネス用語を削除する必要があります。
注: 複数の用語集間でリンクされているビジネス用語とカテゴリがない場合、この手順は省略してもかまいません。
3. Business Glossary ファイルをインポートします。

各 Microsoft Excel ビジネス用語集ファイルを Analyst ツールにインポートします。Microsoft Excel ビジネス用語集ファイルを 1 つのファイルにマージしている場合は、マージしたファイルをインポートします。この手順によって、用語集が Analyst ツールにインポートされます。

4. カテゴリおよび非公開の用語を公開します。

Analyst ツールでは、すべてのカテゴリのフェーズがドラフトに設定されます。Metadata Manager でビジネス用語集リソースを作成するときにカテゴリが表示されるようにするために、カテゴリを公開します。公開されていない用語は、Metadata Manager にはロードされません。そのため、Metadata Manager で表示するすべての非公開の用語を公開する必要があります。

手順 1。Metadata Manager のモデルエクスポートファイルのインポート

ドメインをアップグレードする前に Metadata Manager からビジネス用語集モデルをエクスポートした場合は、モデルエクスポートファイルを Analyst ツールにインポートします。Analyst ツールは、モデルエクスポートファイルを使用して、デフォルトではビジネス用語テンプレートに存在しない属性のプロパティを作成します。

注: Metadata Manager でビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されていない場合、この手順は省略してもかまいません。

モデルエクスポート XML ファイルをインポートするには用語集インポートウィザードを使用します。インポートウィザードは Microsoft Excel ファイルのインポート方法を説明しますが、これをモデルエクスポート XML ファイルのインポートに使用できます。

1. Analyst ツールで、【開く】をクリックして 【ライブラリ】 ワークスペースを開きます。
2. ライブラリナビゲータで、【用語集】 セクションをクリックします。
3. 任意の用語集を右クリックし、【インポート】 をクリックします。

インポートウィザードが表示されます。

4. 【参照】 をクリックしてビジネス用語集のモデルエクスポート XML ファイルを選択します。

注: インポートウィザードは Microsoft Excel (.xlsx) ファイルのインポートを要求しますが、XML ファイルを選択してインポートすることができます。

5. 【次へ】 をクリックしてファイルをインポートします。
6. 【インポート】 をクリックします。

Analyst ツールは、【用語集】 ワークスペースの 【ビジネス用語テンプレート】 パネルに属性を追加します。

手順 2。Business Glossary ファイルのマージ

複数の用語集間でビジネス用語とカテゴリをリンクしている場合は、Microsoft Excel ビジネス用語集ファイルを 1 つのファイルにマージして用語集間のリンクを保持します。ファイルをマージしたら、重複するビジネス用語を削除します。

注: Metadata Manager の複数の用語集間でリンクされているビジネス用語とカテゴリがない場合、この手順は省略してもかまいません。

エクスポートする用語集に他の用語集のビジネス用語にリンクされているカテゴリが含まれる場合は、Metadata Manager によって用語集エクスポートファイルにリンクされたビジネス用語が挿入されます。用語集エクスポートファイルをマージすると、マージされた Microsoft Excel ファイルには重複するビジネス用語が含まれます。Analyst ツールでリンクを保持するには、マージされた Microsoft Excel ファイルをインポートする前に重複するビジネス用語を削除する必要があります。重複する用語を削除しない場合は、インポート中に重複する用語がスキップされます。

Microsoft Excel を使用して、エクスポートしたビジネス用語集ファイルをマージします。ファイルをマージするには、1つのビジネス用語集ファイルを開き、他の用語集ファイルの情報を一番下の新しい行に追加します。ビジネス用語集をマージしたら、ビジネス用語シートから重複する用語を削除します。マージしたファイルを Analyst ツールにインポートします。

手順 3。Business Glossary ファイルのインポート

用語集を作成して用語テンプレートを更新したら、それぞれのビジネス用語集ファイルを Analyst ツールにインポートします。

注: すべてのビジネス用語集を 1 つのファイルにマージした場合は、マージしたファイルのみをインポートします。

1. Analyst ツールで **【開く】** をクリックして **【ライブラリ】** ワークスペースを開きます。
2. ライブラリナビゲータで、**【用語集】** をクリックします。
3. 用語集を右クリックし、**【インポート】** をクリックします。
【インポート】 ウィザードが表示されます。
4. **【参照】** をクリックして用語集を含んでいる Microsoft Excel ファイルを選択します。
5. **【次へ】** をクリックしてファイルをインポートします。
Analyst ツールに Microsoft Excel ファイル内のデータの概要が示されます。
6. **【インポート】** をクリックします。

手順 4。カテゴリおよび非公開の用語の公開

Analyst ツールではビジネス用語集のカテゴリ内にフェーズが含まれていますが、Metadata Manager では含まれていません。Analyst ツールにビジネス用語集ファイルをインポートすると、インポートプロセスによってすべてのカテゴリのフェーズがドラフトに設定されます。カテゴリを公開して、Metadata Manager ビジネス用語集リソースに表示されるようにします。

Metadata Manager でビジネス用語集リソースを作成して、そのリソースを読み込むと、Metadata Manager サービスは公開されたビジネス用語およびカテゴリをインポートします。ドラフトの用語またはカテゴリはインポートしません。したがって、カテゴリを含むビジネス用語集を Metadata Manager にインポートする場合は、Analyst ツールでカテゴリを公開してから、Metadata Manager でビジネス用語集リソースを作成する必要があります。Metadata Manager で表示するすべての非公開のビジネス用語を公開する必要があります。

カテゴリと用語を公開するために使用できる方法は、公開するカテゴリと用語の数によって異なります。各カテゴリまたは用語は個別に公開できます。ビジネスイニシアティブを作成して非公開のカテゴリと用語をビジネスイニシアティブに追加してから、ビジネスイニシアティブを公開することで、複数のカテゴリと用語を同時に公開することもできます。ビジネスイニシアティブを使用すると、監査証跡で各用語とカテゴリへの変更履歴がキャプチャされます。

単一のカテゴリまたは用語の公開

公開するカテゴリまたはビジネス用語が複数ある場合は、各カテゴリまたは用語を個別に公開します。カテゴリまたは用語内にドラフトフェーズがある場合は、公開する前に確認用に提案することができます。

1. Analyst ツールで **【開く】** をクリックして **【ライブラリ】** ワークスペースを開きます。
2. ライブラリナビゲータで、**【アセット】** セクションをクリックします。
3. **【カテゴリ】** または **【ビジネス用語】** をクリックします。
4. 公開するカテゴリまたは用語をクリックします。
5. **【アクション】** メニューで **【確認用に提案】** をクリックします。

- 確認ダイアログボックスが表示されます。
6. [OK] をクリックします。
Analyst ツールはアセットのフェーズを [確認中] に変更します。
7. [アクション] メニューで [カテゴリの公開] または [用語の公開] をクリックします。
確認ダイアログボックスが表示されます。
8. [OK] をクリックします。
Analyst ツールは、アセットのフェーズを [公開済み] に変更します。

複数のカテゴリまたは用語の公開

公開するカテゴリまたは用語が複数ある場合は、カテゴリと用語を同時に公開できるように、ビジネスイニシアティブを作成します。ビジネスイニシアティブを使用すると、監査証跡で各用語とカテゴリへの変更履歴がキャプチャされます。

1. Analyst ツールで、[新規] メニューから [ビジネスイニシアティブ] を選択します。
[用語集の選択] ダイアログボックスが表示されます。
2. ビジネス用語集を選択して [OK] をクリックします。
[用語集] ワークスペースにビジネスイニシアティブが開きます。
3. ビジネスイニシアティブの名前を入力し、必要に応じて説明を入力します。
例えば、ビジネスイニシアティブの名前に「PublishAfterUpgrade」と入力し、説明に「9.5.x から 9.6.x へのアップグレード後に非公開のビジネス用語とカテゴリを公開する」などと入力します。
4. [アセットコレクション] セクションの [アクション] メニューで [追加] をクリックします。
[アセット] ダイアログボックスが表示されます。ダイアログボックスには、[ドラフト] フェーズまたは [確認中] フェーズのすべての用語集アセットが一覧表示されます。
5. 公開するすべてのカテゴリと用語を選択して [OK] をクリックします。
カテゴリと用語がアセットコレクションに追加されます。
6. [保存] > [保存して完了] をクリックします。
ビジネスイニシアティブは [用語集] ワークスペースに残ります。選択したカテゴリと用語は [ドラフト] フェーズになります。
7. [アクション] メニューで [確認用に提案] をクリックします。
確認用にビジネスイニシアティブを提案するように求められます。
8. [OK] をクリックしてビジネスイニシアティブを提案します。
ビジネスイニシアティブのすべてのカテゴリと用語のフェーズが [確認中] に変更されます。
9. [アクション] メニューで [イニシアティブの公開] をクリックします。
ビジネスイニシアティブのすべてのアセットが公開されることを警告するメッセージが表示されます。
10. [OK] をクリックしてビジネスイニシアティブを公開します。
ビジネスイニシアティブのすべてのカテゴリと用語のフェーズが [公開済み] に変更されます。

Metadata Manager Agent

アップグレード後、各 Metadata Manager Agent をアンインストールしてから再インストールして、Metadata Manager がメタデータソースからメタデータを抽出できるようにする必要があります。リソースを移行する前に、最新バージョンの Metadata Manager Agent をインストールします。

1. Metadata Manager Agent を停止します。
2. Metadata Manager Agent を再インストールします。

Metadata Manager Agent のインストールの詳細については、*Metadata Manager 管理者ガイド*を参照してください。

Metadata Manager サービス

Metadata Manager Agent を再インストールしたら、Metadata Manager サービスごとに次のアップグレード後のタスクを実行します。

1. Metadata Manager プロパティファイルにすべてのカスタマイズが含まれるように更新します。
2. Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスを UNIX 上で実行する場合は、ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。
3. Metadata Manager サービスを有効にします。
4. Metadata Manager リソースの移行およびリロードを行います。
5. Analyst ツールにインポートしたビジネス用語集に基づいてビジネス用語集リソースを作成します。
6. Metadata Manager ユーザーのロード特権および権限を確認します。

【ロード】タブでリソースを表示、ロード、または管理するためには、Metadata Manager サービスの適切な特権およびリソースに対する読み書き権限の両方が必要です。

Metadata Manager プロパティファイルの更新

以前のインストールディレクトリ内の imm.properties ファイルを 10.0 バージョンと比較します。必要に応じて、10.0 バージョンの imm.properties ファイルを更新します。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica installation directory>\services\shared\jars\pc\classes

変更は、Metadata Manager サービスを有効にすると反映されます。

UNIX での ODBCINST 環境変数の確認

Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスが UNIX 上で実行される場合は、PowerCenter 統合サービスを実行するマシンに ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。

PowerCenter 統合サービスは、IME ベースのファイルからメタデータを抽出してそのメタデータを Metadata Manager ウェアハウスにロードするワークフローを実行します。PowerCenter 統合サービスは、ODBC を使用して Microsoft SQL Server データベースに接続します。UNIX では、ODBCINST 環境変数が odbcinst.ini ファイルの場所に設定されている必要があります。このように設定されていないと、PowerCenter 統合サービスは ODBC ドライバにアクセスできません。

PowerCenter 統合サービスを実行するマシンで、ODBCINST 環境変数が次の値に設定されていることを確認します。

ODBCINST=<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini

環境変数が設定されていない場合は、設定してからドメインを再起動します。

Metadata Manager リソースの移行およびリロード

Metadata Manager の各バージョンでは、一部のモデルが変更されています。モデルにクラスの名前変更などの重要な変更点がある場合は、そのモデルをベースとするリソースを移行して、リロードする必要があります。モデルに新しいクラス属性などの小さな変更点がある場合は、そのモデルをベースとするリソースをリロードする必要があります。

モデルに重要な変更点がある場合、アップグレードプロセスはそのモデルをベースとするリソースに廃止済みとマークします。廃止されたリソースに対してスケジュールを作成、設定、編集、ロード、追加できません。リポジトリ内に廃止されたリソースがある場合は、現在のバージョンの Metadata Manager に移行する必要があります。廃止されたリソースタイプのリソース構成ファイルを現在のバージョンの Metadata Manager にアップロードする必要がある場合は、これらも移行する必要があります。リソースを移行したら、リロードする必要があります。

アップグレードする Metadata Manager のバージョンに基づいてさまざまなリソースタイプを移行、ページ、およびリロードします。

以下の表に、バージョン 9.5.1 または 9.5.1 HotFix 1 からアップグレードする場合に移行およびリロードする必要があるリソースタイプを示します。

メタデータソースタイプ	リソースタイプ
ビジネスインテリジェンス	Business Objects Cognos Microsoft Analysis Services およびレポートサービス Microstrategy Oracle Business Intelligence Enterprise Edition (OBIEE)
データモデリング	Embarcadero ERStudio ERwin Sybase PowerDesigner
データベース管理	JDBC

以下の表に、バージョン 9.5.1 HotFix 2、9.5.1 HotFix 3、または 9.5.1 HotFix 4 からアップグレードする場合に移行およびリロードする必要があるリソースタイプを示します。

メタデータソースタイプ	リソースタイプ
ビジネスインテリジェンス	Business Objects Cognos Microsoft Analysis Services およびレポートサービス Microstrategy Oracle Business Intelligence Enterprise Edition (OBIEE)
データモデリング	ERwin Sybase PowerDesigner

また、ビジネス用語集リソースおよびカスタムリソースを除く、他のすべてのリソースタイプをページおよびリロードする必要があります。カスタムリソースのリロードは、モデルまたはメタデータがリリース間で変更されている場合のみ必要になります。

移行ユーティリティ rmu および rcfmu を使用して、リソースおよびリソース構成ファイルを移行します。

移行ユーティリティ

rmu および rcfmu 移行ユーティリティは、廃止されたリソースおよび廃止されたリソース構成ファイルを現在のバージョンに移行するコマンドラインプログラムです。

以下のユーティリティを使用します。

rmu

新しい同等のリソースを作成して、廃止されたリソースを移行します。rmu を使用して以前のバージョンの Metadata Manager から現在のバージョンにリソースを移行することもできます。リポジトリの 1 つまたはすべてのリソースを移行できます。

rcfmu

以前のバージョンの Metadata Manager から現在のバージョンにリソース構成ファイルを移行します。リソース構成ファイルを移行したら、リポジトリにアップロードする必要があります。

リソースを移行してリロードした後に、新しいリソースを編集して、元のリソースに存在するショートカット、コメント、リンク、およびリレーションを再作成します。また、元のリソースが割り当てられていたスケジュールがある場合、このスケジュールも更新する必要があります。

rmu および rcfmu の構文とオプションの詳細については、*Metadata Manager 管理者ガイド*を参照してください。

9.5.1 HotFix 1 以前からの廃止されたリソースの移行

バージョン 9.5.1 または 9.5.1 HotFix 1 からのアップグレードでは、JDBC リソースを移行およびリロードして、他のデータベース管理リソースをページおよびリロードしてから、他のリソースを移行およびリロードします。ビジネスインテリジェンスおよびデータモデリングリソースの接続情報が失われることを防ぐため、次の順序でリソースを移行、ページ、リロードします。

リソースを移行する前に、最新バージョンの Metadata Manager Agent をインストールします。

1. 廃止された JDBC リソースごとに rmu 移行ユーティリティを実行します。
2. 新しい JDBC リソースをロードします。
3. その他すべてのデータベース管理リソースをページおよびリロードします。

4. 廃止された各ビジネスインテリジェンスとデータモデリングリソースに rmu 移行ユーティリティを実行します。
5. 新しいビジネスインテリジェンスおよびデータモデリングリソースをロードします。
6. SAP R/3、SAP Business Warehouse、Informatica Platform、PowerCenter リソースをページおよびリロードします。
7. 元のリソースのショートカット、コメント、リンク、リレーションを再作成するために新しいリソースを編集します。
8. 必要に応じ、廃止されたリソースを削除します。

注: rmu では、ビジネスオブジェクトのユニバース名をユニバース ID に変換することはできません。したがって、ビジネスオブジェクトリソースを移行した後、ユニバース ID を更新する必要があります。

9.5.1 HotFix 2 以降からの廃止されたリソースの移行

バージョン 9.5.1 HotFix 2、9.5.1 HotFix 3、または 9.5.1 HotFix 4 からのリソースの移行では、データベース管理リソースをページおよびリロードしてから他のリソースを移行、ページ、リロードします。ビジネスインテリジェンスおよびデータモデリングリソースの接続情報が失われることを防ぐため、次の順序でリソースを移行、ページ、リロードします。

- リソースを移行する前に、最新バージョンの Metadata Manager Agent をインストールします。
1. JDBC リソースを含む、すべてのデータベース管理リソースをページおよびリロードします。
 2. 廃止された各ビジネスインテリジェンスとデータモデリングリソースに rmu 移行ユーティリティを実行します。
 3. 新しいビジネスインテリジェンスおよびデータモデリングリソースをロードします。
 4. 各 SAP R/3、SAP Business Warehouse、Informatica Platform、PowerCenter、Embarcadero ERStudio リソースをページおよびリロードします。
 5. 元のリソースのショートカット、コメント、リンク、リレーションを再作成するために新しいリソースを編集します。
 6. 必要に応じ、廃止されたリソースを削除します。

リソース構成ファイルの移行

一度に 1 つのリソース構成ファイルを移行できます。リソース構成ファイルを移行した後、そのリソースを作成してロードできます。

リソース構成ファイルを移行する前に、最新バージョンの Metadata Manager Agent をインストールします。

1. リソース構成ファイルで rcfmu 移行ユーティリティを実行します。
2. 新しいリソース構成ファイルからリソースを作成します。
3. 必要に応じて接続情報を更新します。
4. 新しいリソースをロードします。
5. 新しいリソースを編集して、ショートカット、コメント、リンク、リレーションを作成します。

注: rcfmu では、ビジネスオブジェクトのユニバース名をユニバース ID に変換することはできません。したがって、ビジネスオブジェクトリソースを移行した後、ユニバース ID を更新する必要があります。

Business Glossary リソースの作成

アップグレードが完了したら、Metadata Manager でビジネス用語集リソースを作成します。Metadata Manager で表示する Analyst ツールの各ビジネス用語集に対して 1 つのリソースを作成します。

Metadata Manager にログインして Business Glossary リソースを作成する前に、Metadata Manager がアップグレードされた用語集のみを表示できるようにするために、ブラウザのキャッシュをクリアします。

各ビジネス用語集で次のタスクを完了します。

1. ビジネス用語集リソースを作成します。

Metadata Manager で表示する Analyst ツールの各ビジネス用語集に対して 1 つのビジネス用語集リソースを作成します。

2. 列挙されたリンクまたはルールベースのリンクを使用する各用語集で、列挙されたリンクおよびリンクルールのファイルをビジネス用語集リソースに関連付けます。

注: Metadata Manager のビジネス用語集でリンクルールファイルまたは列挙されたリンクのファイルが使用されていない場合、この手順は省略してもかまいません。

3. リソースをロードします。

リソースをロードして Analyst ツールからビジネス用語集メタデータを抽出し、Metadata Manager リポジトリにロードします。

手順 1。Business Glossary リソースの作成

Metadata Manager で、Metadata Manager に表示することが必要なそれぞれの Analyst ツールのビジネス用語集に対して、1 つのビジネス用語集リソースを作成します。

1. Metadata Manager で、[ロード] タブをクリックします。

2. [アクション] > [新しいリソース] をクリックします。

[リソース選択] ウィンドウが表示されます。

3. [Business Glossary] > [Business Glossary] をクリックします。

4. [次へ] をクリックします。

[プロパティ] ページが表示されます。

5. ビジネス用語集リソース名および説明（オプション）を入力します。

注: ビジネス用語集リソースの名前は Analyst ツールの用語集の名前と一致する必要があります。これらの名前が一致しない場合、ビジネス用語の関連用語は Metadata Manager ビジネス用語集に表示されません。

6. [次へ] をクリックします。

[設定] ページが表示されます。

7. 接続プロパティを入力します。

8. [テスト接続] をクリックして、Analyst ツールへの接続をテストします。

Metadata Manager が Analyst ツールに接続できない場合は、エラーメッセージが表示されます。エラーを修正し、もう一度接続をテストします。

9. [次へ] をクリックします。

[列挙されたリンク] ウィンドウが表示されます。

10. 必要に応じて、列挙されたリンクのファイルを追加またはアップロードします。

11. [次へ] をクリックします。

[スケジュール] ウィンドウが表示されます。

12. 必要に応じて、スケジュールを添付します。

13. 【完了】をクリックします。

手順 2。リンクルールの用語集への関連付け

列挙されたリンクまたはルールベースのリンクを使用する各用語集で、列挙されたリンクおよびリンクルールのファイルをビジネス用語集リソースに関連付けます。Metadata Manager は、これらのファイルを使用してビジネス用語を他のリソースのメタデータオブジェクトとリンクします。リソースをロードするときに Metadata Manager によってリンクが作成されます。

注: Metadata Manager のビジネス用語集でリンクルールファイルまたは列挙されたリンクのファイルが使用されていない場合、この手順は省略してもかまいません。

1. Metadata Manager で、【ロード】タブをクリックします。
2. [リソース] パネルで、ビジネス用語集リソースを選択します。
[プロパティ] パネルが表示されます。
3. [リソースの編集] ボタンをクリックします。
[リソースの編集] ウィンドウが表示されます。
4. 列挙されたリンクのファイルを追加またはアップロードするには、[列挙されたリンク] タブをクリックして追加またはアップロードするファイルを指定します。
 - Metadata Manager Web アプリケーションがアクセスできるディレクトリ内にファイルを格納し、ファイルが変更される場合は、列挙されたリンクのファイルを追加します。
 - ファイルが変更されない場合は、列挙されたリンクのファイルをアップロードします。Metadata Manager によってファイルが Metadata Manager リポジトリにアップロードされます。
5. リンクルールファイルをアップロードするには、[リンクルール] タブをクリックしてアップロードするファイルを選択します。
6. [OK] をクリックします。

手順 3。リソースのロード

ビジネス用語集のリソースを作成したら、リソースをロードして Analyst ツールからビジネス用語集のメタデータを抽出し、それを Metadata Manager リポジトリにロードします。

1. Metadata Manager で、【ロード】タブをクリックします。
 2. [リソース] パネルで、ロードするビジネス用語集リソースを選択します。
 3. [アクション] > [ロードの開始] をクリックします。
Metadata Manager は、ロードキューにリソースを追加して、ロードプロセスを開始します。
 4. ロードの進行状況を表示するには、[アクション] > [ロードの詳細の表示] をクリックします。
- ロードが完了したら、すべての用語集メタデータがロードされていることを確認し、ビジネス用語の関連カタログオブジェクトを確認します。用語集を確認するには、[参照] タブで [用語集] ビューを開きます。

Metadata Manager ユーザーのロード特権および権限の確認

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ユーザーが [ロード] タブおよび [参照] タブでアクセスできるリソースは権限によって制御されます。ロード特権グループ内の特権を持つユーザーは、特定のリソースに対してアクションを実行する権限が必要です。例えば、ユーザーがリソースをロードするには、リソースのロード特権とリソースに対する書き込み権限が必要です。

アップグレード後に、ロード特権グループ内の特権を持つ各ユーザーの権限を確認する必要があります。リソースに対する適切な権限を持っていないユーザーは、リソースを表示、ロード、または管理できません。

以下の表に、Metadata Manager ウェアハウス内のリソースのインスタンスの管理に必要な特権および権限の一覧を示します。

の特権	含まれる特権	権限	説明
リソースの表示	-	読み取り	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 - Metadata Manager ウェアハウス内のリソースおよびリソースプロパティの表示。 - リソース設定をエクスポートする。 - Metadata Manager エージェントインストーラをダウンロードする。
リソースのロード	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 - Metadata Manager ウェアハウスへのリソースのメタデータのロード。 - データリネージュのために接続されたリソース内のオブジェクト間のリンクの作成。 - リソースに対する検索インデックス処理の設定。 - リソース設定をインポートする。
スケジュールの管理	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 - スケジュールを作成し編集する。 - リソースにスケジュールを追加する。
メタデータのページ	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、Metadata Manager ウェアハウスからリソースのメタデータを削除できます。
リソースの管理	- メタデータのページ - リソースの表示	書き込み	ユーザーは、リソースを作成、編集、および削除できます。

* Business Glossary リソースのメタデータをロードするには、リソースのロード、リソースの管理、およびモデルの表示特権が必要です。

Metadata Manager アプリケーションの【セキュリティ】タブで権限を設定します。権限の設定の詳細については、『*Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Reporting and Dashboards Service

アップグレードしたら、Reporting and Dashboards Service ごとにアップグレード後のタスクを実行します。

Jaspersoft 4.7へのアップグレード

アップグレード後、Jaspersoft アプリケーションをインストールまたはアップグレードし、iReport Designer のライセンスを割り当てます。

Informatica 9.1.0 HotFix 1 または 9.1.0 HotFix 2 から Jaspersoft 4.7へのアップグレード

Jaspersoft アプリケーションをインストールします。次のコマンドを実行し、ドメインをアップグレードする前にエクスポートした Jaspersoft リポジトリリソースをインポートすることができます。

```
js-ant import -DimportFile=<File_Name>.zip -DdatabaseUser=<username> -DdatabasePass=<password>
```

Jaspersoft のインストールについては、『*Informatica Administrator ガイド*』を参照してください。

Informatica 9.1.0 HotFix 3 以降から Jaspersoft 4.7 へのアップグレード

Administrator ツールの [アクション] タブで、既存のコンテンツを使用して Jaspersoft リポジトリをアップグレードします。次のコマンドを実行し、ドメインをアップグレードする前にエクスポートした Jaspersoft リポジトリリソースをインポートすることもできます。

```
js-ant import -DimportFile=<File_Name>.zip -DdatabaseUser=<username> -DdatabasePass=<password>
```

注: js-ant には Bash シェルインターフリタが必要です。Base シェルが使用可能であることを確認してください。

iReport ライセンスの割り当て

1. [スタート] > [Informatica] > [Jaspersoft iReport Designer] を選択します。
2. [ヘルプ] > [ライセンスマネージャ] を選択します。
3. [ライセンスのインストール] を選択します。
4. <Informatica インストールディレクトリ>\clients\iReport-Professional ディレクトリに移動し、jasperserver.license を選択します。

参照データ

アップグレード後に、参照データオブジェクトとファイルのアップグレード後のタスクを完了します。

参照データのディレクトリのリストア

アップグレード前に PowerCenter ディレクトリ構造から参照データディレクトリをバックアップした場合は、現在のディレクトリ構造の同じ場所にディレクトリをリストアします。

ディレクトリを同じ場所にリストアできない場合は、PowerCenter 統合サービスが読み取れる場所にディレクトリをリストアします。構成ファイルまたは環境変数を使用して場所を指定します。

INFA_CONTENT 環境変数を使用して、ディクショナリファイルの親ディレクトリを指定します。AD50.cfg ファイルを使用して、アドレス参照データファイルの親ディレクトリを指定します。IDQTx.cfg ファイルを使用して、ID ポピュレーションデータファイルの親ディレクトリを指定します。

注: PowerCenter 統合サービスは、/default/という名前のディレクトリから ID ポピュレーションデータファイルを読み取ります。ID ポピュレーションデータファイルの親ディレクトリには、/default/という名前のディレクトリが含まれている必要があります。

確率的なモデルのコンパイル

Informatica は、Named Entity Recognition 技術を使用して、確率モデルのロジックをコンパイルします。Informatica は、Named Entity Recognition エンジンを随時アップグレードします。モデルリポジトリの確率モデルが最新の Named Entity Recognition エンジンを使用していることを確認するには、アップグレードした後にモデルをコンパイルします。

確率モデルを含むインストールをアップグレードする際は、以下のルールとガイドラインを考慮します。

- 確率モデルは、コンテンツ管理サービスのホストマシンのファイルに参照データとコンパイルロジックを格納します。参照データがモデルファイルにない場合は、確率モデルをコンパイルできません。Developer ツールで確率モデルをコンパイルできない場合は、直近にモデルを更新した開発者に連絡してください。開発者から参照データを含むファイルのバックアップコピーを入手してください。

- アップグレードした PowerCenter リポジトリに確率モデルを読み取るマッピングが含まれる場合は、PowerCenter ディレクトリ構造内のモデルファイルを置き換えます。現在の Developer ツールを使用して確率モデルをコンパイルし、PowerCenter ディレクトリ構造にモデルファイルを再度エクスポートします。デフォルトでは、PowerCenter 統合サービスが server/bin ディレクトリからモデルファイルを読み取ります。デフォルトの場所にモデルファイルがない場合、PowerCenter 統合サービスは NER.properties プロパティファイルからファイルの場所を読み取ります。

PowerCenter での分類子モデルおよび確率モデルのプロパティファイルの更新

PowerCenter 統合サービスは、プロパティファイルから分類子モデルファイルと隔離的なモデルファイルの設定を読み取ります。分類子モデルのプロパティファイル名は、CLASSIFIER.properties です。確率的なモデルのプロパティファイル名は、NER.properties です。

アップグレード処理中に、PowerCenter インストーラは空のプロパティファイルを以下の場所に書き込みます。

<Informatica インストールディレクトリ>/server/bin

インストーラがその場所で既存の CLASSIFIER.properties ファイルまたは NER.properties ファイルを見つかった場合は、ファイルの名前を次の名前に変更します。

CLASSIFIER.properties.bak

NER.properties.bak

アップグレード前に定義した分類子モデルと確率モデルのプロパティを維持するには、バックアップファイルのコンテンツを使用してアップグレードファイルを更新します。または、アップグレードファイルを削除し、バックアップファイルの名前から bak 拡張子を削除します。

PowerCenter でのアドレス参照データ構成ファイルの更新

PowerCenter 統合サービスは、AD50.cfg ファイルからアドレス参照データの構成の設定を読み取ります。

アップグレード処理中に、PowerCenter インストーラは空の AD50.cfg ファイルを次の場所に書き込みます。

<Informatica installation directory>/server/bin

インストーラがその場所で AD50.cfg ファイルを見つけた場合、ファイルは次の名前に変更されます。

AD50.cfg.bak。

アップグレード前に定義したアドレス参照データの設定を維持するには、バックアップファイルのコンテンツを使用してアップグレードファイルを更新します。または、アップグレードファイルを削除し、バックアップファイルの名前から bak 拡張子を削除します。

プロファイル

アップグレードが完了したら、プロファイルとスコアカードに対するアップグレード後のタスクを完了します。

プロファイルおよびスコアカードの結果の移行

アップグレード後、プロファイルの結果およびスコアカードの結果をプロファイルウェアハウスに移行する必要があります。

プロファイルの結果とスコアカードの結果を移行するには、次のコマンドを実行します。

- `infacmd ps migrateProfileResults.` カラムプロファイル結果とデータドメイン検出結果をプロファイルウェアハウスに移行します。
- `infacmd ps synchronizeProfile.` 特定のプロジェクト内にエンタープライズ検出プロファイルが存在する場合は、すべてのプロファイルに対する文書化された、ユーザー定義の、およびコミットされたプライマリキーおよび外部キーをプロファイルリングウェアハウスに移行します。
- `infacmd ps migrateScorecards.` Informatica Analyst でスコアカードを作成した場合は、このコマンドを実行してスコアカード結果をプロファイルリングウェアハウスに移行します。

データドメインのインポート

定義済みのデータドメイングループとそれらに関連するデータドメインをデータドメインロッサリに追加するには、[ウィンドウ] > [設定] > [Informatica] > [データドメインロッサリ] > [インポート] メニューオプションを使用して `Informatica_IDE_DataDomain.xml` ファイルをインポートします。

データドメインに関連付けられているルールを表示したりルールに変更を加えたりするには、Developer ツールの [ファイル] > [インポート] メニューオプションを使用して `Informatica_IDE_DataDomainRule.xml` ファイルをインポートします。

SQL データサービス用の Informatica ドライバのアップグレード

SQL データサービス用の Informatica JDBC ドライバまたは ODBC ドライバをアップグレードします。

SQL データサービスに接続するマシン上の Informatica ODBC ドライバまたは JDBC ドライバをアップグレードします。ドライバをアップグレードするには、Informatica JDBC/ODBC ドライバのインストールプログラムを実行し、アップグレードオプションを選択します。

ユーザー認証

Informatica ドメインのセキュリティを高いレベルで維持するには、Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定できます。

Kerberos 認証を使用するように Informatica ドメインを設定する前に、アップグレードされたドメインとサービスが予測どおり動作しているかを確認します。ドメイン内ですべてのアップグレードされたサービスを有効にし、すべての処理を実行できることを確認します。さらに、すべてのドメイン機能が予測どおり動作することを確認します。

Kerberos 認証の設定の詳細については、『*Informatica セキュリティガイド*』を参照してください。

Data Transformation ファイルのコピー

Data Transformation のアップグレード後、以前のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じワークスペース、リポジトリ、およびカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (TGP ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (DLL および JAR ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

リリースガイドの確認

『*Informatica リリースガイド*』では、新機能と拡張機能、バージョン間での動作の変更、およびアップグレードした後に実行する必要のあるタスクについて説明します。実装しなければならない可能性がある新機能、または有効にしなければならない可能性がある新しいオプションのリストを表示するには、『*Informatica リリースガイド*』を参照してください。

付録 A

DB2 データベースの DynamicSections パラメータの更新

この付録では、以下の項目について説明します。

- [DynamicSections パラメータの概要, 114 ページ](#)
- [DynamicSections パラメータの更新, 114 ページ](#)

DynamicSections パラメータの概要

IBM DB2 パッケージには、データベースサーバーで実行される SQL 文が含まれています。DB2 データベースの DynamicSections パラメータによって、データベースドライバがパッケージに含むことができる実行可能文の最大数が決定されます。DynamicSections パラメータの値を累乗して、DB2 パッケージ内のより多くの数の実行可能文を許可することができます。DynamicSections パラメータを変更するには、BINDADD 権限を持つシステム管理者のユーザーアカウントを使用して、データベースに接続します。

DynamicSections パラメータの更新

DataDirect Connect for JDBC ユーティリティを使用して、DB2 データベースの DynamicSections パラメータの値を累乗します。

DataDirect Connect for JDBC ユーティリティを使用して DynamicSections パラメータを更新するには、以下のタスクを実行します。

- DataDirect Connect for JDBC ユーティリティをダウンロードしてインストールする。
- Test for JDBC Tool を実行する。

DataDirect Connect for JDBC ユーティリティのダウンロードとインストール

DataDirect のダウンロード Web サイトから DataDirect Connect for JDBC ユーティリティを、DB2 データベースサーバーへのアクセス権のあるマシンにダウンロードします。ユーティリティファイルのコンテンツを抽出し、インストーラを実行します。

1. 以下の DataDirect のダウンロードサイトに移動します。
<http://www.datadirect.com/support/product-documentation/downloads>
2. IBM DB2 データソース用の Connect for JDBC ドライバを選択します。
3. 登録して DataDirect Connect for JDBC ユーティリティをダウンロードします。
4. DB2 データベースサーバーへのアクセス権のあるマシンにユーティリティをダウンロードします。
5. ユーティリティファイルのコンテンツを一時ディレクトリに抽出します。
6. ファイルを抽出したディレクトリで、インストーラを実行します。

インストールプログラムが testforjdbc という名前のフォルダをインストールディレクトリに作成します。

Test for JDBC Tool の実行

DataDirect Connect for JDBC ユーティリティのインストール後、Test for JDBC Tool を実行して DB2 データベースに接続します。データベースに接続するには、BINDADD 権限を持つシステム管理者のユーザー アカウントを使用する必要があります。

1. DB2 データベースで、BINDADD 権限を持つシステム管理者のユーザー アカウントを設定します。
2. DataDirect Connect for JDBC ユーティリティをインストールしたディレクトリで、Test for JDBC Tool を実行します。
Windows では、testforjdbc.bat を実行します。UNIX では、testforjdbc.sh を実行します。
3. [Test for JDBC Tool] ウィンドウで、[Press Here to Continue] をクリックします。
4. [Connection] - [Connect to DB] の順にクリックします。
5. [データベース] フィールドに、以下のテキストを入力します。

```
jdbc:datadirect:db2://  
HostName:PortNumber;databaseName=DatabaseName;CreateDefaultPackage=TRUE;ReplacePackage=TRUE;DynamicSection  
s=3000
```

HostName は、DB2 データベースサーバーをホストするマシンの名前です。

PortNumber はデータベースのポート番号です。

DatabaseName は、DB2 データベースの名前です。

6. [ユーザー名] フィールドおよび [パスワード] フィールドに、DB2 データベースへの接続に使用するシステム管理者のユーザー名およびパスワードを入力します。
7. [接続] をクリックし、ウィンドウを閉じます。

付録 B

アップグレードチェックリスト

この付録では、以下の項目について説明します。

- [アップグレードチェックリストの概要, 116 ページ](#)
- [ドメインをアップグレードする前に, 116 ページ](#)
- [ドメインのアップグレード, 118 ページ](#)
- [アプリケーションサービスをアップグレードする前に, 119 ページ](#)
- [アプリケーションサービスのアップグレード, 119 ページ](#)
- [Informatica クライアントのアップグレード, 120 ページ](#)
- [アップグレードした後に, 120 ページ](#)

アップグレードチェックリストの概要

アップグレードのチェックリストでは、アップグレードを完了するために実行する必要のあるタスクについて要約します。Informatica 製品を複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、このチェックリストを利用して実行できます。

ドメインをアップグレードする前に

ドメインをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- 『Informatica リリースノート』をお読みください。
- 次のタスクを実行して、Windows の要件を満たすようにマシンを設定します。
 - マシンに必要なオペレーティングシステムパッチおよびライブラリがインストールされていることを確認します。
 - マシンがドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。
 - マシンがアプリケーションサービスをアップグレードするためのハードウェア要件を満たしていることを確認します。
 - 環境変数を確認します。
 - 最大ヒープサイズの設定を確認します。

- インストーラファイルを抽出します。
 - インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行します。
- 次のタスクを実行して、UNIX の要件を満たすようにマシンを設定します。
- マシンに必要なオペレーティングシステムパッチおよびライブラリがインストールされていることを確認します。
 - AIX、HP-UX、または zLinux で Informatica をアップグレードする場合は、Java Developer Kit をインストールします。
 - マシンがドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。
 - マシンがアプリケーションサービスをアップグレードするためのハードウェア要件を満たしていることを確認します。
 - 環境変数を確認します。
 - オペレーティングシステムがファイル記述子の要件を満たしていることを確認します。
 - 最大ヒープサイズの設定を確認します。
 - インストーラファイルを抽出します。
 - インストール前 (i10Pi) システムチェックツールを実行します。
- PowerCenter リポジトリをバックアップします。
- 次のタスクを実行して、モデルリポジトリを準備します。
- モデルリポジトリをバックアップします。
 - モデルリポジトリデータベースのユーザーアカウント要件を確認します。
 - 最大ヒープサイズ設定を確認します。
- 次のタスクを実行して、データ統合サービスを準備します。
- データ統合サービス用の電子メールサーバーのプロパティを記録します。
 - データ統合サービスの各プロセスの実行オプションを記録します。
 - すべてのワークフローが完了したことを確認します。
- 次のタスクを実行して、レポートおよびダッシュボードサービスを準備します。
- Jaspersoft リポジトリリソースをエクスポートします。
 - Jaspersoft リポジトリのデータベースユーザーを設定します。
- 次のタスクを実行して、プロファイリングウェアハウスを準備します。
- ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。
 - データベースのユーザーアカウント権限を確認します。
- ネイティブデータベースのバックアップオプションを使用して、参照データウェアハウスをバックアップします。
- PowerCenter ディレクトリ構造のデフォルト以外の場所の参照データディレクトリをバックアップします。
- ステージングデータベースを準備します。
- ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、ステージングデータベースをバックアップします。

- 次のタスクを実行して、Metadata Manager を準備します。
 - Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。
 - ビジネス用語集のエクスポート、ページ、削除を行います。
 - Metadata Manager サービスを無効にします。
 - Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。
- 次のタスクを実行して、Data Analyzer リポジトリを準備します。
 - ユーザーとグループにロールを割り当てます。
 - Data Analyzer リポジトリをバックアップします。
- ドメイン内の ODBC 接続の ODBC データソース名を記録します。
- 次のタスクを実行して、ドメインを準備してください。
 - 管理者グループの名前を変更します。
 - ドメイン環境設定リポジトリデータベースのユーザーアカウント要件を確認します。
 - ドメインをシャットダウンします。ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。
 - ドメインをバックアップします。
- ノード設定を変更するための準備をします。
以下の理由でノード設定の変更を選択した場合は、追加のアップグレード前のタスクを実行します。
 - ドメイン環境設定リポジトリのデータベースのタイプまたはバージョンのサポートが終了した場合は、リポジトリを別のデータベースに移行します。
 - サポートが終了したオペレーティングシステムのマシンに Informatica がインストールされている場合、別のマシンにインストールを移行します。

ドメインのアップグレード

サーバーインストーラを使用してドメインをアップグレードします。サーバーインストーラのドメインアップグレードウィザードを使用してアップグレードプロセスを実行できます。

アップグレードウィザードによって、指定したインストールディレクトリに Informatica ファイルがインストールされます。以前のバージョンのディレクトリにあるファイルは変更されません。

アップグレードウィザードを実行する際に、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードする場合には、ノード設定を変更するオプションを選択します。

関連項目：

- [「ドメインのアップグレード」（ページ 47）](#)

アプリケーションサービスをアップグレードする前に

アプリケーションサービスをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- POSIX Asynchronous I/O を設定します。
Informatica を IBM AIX マシンにインストールする場合、PowerCenter 統合サービスを実行するすべてのノードで POSIX Asynchronous I/O を有効にします。
- Informatica の環境変数を設定します。
- ロケール環境変数を設定します。
ロケール設定にリポジトリのコードページとの互換性があることを確認します。
- Administrator ツールへの接続を保護するために作成したキーストアファイルを使用した場合は、キーストアファイルの場所を確認します。
- ブラウザのキャッシュをクリアします。
- ノード設定を変更して Informatica のインストールを別のマシンに移行するオプションを選択する場合、以下のタスクを実行します。
 - 環境変数を設定します。
 - ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるポート番号の範囲を確認します。
 - ノードのバックアップディレクトリがノードからアクセス可能であることを確認します。
 - PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。

関連項目：

- [「アプリケーションサービスをアップグレードする前に」（ページ 77）](#)

アプリケーションサービスのアップグレード

サービスのアップグレードが必要になるサービスバージョンもあります。サービスアップグレードウィザードを使用して、サービスをアップグレードできます。

アプリケーションサービスをアップグレードするには、以下のアップグレードタスクを実行します。

- モデルリポジトリサービスのアップグレード
- データ統合サービスのアップグレード
- データ統合サービスのプロファイリングウェアハウスをアップグレードします。
- PowerCenter リポジトリサービスをアップグレードします。

- Metadata Manager サービスをアップグレードします。

関連項目：

- [「アプリケーションサービスのアップグレード」 \(ページ 82\)](#)

Informatica クライアントのアップグレード

クライアントインストーラを使用してクライアントツールをアップグレードします。クライアントツールは、指定したインストールディレクトリにインストールされます。クライアントインストーラは新しくインストールしたクライアントツールを、以前のバージョンと同じ設定で設定します。

関連項目：

- [「Informatica クライアントのアップグレード」 \(ページ 86\)](#)

アップグレードした後に

ドメイン、アプリケーションサービスおよびクライアントファイルをアップグレードした後に、以下のアップグレード後のタスクを実行します。

- ドメインに対して次のタスクを実行します。
 - ログイベントディレクトリが正しいことを確認します。
別のディレクトリをログに使用するには、ドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。
 - Informatica のインストールには、新しい DataDirect ODBC ドライバが含まれます。新しいドライバを使用するには、各 ODBC データソースを再作成します。
 - 必要に応じて、SSL プロトコルで保護されたデータベース上にドメイン環境設定リポジトリを設定できます。
 - スコアカード通知を送るには、ドメインの SMTP が正しく設定されていることを確認します。
- クライアントアプリケーションと以前のドメイン間で安全な通信を有効にした場合は、キーストアファイルの場所を確認します。アップグレードプロセスではこれらの場所が更新されません。
- オペレーティングシステムプロファイルを使用したバージョンからアップグレードした場合は、umask 設定値を設定し、STM が書き込むファイルのセキュリティを変更してください。
- 各コンテンツ管理サービスで次のタスクを実行します。
 - ID ポピュレーションデータファイルの場所を確認します。
 - コンテンツ管理サービスを再起動します。
アドレス参照データ、ID ポピュレーションデータ、分類子モデルデータ、または確率モデルデータのプロパティを更新する場合には、データ統合サービスを再起動します。

- 各データ統合サービスで次のタスクを実行します。
 - HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。
データ統合サービスが Web サービスコンシューマトランスマーチャンティンを実行し、かつ認証付きの HTTP プロキシサーバーを使用するように設定されている場合は、HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。
 - ワークフローの実行を計画している場合は、Workflow Orchestration サービスモジュールをアクティブにして、ワークフローデータベースを設定します。ワークフローを実行する前に、サービスを再起動します。
 - データ統合サービスを複数ノードで実行し、各サービスプロセスで異なる実行オプションを設定した場合は、[プロパティ] ビューの [実行オプション] で正しい値が使用されていることを確認します。
 - [要求ごとの最大メモリ] プロパティで、データ統合サービスのモジュールごとに適切な値が使用されていることを確認します。
- データ統合サービスによって実行されるワークフローから通知を送信するには、電子メールサービスを設定して有効化します。
- 各アナリストサービスで次のタスクを実行します。
 - フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。
 - ヒューマンタスクを含むワークフローの実行を計画している場合は、アナリストサービスを選択してヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスに関連付けます。
 - 特権を割り当てます。
Informatica ドメイン内にアナリストサービスが存在する場合は、Access Analyst 特権をモデルリポジトリサービス特権からユーザーに付与する必要があります。ユーザーが Analyst ツールで実行するが必要なタスクに基づき、マッピング仕様にアクセス、マッピング仕様の結果のロード、ワークスペースアクセス、グローバルの管理、設計ワークスペース、検出ワークスペース、用語集のワークスペース、およびスコアカードのワークスペースの各特権を、アナリストサービス特権からユーザーに付与する必要があります。
 - アナリストサービスをリサイクルする。
アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービス、データ統合サービス、コンテンツ管理サービスのアップグレードおよびアップグレード後の手順を完了します。
- アナリストサービスをホストするマシン上の用語集を参照するために、Business Glossary Desktop アプリケーションのポート番号およびホスト名を変更します。
- Analyst ツールおよび Business Glossary Desktop で検索を実行するには、検索サービスを作成します。
- Metadata Manager からビジネス用語集をエクスポートした場合は、用語集を Analyst ツールにインポートします。次のタスクを実行して、用語集をインポートします。
 - Metadata Manager でビジネス用語集モデルにカスタム属性が追加されている場合は、Metadata Manager のモデルエクスポートファイルをインポートします。
 - Metadata Manager でビジネス用語とカテゴリが複数の用語集間でリンクされている場合は、Microsoft Excel ビジネス用語集ファイルを 1 つのファイルにマージし、重複するビジネス用語を削除します。
 - Business Glossary ファイルをインポートします。
 - Metadata Manager で表示する、カテゴリおよびすべての非公開のビジネス用語を公開します。
- Metadata Manager Agent をアンインストールして再インストールします。
- 各 Metadata Manager サービスで次のタスクを実行します。
 - Metadata Manager プロパティファイルにすべてのカスタマイズが含まれるように更新します。

- Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスを UNIX 上で実行する場合は、ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。
 - Metadata Manager サービスを有効にします。
 - Metadata Manager リソースの移行およびリロードを行います。
 - Analyst ツールにインポートしたビジネス用語集に基づいてビジネス用語集リソースを作成します。ビジネス用語集リソースを作成し、必要に応じてリンクルールファイルをアップロードし、リソースをコードします。
 - Metadata Manager ユーザーのロード特権および権限を確認します。
- 参照データオブジェクトとファイルに以下のタスクを実行します。
- PowerCenter ディレクトリ構造から参照データディレクトリのバックアップコピーを作成した場合は、PowerCenter ディレクトリ構造にディレクトリをリストアします。
 - モデルリポジトリで確率モデルをコンパイルします。PowerCenter ディレクトリ構造に確率モデルのファイルが含まれる場合は、そのファイルを現在の Developer tool からエクスポートするファイルで置き換えます。
 - PowerCenter で確率モデルのファイルを使用する場合は、NER.properties ファイルを設定します。
 - PowerCenter で分類子モデルのファイルを使用する場合は、classifier.properties ファイルを設定します。
 - PowerCenter で AddressDoctor の参照データを使用する場合は、AD50.cfg ファイルを設定します。
- プロファイルおよびスコアカードに次のタスクを実行します。
- カラムプロファイル、データドメインの検出、およびスコアカードの結果をプロファイリングウェアハウスに移行します。
 - データドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメインロッサリにインポートします。定義済みデータドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメインロッサリに追加する場合は、Informatica_IDE_DataDomain.xml ファイルをインポートします。
- SQL データサービスに接続する各マシン上の Informatica ODBC ドライバまたは JDBC ドライバをアップグレードします。
- Informatica ドメインのセキュリティを高いレベルで維持するには、必要に応じて、Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定できます。
- 実装しなければならない可能性がある新機能、または有効にしなければならない可能性がある新しいオプションのリストを表示するには、『*Informatica リリースガイド*』を参照してください。

関連項目：

- [「アップグレードした後に」 \(ページ 91\)](#)

索引

D

dbs2 接続
データベース接続のテスト [64](#)
DISPLAY
環境変数 [20](#)

I

IATEMPDIR
環境変数 [20, 29](#)
ID ポビュレーションデータ
PowerCenter 統合サービス [94](#)
コンテンツ管理サービス [94](#)
isql
データベース接続のテスト [64](#)

J

JRE_HOME
環境変数 [20, 29](#)

L

LANG
ロケール環境変数 [20, 29](#)
LC_ALL
ロケール環境変数 [20, 29](#)
Linux
データベースクライアント環境変数 [64](#)

P

PATH
環境変数 [29](#)
PowerCenter のアドレス参照データ [111](#)

S

sqlplus
データベース接続のテスト [64](#)

U

UNIX
データベースクライアント環境変数 [64](#)
データベースクライアント変数 [64](#)
パッチの要件 [26](#)
ユーザー アカウント [63](#)
ライブラリの要件 [26](#)

UNIX (続く)
ライブラリパス [80](#)

W

Windows
パッチの要件 [18](#)
ユーザー アカウント [62](#)
ライブラリの要件 [18](#)

あ

アップグレード
後でファイルをコピー [113](#)
ファイルの事前バックアップ [35](#)
アップグレード エラー
モデルリポジトリサービス [85](#)
アプリケーションサービス
ポート [61](#)
アプリケーションサービスのアップグレード
特権 [82](#)

い

依存関係グラフ
再構築 [85](#)
インストール
ファイルの事前バックアップ [35](#)
インストールの要件
環境変数 [20, 29](#)
最小システム要件 [27](#)
ディスク容量 [27](#)
ポートの要件 [61](#)

お

オブジェクト依存関係のグラフ
再構築 [85](#)
オペレーティングシステム
サポートの終了 [60](#)

か

確率モデル
PowerCenter の更新 [111](#)
次のアップグレードをコンパイル [110](#)
環境変数
UNIX 上での設定 [80](#)
UNIX 上でのライブラリパス [80](#)
UNIX データベースクライアント [64](#)
インストール [20, 29](#)

環境変数 (続く)
データベースクライアント [64](#)

パッチの要件 (続く)
Windows [18](#)

し

システム要件
最小インストール要件 [27](#)

せ

設定
UNIX 上での環境変数 [80](#)

て

ディスク容量の要件
インストールの要件 [27](#)
データベースクライアント
IBM DB2 クライアントアプリケーションイネーブラ [64](#)
Microsoft SQL Server ネイティブクライアント [64](#)
Oracle クライアント [64](#)
Sybase オープンクライアント [64](#)
環境変数 [64](#)
設定 [64](#)
データベース
接続のテスト [64](#)

と

ドメイン
ポート [61](#)
ドメイン環境設定リポジトリ
アップグレード時の移行 [59](#)

の

ノード
アップグレード時の移行 [59, 79](#)
ノード設定
変更の準備 [59](#)
変更プロセスの完了 [79](#)

は

パッチの要件
UNIX [26](#)

ふ

ファイルのバックアップ
アップグレード前 [35](#)
インストール前 [35](#)
ファイルをコピーする
アップグレード後 [113](#)

ほ

ポート
アプリケーションサービス [61](#)
ドメイン [61](#)
要件 [61](#)
ポートの要件
インストールの要件 [61](#)

も

モデルリポジトリサービス
アップグレードエラー [85](#)

ゆ

ユーザーアカウント
UNIX [63](#)
Windows [62](#)

ら

ライブラリの要件
UNIX [26](#)
Windows [18](#)
ライブラリパス
環境変数 [29](#)

り

リポジトリ
データベースクライアントのインストール [64](#)
ネイティブ接続性の設定 [63](#)